

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを考える A1

第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所（シティホール）を模索する」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル④ 様々な市民の視点から「大きな都市ビジョン」を考える。

A1 それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを考える。速報メモ

### ■登壇者・担当者

企画担当 : 手島浩之 公社 日本建築家協会（JIA）東北支部宮城地域会  
 ファシリテーター : 渡辺一馬 NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事  
 手島浩之 公社 日本建築家協会（JIA）東北支部宮城地域会  
 ファシリ補佐 : 佐伯裕武 阿部元希 江田伸輔 JIA 撮影 : 早坂陽  
 報告書まとめ担当 : 佐伯裕武 阿部元希 JIA

登壇者 テーブル A1 :

大澤 隆夫 音楽の力による復興センター東北代表理事  
 紅邑 晶子 一社) SDGs とうほく代表理事  
 伊藤 清市 特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター理事長  
 小貫 勅子 東北大学キャンパスデザイン室  
 馬渡 龍 八戸工業高等専門学校  
 田邊いづみ コピーライター  
 木村 真介 上杉商事 代表  
 安本 賢司 パシフィックコンサルタンツ株式会社  
 洞口 文人 SRM 実行委員会 公務員 TF 代表/公民連携事業研究センター上級研究員

一馬: 前回のラウンドテーブルでも、都市ビジョンが無いという事が課題だという認識が多かった。

仙台には「健康都市」や「杜の都」など様々なビジョンがあった。自分としては、仙台は中途半端なのっぺらぼうな街ではないかと感じる。市民協働のための庁舎のはずなのに、人が入り辛いつくりで良いかは課題だと思う。

小貫: 仙台市の「基本構想」があり、それが都市ビジョンだという事だと思うが、それを基本計画に落とし込んだ時に具体性が見えないのが大きな原因ではないか。伝わってこない都市ビジョンになっている。ビジョンをどう具体化してゆけば良いかが分かっていないのではないか。例えば、基本構想から考えられる市役所のあり方としては、市民協働を可能にする広く開かれた庁舎、杜の都の風土を継承し東北の顔となる庁舎、周辺と一体となり賑わい活力を創出する庁舎、新技術を取り入れ環境負荷の小さい庁舎、交通機関と連携し利便性の高い庁舎、災害時の対応を可能にする庁舎、効率的な市政運営のために部局間の連携が図り易い庁舎、などが上げられ、これをハード、ソフトでどう実現するかということではないかと思う。

一馬: 挙げてもらったのは、H23年度の総合計画のものだと思う。

安本: 都市ビジョンが無いというが、総合計画には目標像が位置付けられている。都市ビジョンとは何かというと、理想のまちの姿だと思う。仙台市はずっと都市ビジョンを持っているが、

それを具体的にまちづくりに活かすこと、都心部の作り込みの仕方が下手だと思う。かつては市電が上手く都心部をネットワークしその外延部に施設が配置されていたが、市電が無くなった際に諸施設のネットワークが壊れてしまった。地下鉄を中心とした公共交通ネットワークを構築しようとしているが、脆弱な公共交通網しか出来ていない。仙台駅前ばかりに交通が集中し、このままでは市役所付近の空洞化が進むのではないか。「市電廃止後、都市空間をどうネットワークするのか」というビジョンが無いのが大きな原因だと思う。「環境共生都市」と言うようなキャッチフレーズでは何も伝わってこない。「行動の姿、活動の姿」をビジョンとすべきだと思う。

一馬：ある意味で、仙台には自分がいた田舎よりもビジョンが見えないと思う。

大澤：確かに市電は良く出来ていたと思う。かつて「健康都市宣言」があったが、行政が示し市民が共有していったビジョンだったと思う。仙塩合併、新産業都市という高度成長的ビジョンがあり、それを背景として、健康都市宣言や梅田川の清掃運動等の市民運動があった。スパイクタイヤ運動も象徴的。最初は行政がつくった掛け声だったが、市民が参加して運動になった。制度論でなく運動論だったと思う。仙台には、それらの誇るべき市民活動の歴史やビジョンがあった。

木村：議論を進めるにあたって、都市ビジョンを、特定の時期において市という共同体のあるべき姿と定義したい。その上で、都市ビジョンはもちろん、その作り方のプロセスや誰の手によって作られるかが気になっている。さまざまな所属コミュニティや専門領域の人びとが協力してゆくためには、ビジネス、教育、福祉、文化、防災、スポーツなど、まずは分野別にビジョンを深めていくことも有効だろう。

洞口：市庁舎が周りに価値を創造しているか。仙台では、駅周辺やアーケードに人が集まっているが、そのほとんどが中央資本で落ちたお金が東京に吸収されている。しかし、定禅寺通や青葉通広瀬川やせんだいメディアテークのような文化的資源がある。これらをきちんと地元が使いこなさず、見て愛でるだけの、市民にとってふれられない場になっていることが課題である。このような公共資源を民間が使いこなし、コンテンツを生み出すことで歩いて楽しい街ができ、回遊性を生み出すことが必要である。その上では、回遊性を生み出すためには公共交通も重要となる。現在、西公園通には公共交通が無く、回遊性を生み出すためにはバス路線を考える必要がある。

伊藤：「とっておきの音楽祭」を市民広場勾当台公園を中心として開催している。そういう意味で障害者の関心も高い。障害者手帳保持者は市内に5万人いるが、これは小学生の数と同数。健康都市宣言と並んで、生活圏拡張運動というものがあった。バリアフリーという名称もない時代にその様な活動を始めたが、73年には全国的にも有名になり視察も多かった。仙台は福祉のまちづくりの発祥の地である。S48年は福祉元年だと言えるが、同時にオイルショックがあり少し停滞してしまった。地下鉄東西線が国交大臣賞を受賞したが、計画設計段階から障害者の意見を取り入れていることも評価された。障害によってトイレの使い勝手が違うが、メディアテークでは当事者感覚を反映させ、実験的に様々なタイプのトイレをつくった。そういった「障害当事者を主体とした福祉の街づくりの歴史」をどう継承し本庁舎に活かしてゆくか、が私たちのビジョンだと言える。

田邊：職業として企業のコンセプト作りなどに関わっており、いつも仙台のコンセプトを考えよう

と思うが、出来ない。ばらばらのコンセプトは言えるが、まとまった「これ」と言えるものが無い。今の総合計画は総花的で優等生的で面白味がない。人の活動の中で物事を具体的にしてくることが出来ていない。今の総合計画に沿って進めば進むほど仙台が魅力のない無国籍なまちになってしまうとを感じる。仙台のアイデンティティは「城下町」だと思うが、残念ながら空襲で何も残らなかった。目に見えるものが無くなったからと言って、市民の心からすべてが失われたわけではない。またその後もことごとく歴史遺産が失われている。都市の景観なり、仙台らしさが目に見えるまちづくりになっていない。公園センターの設計レビューはプロセスが良いように思ったが市民協働まで十分に至らなかった。仙台に来た人が魅力を感じるまちになって欲しい。エリアの性格付けが曖昧なので、都市景観をもっと考えて明確にして欲しい。ビジョンを決めるプロセスの中で市民協働が入る仕組みづくりをして欲しい。

紅邑：「都市ビジョンが無い」という意見にあまり共感できなかった。こうした場でみんなで話し合っていて徐々に醸し出されていくことだと思う。東日本大震災を経験した地域なので、そういった中で仙台を考えることも重要。市民参加・市民協働が盛んなのは仙台の魅力だと思う。仙台のシティセールスが上手くないのではないかと。仙台市の施策（ポイ捨て防止条例）のプロセスなども市民参加で魅力的なものがあるが、あまり知られていない。そういった市民活動の先に仙台のシティホールがあるのではないかと。外国に行くとシティホールはそのまちのシンボルであるが、日本では役場というイメージでしかない。仙台のシンボルであるようなシティホールを実現すべきだと思う。

馬渡：八戸から見て、仙台とは東北の首都だと思う。そういう役割を持つことは是非視野に入れて欲しい。ポータルミュージアム「ハッチ」、ブックセンター、マチニワなど、エッジの利いた建物が八戸にあるが、メディアテークがお手本だと思う。このシティホールもそういう言う役割を果たして欲しい。

手島：福岡の都市ビジョンとして「アジアのリーダー都市福岡」があるが、日本の枠を飛び超えて、元気に成長するアジアの中心に自分を置き、進んでゆく様子をうまくとらえていると思う。「健康都市宣言」や「杜の都」というキャッチフレーズも良いが、その部分の状況を伝えているだけで、複合的なイメージが弱いと思う。

一馬：福岡は市長にも「都市を経営している」という感覚があり、まさにそれを捉えた言葉だと思う。果たして仙台は都市経営をしているのだろうか？

木村：ここでの都市ビジョンは、市庁舎建て替え 10 年後の 2036 年を想定したい。また、こうした議論のゴールの一つは、市庁舎のデザインコンペの要綱に書かれるかどうか。「誰々と、こういう活動をしたい」という考えをまとめ、実現のための条件を自ら明文化する機会としたい。様々な分野のビジョンの中でも、文化面で考えると「日替わりでヒーローが生まれるまち」を提案したい。「ジャズフェスをやりたい」という全国のまちからの視察を実行委員として受け入れているが、実際に出来るかという出来ないと思う。仕組みだけ真似しても難しい。ジャズフェスを見て一様に驚かれるのが、客の反応の暖かさ。初心者にも寛容な仙台の空気がフェスティバルを育てている。

大澤：「楽都」という言葉は、藤井市長が初めて使ったと思う。「文化・芸術は、成熟社会の再生力」というキーワードがある。文化的な都市イメージも重要だと思う。

一馬：文化・歴史から積み重ねてきた景色があると思うが、そういったものを活かしてきていないと思う。仙台は文化と経済などで分断されているような気がする。

洞口：都市ビジョンというと総合計画とかいった話になるが、市民からするとほとんどが読んでいないと思う。それとどうやって市民の活動に落とし込んでゆくかが大切。福岡は地政学的な利点を生かしアジアの中でどう飯を食っていくかという極めて戦略的なポジショニングが明確になっている。仙台では、そういった視点が抜けているのが一番の問題だと思う。その上で、やはり仙台がこの先にどう飯を食っていくか、稼いでいくかという「都市経営」の視点が重要である。仙台の都市経営課題はふたつ。ひとつは、支店経済都市であるがために稼ぎが全て、域外に流出しているため、税収が増えない点と、もうひとつは、基幹産業が卸業と小売業という利率の低く、今後、インターネットで益々下火になる産業で構成されていることである。例えば、サービス業や製造小売のような極めて利益率の高い産業を生み出すことで、大きな都市経営的インパクトがある。百貨店誘致の場合、仙台ぐらい都市規模だと年商 100 億円と言われているが、そのうち、地元には落ちるのは 10%と 10 億円と言われている。僕の仙台の友人はサービス業等で年商 3 億円ぐらい稼いでいる。おそらく、サービス業だと 70% は地元には落ちるので、5 人いれば、百貨店同等の都市経営的インパクトがあることになる。このように、今後の都市ビジョンには極めて論理的に都市を経営する視点が必要になる。

一馬：都市経営的観点で見た場合の視点はひとつの切り口だと思う。

田邊：観光立国へこれだけ他都市が熱心にやっているというのに、仙台には観光物産館もないし、観光政策もあまり見えてこない。ベルリンを見ると、再開発エリアと歴史保存区域を明確にし、観光客に喜んでもらうためにしたたかにまちをつくらせている。西公園から向こうは歴史エリアにするとか、明確にした方がよい。

小貫：今の総合計画は課題解決型のビジョンでしかなく、なりたい未来が見えないビジョンとなってしまう。都市ビジョンはその先が見える話でなければならないと思う。例えば、ニースは、スマートシティの世界のトップテンを目指して様々な主体が様々なことをやっている。仙台でもそのような目標が出来るが良い。大学でもキャンパスを実験空間として捉えるリビングラボラトリーというキーワードが出て来ている。同様に都市も様々な企業等の実証実験の場になり得るし、それを活かした新たな産業につながるような次の仙台の都市像もあるのではないかと。そこに基本構想にもある「市民力」「市民協働」をどう活かしていくのか。そのための市役所本庁舎の在り方はどうあるべきか、といった流れで考えるべき。

一馬：現在の庁舎計画も、現在目の前にある課題問題を全部解決することしか書かれていないと思う。それでは面白くない。

安本：仙台は住むと面白いまちだと思う。人と人との距離が近いので、色々見えるものがある。大阪や横浜と比べても仕方がない。都市規模が小さいこともあり、仙台は「いい意味で混沌としている」と思う。外部経済に対して過敏になる必要はない。内部で経済を回すことを考えた方がよいのではないかと。

紅邑：「いろいろな立場のひとが混沌となる場が欲しい」んだなと思う。メディアテークの 1 階も普段は閑散としているが、シティホールの姿として、様々な人が来て混沌としている場というのも良いかもしれない。

伊藤：「混沌」というキーワードが出たが、とっておきの音楽祭のキャッチフレーズは「みんなちが

ってみんないい」で、それもまさに混沌だと思う。

馬渡：仙台市の予算は、市民の消費総額の十分の一程度らしい。であれば、もっと、市民の消費を刺激することに予算を使っても良いのではないか。そういう実験をやって見ても良いのではないか。

一馬：幾つかの視点は共有されたと思う。「市民力」や「合意形成と行動のプロセス」がこの仙台という都市の力であり、福岡とは違うと感じた。ずっとそういう歴史を積み重ねてきたが、この10年20年は、みんなで目標設定をすることが出来なくなり、行動もちぐはぐになってしまっているのだと思う。

以上

第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所（シティホール）を模索する」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル④ 様々な市民の視点から「大きな都市ビジョン」を考える。

A2 いまここから、大きな都市ビジョンをどう形成するかをみんなで考える。速報メモ

---

### ■登壇者・担当者

企画担当 : 手島浩之 公社 日本建築家協会 (JIA) 東北支部宮城地域会  
ファシリテーター : 渡辺一馬 NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事  
手島浩之 公社 日本建築家協会 (JIA) 東北支部宮城地域会  
ファシリ補佐 : 佐伯裕武 阿部元希 江田伸輔 JIA 撮影 : 早坂陽  
報告書まとめ担当 : 佐伯裕武 阿部元希 JIA

登壇者 テーブル A2 :

増田 聡 東北大学大学院経済学研究科 教授  
遠州 尋美 元大阪経済大学教授  
平野 勝也 東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門  
小島 博仁 (株)UR リンケージ  
青木ユカリ NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター常務理事 事務局長  
笠間 建 株式会社コミュニナ取締役マーケティングディレクター  
大泉 大介 河北新報社 防災・教育室 部次長  
末 祐介 中央復建コンサルタンツ株式会社

---

手島：仙台の都市ビジョンとして、総合計画が機能しているのかどうかという議論がある。都市ビジョンと言うからには、到達可能な未来を指し示し、直接の当事者ではない多くの人々・物事を巻き込んでそこに向かわせる力が必要だと思う。市役所本庁舎建替えに際して必要な都市ビジョンとは何かを考えたい。

笠間：企業のビジョンやコンセプトの開発など、コンサルタント業務を行っている。都市ビジョンと言うからには、最初にミッションを決め、それを実現したいビジョンを見せ、それを実現するためのバリュー、そしてそれを更に具体化した戦略（戦略）を決めるのが経営の世界の手順である。そういうように再整理しても何かが見えてくるのではないかと思う。都市ビジョンと言った時に、専門家同士でも認識のずれがあると思う。

遠州：前回の議論は、都市らしさ、都市の個性、都市のアイデンティティという事だったと思う。都市のアイデンティティを決めるのは、都市の成り立ちなどだと思うが、その成り立ちは様々だと思う。ただ、重要なのが「当事者がそれを自覚し貫く」こと。目の前に突き付けられた問題に対して真剣に市民が議論し決定するプロセスが踏めたかどうか重要だと思う。総合計画のような計画書よりも、具体的な選択を市民がしたかどうか基本だと思う。それがベースにあれば、おのずとビジョンは決まって来る。

手島：プロセスこそが重要だというのはその通りだと思う。

青木：都市ビジョンとは、「こう言ったことを大事にしながら街をつくってゆく」ことで、施策の拠り所となるものだと思うが、市民の意見や参加が組み込まれプロセスを踏みながら共有することで、より効果が大きくなる。「私たちのことを私たち抜きで決めないで欲しい」ということであり、プロセスのつくり方がポイントだと思う。

末：市庁舎建て替えに必要なビジョンとは何か、が課題になっている。ビジョンとは「これから行動しようとする人が行動する際に、目指す姿を示したもの」だと思う。今の計画の中にはそこまで具体的に示されていないことが問題意識として表面化しているのだと思う。在りたい姿へのアプローチは幾つもあり、それぞれの人が自分のやれることでそこを目指せばよいが、そのどこかの到達地点を示したものがビジョンで、そのビジョンが共有されていれば、バラバラの方法でもそこに辿り着ける、ということであり、ビジョンが共有されていなければ、それぞれの打つ手が場当たりのでしかなくなる、ということだと思う。ビジョンが明確であれば複合的に解決できる筈だったのに、無ければ単発の課題解決しかできない。現在示されている計画やコンセプトにはそこまでの力強さが無いことが問題だと思う。

小島：賑わいを醸し出すのに、民間の力は重要。仙台市は総合計画という都市ビジョンを持っているが、それが見えないのが課題。総合計画で示されている「市民生活の都市像」を実現するために基本計画をつくり、それを具体化するために実施計画をつくっている。総合計画では分野別になっているので融合されておらず総合化されていない。総合化しなければビジョンではない。市役所周囲にどう影響を及ぼすべきかについて、総合計画に入っていない。エリアごとのビジョンをはっきりと打ち出していない。H26年3月に都市マスタープラン地域別構想（都心地区・泉中央地区・長町地区）を策定した。その際市民を巻き込んで議論し修正を加えながらまちづくりを進めるための出発点（問題提起）と位置づけようと試みたが、従来型の行政計画に位置づけると修正が出来ず、うまくいかなかった経験がある。総合計画では総花的でエッジの利いたものになりづらい。遠州先生の言うようにプロセスこそが重要だという意見はその通りだと思う。

大泉：市役所建替えを一市民として聞いた時に、「粛々と建替えるのだろうか」と思った。こう言った場でより良いものをつくろうというのは分かるが「たかが役所」だとも思う。こう言う取り組みで議論を進めて行っても、悪く言うと「行政職員の頭を超えない」のではないかとと思う。良いマインドや能力を持った職員やエッジの利いた職員が居なければ、「それ以上」にはならないと思う。市民に共有する、と言ってもそれもある意味で幻想でしかないようにも思う。あえて斜に構えると、そういう事だと思う。

手島：建築に携わるものとして少し弁護をさせてもらおうと、明治以降、全国に小学校が出来たが、それはその地域の住民たちが自分たちで資金を出し合って建てて来た歴史がある。建築する際には、地域の仕組みや意思決定、具体的に「誰がこの地域をつくり支えているか」など、日常では見えないことがはっきりと見える。日常ではまちや行政の仕組みは見えないが、建設するプロセスでは、社会の在り様が断面として象徴的に見える。震災復興で何故合意形成が重要かと言えば、その地域や集落の仕組みが見え、住民に共有されるから。その時に参加し、「自分の意見がどのように全体に活かされたか」を実感した住民は、その後も一生懸命集落を支える力になっている。震災復興を経験した専門家として、そういったことをこれからの社会づくりに活かしたいと思っている。

平野：「ひらがなまちづくり」の時代に、行政にできることは殆どない。人口減少時代には規制は有効には機能せず、都市計画法も殆ど役に立たないと思う。まちづくりは、これまでと違い、全く新しい時代に入っていると思う。これからは民間主導のまちづくりが極めて重要。「敷地に価値無し、エリアに価値あり」という言葉がある。まちづくりは相乗効果が重要なので、敷地単体では決めきれない課題が多い。それを乗り越えるのが都市ビジョンである。バラバラの人たちがビジョンを共有し動いてゆくと、エリアに価値が生まれる。市役所はまちづくりにおいて、発生集中交通量が多く、人を集める重要な施設。

増田：仙台市は最大の大家で最大の地主でもある。決定権を直接持っているので、まちづくりのプレイヤーとしても大きな力を持っている。この機会に解決できることも多い筈。また、市役所の現地建て替えについての異議をたまに耳にするが、明治維新以降、県庁市役所があり続けた場所を移動する積極的な理屈が無いと思う。また、仙台は、戦災復興を振り返る機会もなく、ここまで来てしまった。かつては新産都市構想というビッグビジョンもあった。また、新聞報道があったが、次回くらいには、通称黒ビルを含め、周辺のビルオーナー・土地所有に関わる方々にもこういう場に参加頂いて、このエリアをどうするかという議論に加わってほしい。

遠州：プロセスと同時に、現実突き付けられている問題を正面から隠さず議論するプロセスが重要だと思う。これまでも、市電の廃止や震災復興での決め方についても、議論できない仕掛けをつくってしまったのだと思う。今でも原発再稼働や、水道事業民営化などの課題がある筈。そういうことを正面から議論することが重要だと思う。市役所の話で言うと、そういう議論が出来るような場を、これを機会にこの新市庁舎につくるかどうか重要だと思う。

手島：あまりうまくいかない事例が重なると市民の方々が誰も信用してくれなくなるので、地域の実務家としては、とにかく成功例をつくるのが重要だと思っている。震災復興でもそうで、多くの復興が住民合意の無いまま進められていると聞かすが、ひとつでもそういった課題を乗り越えた成功事例をつくってゆくことが次に繋がる。全体としてそれを俯瞰して眺めてまとめてゆく検証作業は、有識者の先生方にお任せするとして、地域の専門家としては、成功事例をひとつでも作ることが重要だと考えている。そういった意味でもこの市役所建替えプロジェクトは重要だと思う。

平野：遠州先生の「今そこにある危機」が重要だと思う。路面電車がなかったのでスカスカのまちが出来たとも言える。また地下鉄の路線が二本とも代表駅（仙台駅）で繋がれている事例はない。全国の事例を見ても中心市街地で連結されるべきと思う。交通網を再度考え直す必要があると思う。この市役所を建て替えるのであれば、旧市街地をどうまとめるかとセットで考えるべき。

小島：都心を見た場合に、仙台駅西口では、晩翠通から西側には人は行かない。かつて西公園には市民を惹きつけるコンテンツがあり、路面電車がかった。反省としては、かつて都市マスをつくった時、結果として大手中央資本を期待するような記述が目立ってしまったが、立町や大町で市街地再開発事業をしようとしても無理。ジャスフェスもページェントも定禅寺通りの旦那衆がはじめた。市民力を生かしたまちづくりが重要。現在では市民力を抜きにして考えるのは無理だと思う。市役所本庁舎も行政のヘッドクォーターとしてだけの機能で作ってしまうと、市民との接点はほとんどなくなってしまう。そうではなく、市民広場は市民活動



の拠点であるし、そういう視点で、市役所を切り口とした都市ビジョンを考えることが重要。それをどうやって行政計画に位置付けるかを考えなくては、何も実現しないと思う。青葉通りを再整備したが、藤崎から西側には人通りが増えてはいない。道路等公共施設の整備も市民活動との融合が無ければ賑わいといった効果が生まれないことが分かった。デザインよりも市民力・市民活動がキーワードだと思う。行政だけでビジョンを実現させようというのは限界だと思う。

手島：ほかの都市でもこれくらい行政と市民が一緒になって進んで行く事例はないと思う。福岡の標語「アジアのリーダー都市福岡」は、みんながてんでバラバラにそこに向かって行くような活力あるイメージだと思うが、仙台は、福岡のやんちゃなイメージとは違うと思う。行政と市民、NPO が一緒になって議論して何かを実現してゆくような成熟したイメージではないか。

青木：市民の発意を、包容力を持って受け止めるような空気があると思う。元気のいいリーダーが強引に牽引していくというよりは、お互いの重なり合いを確認しながら、緩やかに合意を図ってゆくような社会なのではないか。そういう合意形成が多様に行われているような社会なのではないか。それぞれがそれぞれらしく出来ることを応援できるような社会的土壌がある。しかし、そういうイメージをどういう言葉で都市ビジョンとして表現したらよいかは良く分からないが、議論を重ねる中でそう感じる。

一馬：遠州先生の「差し迫った危機の中で、どう向き合い、何を選択するか」という問いがあったが、「みんなで目標を設定して何かを選択する」プロセスを、市役所建替えにどうインストールできるのか、を考える。福岡は、市で大きな金を出してシンクタンクを官民でつくり、目標設定をし、役割分担しながらインバウンドを呼び込んだという話がある。そういうダイナミズムを仙台でしなくても良いと思うが、「どうやって都市を強くするのか」という作戦を決められるものが無いと思う。「我々市民がやっている小さいことを外に開いてゆくこと」を大切にしながら、遠州先生の言う「選択をする場」がこのまちにはない、あるいはそれを避けていてもこれまではやれてきたのではないかと感じる。

笠間：福岡の話が出たが、マーケッターとしては、フレームワークが重要だと思う。松下電機だとミッションは「誰でも家電を買えるようにする」で、ビジョンは「家電がまるで水道のように買えるようにする」バリューは「良いものを安く」であり、戦略は「家電販売店を全国につくり販売網をつくった」ことである。これを「水道哲学」としてブランディングした。それは彼らの姿勢を一言で分かり易く表現できている。仙台市の総合計画が知られていないのは、そういうものが無いからだと思う。都市ビジョンと言った時に、行政のものなのか、市民みんなが持っている「仙台はどういうポジションなのか」というものなのかで、全然話が違う。行政計画であれば、色々と具体的政策に置き換えられる。

末：市役所は仙台のまちづくりにとって、やはり重要な施設だと思う。仙台市は、リノベーションまちづくり構想などがあり、そういう意味ではビジョンもあると思う。ただ、新総合計画の策定はまちづくり政策局、リノベーションまちづくりは都市整備局、本庁舎建替えは財政局がやっている。このまま行くとバラバラに取り組むことにならないか。昨年の本庁舎建替え基本構想で「都心をどうしてゆくの」にほとんど触れられていないのは問題だと思う。複合的に課題が解決できるはずなのに、そうならないことを危惧している。具体的な都

心部のまちづくりの施策としては「グランドレベルが解放されたまちづくり」が重要だと思う。そのあたりをリノベーションまちづくり構想でも謳っている。地面のレベルに様々な活動が表れて来ることが重要。例えば、マンションの1階に様々な活動が通りに現れたり、市庁舎の1階レベルが市民広場とつながっていたり徒歩や自転車で回れるといったことを、交通の面からも都市整備の面からも、市庁舎のような公共建築のつくり方の面からも、「歩いて楽しいまち」というビジョンに向かって作るべき。そういったきっかけになる筈の大きなプロジェクトなので、財政局には、建築以外の分野と連携して包括的に取り組んでほしいと、仙台市民として思う。

手島：縦割りは行政の役割分担であり、精緻な施策のためには重要だと思う。縦割りの行政だけでなく、それぞれがばらばらの民間も含めて「10年後にここに辿り着きましょう」というのが都市ビジョンだと思う。そういう意味で、末さんのまちづくりのビジョンは具体的でかつ実現可能なものだと思う。

大泉：こう言った施設の建替えが生む様々なインパクトは大きいと思うが、一方で、素人の考えでは専門家の意見には叶わないとも一方では思う。そういう専門家の力と、ここで言われている「市民みんなで共有すべき」だとか「みんなの意見を拾い上げてつくりたい」という考え方が上手く噛合う方法を考えたいと思う。先ほどからある、震災復興の現場での合意形成の話は、それこそ「非情な現実を突きつけられた中での選択」であり、なので、本気の議論が出来た地域があったのだと思う。この市役所建替えは市民にとって、みんな関心があるが、でも半分他人事のような部分がある。市民の本気度を喚起するために何が出来るのか。報道としては、すごく駄目なプロジェクトかすごく素晴らしいプロジェクトでないと、スルーしてしまうような気がする。我々メディアとしては、議論の場にならなくてはならないし、専門家だけの議論にならないように、どういう表現が良いか専門家と考えなければならぬと思う。

手島：岡山出身だが、震災復興の現場を見ていろいろと考えた。福岡も関西もそうだが、個人が自分の利益を追求してどんどん勝手にやっていくことが凄く得意だと思う。震災復興を見ていて、東北の強さは、共同体の中で何か一つの結論を選択することだと思う。関西ではああいうことは絶対できない。それがこの地域の力だと思う。西の方では、個人個人の自由度を上げることが彼らのポテンシャルを最大限にすることだし、「こっちに行くとならざる」と誰かが指し示せば、みんながそこに向かって走り出すと思う。それが福岡などの都市ビジョンだと思う。しかし東北・仙台ではそうではないと実感する。東北の人には、そういう東北の強みが見え辛いのではないか。そういう強みをこの市役所建替えの機会に表現出来、活かすことが出来れば今後の地域社会にとってすごく大きな財産になると思う。

一馬：今必要な都市ビジョンは、総合計画の話なのか、エリアのデザインの話なのかについて。総合計画がまちの最上位ビジョンになっているのは、個人的には違うと思う。総合計画は市民も巻き込んで決めた大きなビジョンの中の行政計画である、という事であれば、役割分担も出来ていて良いと思う。一方で、あの網羅的な計画が出来るとの市民力があるかという、それも疑問に思う。結局、突き詰めて言うと「都市ビジョンは首長選挙でしか選択しできない」という極論も出て来るが、そうでしかないとなると「寂しい話」だと思う。どうやったら都市ビジョンをつくれるのか、或は、どうやったら都市ビジョンを市民が選択できるのか。

選挙や沖縄の住民投票のようなやり方でない方法で、都市ビジョンが出来る方法はないのか。女川はあれくらい小さい規模だから出来たのか、仙台は百万人いるからやめようという事になるのか。

平野：こういう中心市街地づくりの議論をするときに、このエリアの業をされている方々であり、市民全体が対象でないと思う。影響する範囲で商売をする連中に絞って話をすると合意も取りやすいと思う。またそうしてビジョンを共有した彼らがアクションを起こすことでまちも変わってゆく。

遠州：大きな都市ビジョンと市役所のリニューアルをあまり直接的に結びつけないほうが良いと思う。水道民営化の問題は、右肩上りの社会の中で、借金してインフラを整備し、新たに来る人にそれを負担させる仕組みだった。過剰なインフラ整備と人口減少に転じる状況でどういう未来があるかという事だが、宮城県知事は民営化を打ち出した。水道事業は「命の水」で「典型的な公共サービス」である。一度民営化してしまうと自治体に人材がいなくなり二度と戻せない。今いる人と、ここから去る人にお金を負担させる仕組みをつくる必要がある。第一には、そういう選択を迫られていることに対しての議論を市民がすることが重要だと思うし、次の段階として、市役所にそういった議論が出来る場をどうつくるかだと思う。自分としては、行政の仕組み自体を変えるべきで、地域別の総合行政をやるような仕組みが必要だと思う。

笠間：建て替えるという事が所与のものとなってしまっているが、庁舎を使う人のニーズやウォンツをちゃんとリサーチする必要があると思う。行政の作る要望アンケートは大体アリバイづくりに使われてしまう。アンケートをしっかりと設計すれば、良い情報が得られると思う。

小島：民間の役割と行政の役割があり、まちづくりの中で行政の役割は少なくなっている。まちなかの自動車交通量は以前の八割ぐらいに減ってきているし、道路もそんなに必要なくなっている。市民感覚で考えるべき。市民と行政の役割を見ると、民間は市民生活の欲求を追及するので良く、行政の役割は、それを都市経営的課題に置き換え、行政用語に変換し、位置付けることだと思う。今の総合計画は、行政用語ばかりで分かり辛い。例えば事業者の「こういう商売をやりたいんだ」という声を、行政的に変換し位置付けることが重要。

手島：震災復興を見ていると、上位計画との整合性が重要視され、上位計画が無ければ会の計画がつかれないような話があった。

小島：そんなことはないと思う。今の総合計画になくても、状況を見て下位計画をつくり、その後総合計画の策定期間にまたそこに入れ込んでゆく、という事もある。

平野：復興計画は、財務省に説明しやすい資料が欲しかったから、そうただけだと思う。日本ではボトムアップでいろいろ決まってゆくことが多く、逆にそれが良くないとの批判もある。日本の総合計画や都市マスタープランは、プロジェクトベースで動いているのが実情。

末：小島さんの話に付け加えると、仙台都心部のまちづくりのビジョンについて、「中身が見えない」ということと「中身が無い、乏しい」という話は違うと思う。現在の仙台の都心部のビジョンについては、リノベーションまちづくりの計画の中で書かれているとは思っているが、それほど力を持っていないと思う。「もっと歩行者中心のまちになると良い」というようなビジョンがあるとすると、市民が見て実感できるようなやり方で表現すべきだと思う。空間の計画として表現されていない。洗練された形、工夫した形でもっと見せてゆくことが必

要で、それによって市民を巻き込んだ議論になると思う。お金と人員を持ち、市の経営の専門家である市役所が、他の専門家と協働してつくるべきだと思う。それをベースに、市民や事業者が同事業を展開してゆくかを考えるのだと思う。

手島：建築の専門家からすると、今後どのように進んでゆくかがある程度見える。基本構想や基本計画では新市庁舎がまちの中でどういう役割を果たすのかについて白紙の状態だと思うが、そんな中で今後、庁舎の設計者がそれをつくってゆくことになる。そんなときに仙台市の側に明確なビジョンが無いと、無いままに中心部の核をなす一角がつかられてしまい、「仙台の中心市街地が大きな都市ビジョンの一部を形成する大きな機会」を失ってしまうのではないかと思う。これから「私たちの仙台はこういうまちになりたい」というビジョンについての合意を何年か掛けてゆくって行き、その後設計者が選ばれた時にうまく連携し、大きな都市ビジョンを形成する一部をつくる、ということが、現実的に選択できる方法だと思っている。そういうゴールがあるとして、今我々が実現可能な都市ビジョンに取組んでいないと、2、3年後に来るチャンスを逃してしまうことになる。なので、この大きな都市ビジョンについては、今後何回かこのラウンドテーブルで取り組んで何とか実現してゆきたい。

平野：幾つかの段階に分けて、ビジョンを考える必要がある。市庁舎の立地検討から考えられるのか、場所が決まった後に限られたエリアの中で考えるのであれば、交通をどう考えるのか、交通動線と市役所の関係、など交通局と一緒に考えてゆくことが必要。土木の世界にはそういった専門家が不足している現状も課題。また景観形成の立場から言うと、一番町通からの正面性を意識して欲しい。

青木：音楽ホールや震災メモリアル施設など、今後まちなかに整備される施設との関連や連携をどうつくってゆくのかも気になっている。それを考えることでも、都心部のビジョンに繋がってゆくと思う。

増田：手島さんの話では「大きな都市ビジョンをつくる機会」だとのことだったが、笠間さんの言う、ミッション・ビジョンのどのレベルでつくるべきかも気になるところ。これまでも商工会議所が都心回遊性を高める計画を何度も出していたり、仙台総研も議論したりしているが、何故かその後に繋がっていない。そういったこともきちんとレビューして検証しなくてはならない筈。どこかで大学がやるべきだろうか。また今回市役所を集約するが、市内にたくさん空き地が出来ることになる。それをタネ地にどうまちづくりをしてゆくかも、いずれ議論をしなければならない。市民会館や音楽ホール、大学病院前のバスプール、戦災復興記念館もあのまま残すのかなども、公共施設全体のプランもそのうち必要になる。

大泉：増田先生から「今までのまちづくりの総レビュー」のような話があり、大学の役割かな、との話があったが、やはりそれは行政の大きな役割だと思う。縦割りとは言え色々な仕事を担ってくれているが、「総レビュー」なので、縦割りを超えて取り組んでほしい。私としてはその縦割りを乗り越えるのは、機構でなく、職員のマインドや視野や感性だと思う。そういう職員が増えれば増えるほど、そういう「総レビュー」の総合的な視点に近づくのではないかと思う。職員の皆さんには「自分たちのちょっとした仕事で市民の生活や人生を大きく左右する」ことを念頭に入れたマインドで取り組んで欲しい。そしてそれを行政に任せきるのではなく、自分の専門分野については、その専門家として必要な意見を言えるような関係を構築して欲しい。それを業者との癒着だなどと詰らないことを言うべきではない。飲み会や様々

な交流でその垣根をもっと超えた方が良いと思う。

小島：リノベーションまちづくり計画は、計画策定のプロセスも公民連携のまちづくりとして取り組んだが、実は行政計画に位置づけていない。行政計画に位置付けるという事は財政的に裏付けをつくるという事だが、同時に庁内で足の引っ張り合いになり面白くない計画になる側面もある。また、総花的になってしまい何をやりたいのか良く分からないものにしかならない。「こういうまちをつくらう」という問題提起型の計画にした。出発点だけをつくり、「まちづくりを民間の力に委ねよう」という事だったと思う。今の時代は、社会基盤の整備などという建設系の言葉はキーワードにはならない。雇用や子育て、起業、若者の定着、人材育成、経済的な域内循環などが課題となっている。

末：あちこちに分散している市有地をどうマネジメントしてゆくかだが、これについても今回の建替えプロジェクトの中で議論して欲しい。本来、複合的に考えて解決できるはずのものひとつだと思う。市民参加型のまちづくりをやるという事になった時に、その部局を高層階の上に配置してもダメだと思う。例えば、東北大の学生課題で提案させたものを見たが、市民参画の部門をメディアテークに配置したものがあつた。市民参加が仙台らしさなのであれば、その行動が見える低層部にその部署があり、市民から具体的に見え参加できるのが自然だと思う。メディアテークにそういう部局を配置すれば、メディアテークの有効活用にもなり、定禅寺通りの地面レベルにそういう市民協働の風景が見えることになる。そういう部分も含めて考えているのか建築物だけの議論なのかが気になる。そういうように複合的に解決できる課題がこの市役所建替えプロジェクトにはあると思う。

手島：前回のラウンドテーブルでも市役所機能のまちなかへの分散配置というアイデアが出たが、それに本気で取り組むのであれば、事前にその効果を検証するべきだと思う。現在、二日町界限に市役所機能が分散配置されているが、それによって「まちが活性化する効果」があるのであれば、二日町界限にその効果が表れている筈。

平野：末さんの話は、メディアテークなどの空き室の効果的利用なので、確実に効果があると思う。また、仙台市はこの大きなプロジェクトに際して、分野横断で優秀な人材を集めスペシャルチームで臨んだ方が良いと思う。行政的な位置付けとしては縦割りでも、人材を分野横断的に配置することで、それを乗り越えることが出来るかもしれないと思う。

大泉：末さんや皆さんの話だと、このプロジェクトはただの庁舎ビルの建て替えでなく、まちづくり全体の話だと思う。そういう話を聞いてワクワクする市民も多いと思う。そういう気持ちを喚起させるメッセージではなく、単なる市役所建替えとしてしか市の態度が表明されていないことが残念だと思う。参加者発言者が広がるような大風呂敷を仙台市が広げてくれると良いと思う。

手島：末さんや平野先生の話聞いて思うのだが、女川のような小さな町では小回りの利いた政策が出来ると思う。小さな町での決定と仙台のような都市での決定は違うのではないかと。様々な問題を複合的に解決するべきだとは思いますが、最終的に決着する人に説明する際に、イエスカノーか程度のシンプルな説明でないと通らないのではないかと。

小島：私が市役所に居た時には、このラウンドテーブルのような試みは出来なかった。そういう意味で、市の体制としては良い体制で取り組んでいると言えるのではないかと。ここでの議論をどう位置づけしてゆくかがこれからの課題だが、基本計画検討委員会とうまく相談し連絡し

いまここから、大きな都市ビジョンをどう形成するかをみんなで考える A2

て行くしかない。

以上

第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所（シティホール）を模索する」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル⑧ 「これからの仙台を担う仕組み」を公共・市民協働の側面から考える。

B1 市民協働・新しい公共の在り方から「市役所」を考える。速報メモ

---

### ■登壇者・担当者

企画担当 : 栗原将光 佐々木昌喜 宮事協  
ファシリテーター : 坂口大洋 仙台高等専門学校建築デザイン学科  
遠藤智栄 地域社会デザイン・ラボ 代表  
ファシリ補佐 : 栗原将光 佐々木昌喜 宮事協 撮影 : 今野純子  
報告書まとめ担当 : 栗原将光 佐々木昌喜 宮事協

登壇者 テーブル B1 :

新井 信幸 東北工業大学 工学部 建築学科 准教授  
川嶋 吉幸 株式会社 川嶋酒販 代表取締役  
真壁さおり 宮城県サポートセンター支援事務所  
田澤 紘子 せんだい3.11メモリアル交流館  
氏家 滉一 株式会社 都市設計 取締役  
武 修司 仙台市子ども会連合会副会長・元仙台市営繕課長  
中居 浩二 宮城県建築士事務所協会 専務理事

---

坂口：それでは始めたいと思います。よろしくお願ひします。このテーブルは、これからの仙台を担う仕組みということで、ファシリテーターは前半が私、後半が遠藤さんです。前半が協働全般について、後半では議会との関係が含まれます。全体としてAテーブルが理念的な話で、Cテーブルが実践的な話です。Bテーブルは、AとCをつなぐ協働の在り方をいろいろな観点からご意見いただければと思っております。協働にも様々な部分があると思うので、ご参加いただいている方々に5分程度で自己紹介と協働の実践、或いは実践を行う中で主に重視していることやこのような課題に対して取り組もうとしている或いは過去の実績でもいいのですが、そのようなことをご紹介いただきたい。市役所の建て替えがメインの課題ではあるが、少し横において仙台というまちで今どういった協働が行われていて、それはどのような課題を解決しようとしてどういったことができているのかということ、このテーブル共有できた段階で、次に市役所を考えると、これ自体もある意味市民協働の場かもしれませんが、そういう点についても意見をいただければと思います。

佐々木：企画を担当する佐々木です。仙台市には市民協働事業提案制度というのがある。簡単に概略を説明します。身近な課題について皆様からのご提案を基に、仙台市と協働で解決していく制度です。団体の専門性やネットワークを活かし、仙台市とともに取り組んでいくことで地域のニーズに応えられることが見込まれる事業を募集しています。募集する事業は、分野やテーマは問いませんが、次のすべての要件を満たすこととあるため、今日の議論とは関係

ないにしてもこういった制度があるということをお伝えしたいと思いました。

その要件は、

- 1 公益的、社会貢献的な事業であり、地域の課題解決に資するもの
- 2 本市と提案団体が協働で行うことにより、具体的な効果・成果が期待できるもの
- 3 協働の役割分担が明確かつ妥当で、相乗効果が期待できるもの
- 4 先進性、先駆性、独自性がある取組であるもの
- 5 事業計画及び予算の見積もりが適正であるもの

この5項目すべてを満たす必要があります。

また、対象とならない項目は次の通りです。

- 1 営利を目的としたもの
- 2 特定の個人や団体のみが利益を受けるもの
- 3 課題把握が不明確で、事業内容が具体的ではないもの
- 4 一時的なイベントなど、特定の期間にのみ行われるもの
- 5 仙台市の他の助成制度等で資金の提供を受けているもの
- 6 公序良俗に反するもの
- 7 法令、条例等に違反するもの などが該当します。

仙台市としても市民協働という分野に注力しようとしています。本日の意見交換の前に述べさせていただきました。

坂口：このような市民協働制度につなげることもありますし、今日話した意見は模造紙に記録します。素晴らしい意見はスタッフの判断でフェアプレー賞として青の付箋。この場の意見で青が増えればいいなあと考えている。まず、川嶋さんから順に自己紹介とワインについてもいろいろな取り組みをされているともいますが、お酒の販売についても地域を含めていろいろな試みをされていると思うので、そのあたりについてお話しいただければと思います。

川嶋：2011年7月に独立した。東仙台で日本酒とワイン専門の酒屋を開業した。17年4月に2号店を立町に同じスタイルではじめた。立町は東仙台に比べるとだいぶ活気のある街だとイメージしていたが、実際に商売を始めてみると活気がないというイメージ。立町に人が集まらなると自分の商売もうまくいかないと思い、イベントを企画するようになった。去年は初めて西公園でマルシェを開催し500名程度が来てくれた。2回目はどんと祭に開催し600名ほど。それがきっかけで今回市役所から声がけされた。ただし、建物とか街づくりは素人なので何を話していいのか戸惑っている。よろしくお願いします。

中居：現在、宮城県建築士事務所協会の専務理事として働いている。建築設計事務所に努めたり、長い間土木のコンサルタントに勤務し、都市デザイン部門に所属していた。仙台の街の道路、公園や建築もデザインしてきました。協働ということでこれまで何やってきたのかなと考え



ると、以前仙台プランナーの会というのを設立しました。10年ぐらい活動した。当時は東北大学が青葉山に全部移転する前だったので、移転となる前に青葉山というものをきちんと考えようということで、年に2回程度、有識者を呼んでシンポジウムなどを行っていました。建築については、行政と専門家が集まって仙台宮城マンションネットワークという会があり、宮城県内のマンションの管理組合の方々のために支援できることがないか、年に2回アエルを会場に開催した。つくづく感じるのは、先程佐々木さんから制度の紹介があったが、自身も本日を迎えるにあたり、協働について仙台市のホームページなどをのぞいてみた。そうすると協働に合致するような助成や事業が沢山あるが、それが市民にどれだけ公開されて認知されているのだろうか？過去の自分が開催した催しものも含めて、参加者はせいぜい100人。2回3回実施してもメンバーは変わらずが現状。今回のイベントもそうだが、どれだけ一般の人に参加いただいて議論を盛り上げるかということが今後の課題だと感じる。

坂口：協働することも大事だが協働をどうやって広げていくのか。事業する前に協働の場を作ってどう展開していくかということであったかと思う。

真壁：宮城県サポートセンター支援事務所というところを登壇者は分からないと思うので、組織を説明する。東日本大震災の後、津波被害が大きかった13市町に被災者支援であるサポートセンターが設置された。気仙沼、南三陸、石巻辺りはそれぞれ1か所のセンターでは対応できず、県内に全部で60か所以上のセンターが設置され、そこに支援員や相談員と呼ばれる方が多い時で1,000人以上配置された。この方々は、宮城の場合特徴的なのは被災当事者自身が支援員という立場になってプレファブ仮設やみなし仮設などを訪問し支援してきた。皆さん福祉の専門の仕事をしてきた方々ではなく、もともと水産加工業などに従事していて、わかめや下記の仕事に携わっていた女性たちやこれまでペンなど持たないで仕事をしてきた方が、被災者支援の仕事をするにあたり、特に研修の授業などのバックアップが必要であった。宮城県が各地のサポートセンターをバックアップする機能を造ろうとなって2011年9月にサポートセンターを支援する事務所ということで宮城県サポートセンター支援事務所が設立された。この事務所を宮城県社会福祉士会が受託し、運営している。私は沿岸の市町を訪問し、復興庁の総合交付金を活用し、各地のサポートセンターの運営が継続しており、市町の行政や市町社会福祉士会の皆さんと打合せをし、2020年復興庁もなくなるので、そこに向けて平時の体制スムーズに移行できるように市町の皆さんからの相談を受けたり、全国の先進事例を視察に行ったりしている。本日は、被災を受け福祉や生活に困難を抱えている人たちの支援をテーマの中で、弱者にとってのシティーホールのかわりなども話していいのかと思う。協働という視点では、県と福祉士会との共同はもちろんだが生活再建という大きな目標に向け、あらゆる協働をしていくということが大きなテーマなのでそこに日々悩みながら仕事をしているのでそういう点についてもhな足ができればと考えている。震災の当時、仙台宮城NPOセンターに所属し、遠藤智栄さんが先輩ということもあり、そちらの角度から協働についてお話をしたい。

坂口：直接的な支援の在り方と同時に、中間支援というか協働そのものを支えるところについてもご意見いただければ。

氏家：仙台本社、東京にも事務所を持つ2拠点で経営している。43期を迎え、設計部門とブランディング部門で、ハードとソフトを組み合わせた街づくりやエリアづくりのできる会社を目指

して経営している。東京では丸の内を中心とした企業、地域のブランディングの仕事、仙台では、仙台市市民局協働まちづくり推進部市民プロジェクト推進担当から委託を受け、WEプロジェクトという、仙台市地下鉄東西線の開業に合わせたプロモーションプロジェクトとして街づくり人材を育てていくものを企画運営しており、現在5年目に入っている。今年度から定禅寺通り活性化検討会のコーディネーターもやっており、ステークホルダーの方々とどのように定禅寺通りを魅力ある通りに変えていこうかということを進めている。また、エリアリノベーションを考えることでエリアの価値を上げるリノベーションまちづくりというプロジェクトも都市まちづくり課と関わらせていただいている。さらに、公共交通を交通政策からではなく市民のまちづくり目線でポジティブなアイデアを交わす公共交通ラボというプロジェクトもやっている。

民民でやっているものでは、仙台駅東口でJRと協働しているもので、EKITUZI という期間限定の広場を3月まで運営しており、4月からは国際センター駅の上階、青葉の風テラスの民間での運営を3社のJVで受注してやる。いろいろなことに関わることで、青葉山から東口まで俯瞰で見ることができる仙台では珍しいタイプの会社、人間ではないか、と思っている。市民協働に対しての自分のテーマとしては、非常にイベントの多い仙台ですが、イベントではない日常の定着したプロジェクトを市民と創り上げていくことが一つ、公民連携による経済効果、稼ぐ市民協働もテーマとしてやっけいこうと考えている。

坂口：実践の中から出てくる、将来的な仙台の課題と同時に、今の課題をどうやって説くのかということがこれから課題になってくるのだと思う。

武：旧宮城町を活動エリアに地域の子供会を束ねる子ども会連合会の会長をしている。今朝は地域の子供たちが雪のなか、資源回収をして一緒に取り組んできた。本日は日曜日なので、ご父兄やおじいさんおばあさんなども参加し、集積場まで運んでいく様子を写真に収めてきた。そのような行事を1年間の活動の様子をまとめて、最後に思い出としてビデオなどを作って子供たちに配布している。昨日は町内会の役員改選に伴う役員推薦会議を実施した。人事は結構たいへん。その背景から家庭の事情も見えてくる。自分自身子供時代は、子供会や近所のグループと田んぼや川、近くの山で遊んで育った。小学校の時はボーイスカウトでキャンプファイヤーなど、地域に育てられて記憶が強い。学生で仙台に来て学生として子供会を応援したりしてきた。仙台市で係長時代にこのメディアテークにかかわり、営繕課長を務めながら、町内会長も引き受けたりした。町内会長3年で終わり、その後、子供がいなかったので、地域の子供会やってという依頼に心ときめき、地域の子供たちといろいろな遊びをできることが楽しい。自分の子供時代の環境を思い出し、仕事でしかめっ面をしている自分以外の自分を発見することができました。

地域で子供たちを中心にするコミュニティはうまく回っていくことに気づいた。これは完全にボランティアで実施し、仕事は週に3日ほど瑞鳳殿に勤務しており、このサイクルで元市役所職員としての経験も活かしながら地域に関わってきました。地域づくり、コミュニティづくりが仙台市の将来や人づくりを考えるうえで基礎になるのではないかと考えている。

坂口：子供が中心となることで、地域やコミュニティが活性化していくのだと感じた。

新井：東北工業大学建築学科で教員をしている。建築学科に所属はしているが、ソフト寄りに取り

組んでいる。復興支援にかかわることを行ってきた。今は孤立化が進む社会の中でつながりどうやって作っていくかということに取り組んでいる。具体的には災害公営住宅の集会場をみんなの居場所にしていこうという取り組みをやっている。気づいたことがあって、外部から支援が来て集会場でお茶会とかイベントをやる。それぞれの主催者に聞くと中居さんの話ではないが、参加者が固定化しているという回答を頂く。3,4年やっても参加する人はずっと一緒。つながりが広がらない。暇だから通しで参加している人もいるが、少しずつ参加者は違う。同じような催しでも参加者によって参加の判断をしたり、当然相性ということもある。富国強兵の時代は可能であったかもしれないが、大きなコミュニティーを一機に作るうとしても無理な話で、ブドウの房のように小さいつながりが大事だとすごく感じた。集会場を居場所としようとするときにどうしたらいいか考えると、開催する日地が多様であれば、参加する人も多様になる。町内会や自治体を仕切っている人が高頻度で取り組んだところで、参加する人は固定客化するので新しい人は5%程度しかない。他がやればあたらしい5%が来るかもしれない。20団体やれば100%にはならないでしょうけど、多様性を担保するということがとても大事。市民協働というよりも新しい公共の仕組み。議会制民主主義だとどうしても多数決。小さな意見や多様性は担保されない。便宜的にやっているので限界はあるからしょうがないが、そこに期待するより、1人1人の価値観が地域社会で花開くような仕組みを作ることが大事だと考えている。

坂口：固定化した関係を解いていく仕組みと集会場のような共有化した仕組みの両方があるということですかね。

田沢：仙台3.11メモリアル交流館に勤務している。地下鉄東西線の開業と同時オープンした施設で3年を迎えた。設立趣旨は東日本大震災の記憶記録を後世に伝えることが2本柱の1つ。メモリアル交流館の特徴の一つが2本目の柱である。津波で大きな被害を受けた仙台東部沿岸地域の地域資源を掘り起こして、それを積極的に発信していく。津波被害で見えなくなった地域資源を見える形にして未来につないでいくかということも、この地域を語る上では非常に重要なことではないかと考えている。私はその2本目の担当をしている。市民協働の観点で言うと見える形にすることがまさに市民協働である。住民の方の協力なくして実現できない。津波で更地になった集落だったり、人がまばらになった集落に、まったく知識のないまま放り込まれてしまうと目に見えるものがないので、ここにあった地域資源は何だったのだろうか、はぐくまれてきた地域文化は何だったのだろうかを探ろうとするとき、住民の方々に頼らないと難しい。よって、市民協働せざるを得ない状況になっている。そこで長く暮らしてきた方々の生活の知恵は非常に豊かで、かつ、記録にも残っていないとなると、市民協働でこそ実現できるアーカイブ化、可視化の取り組みをさせていただいているという実感がある。中居さんが仙台市の制度についてお話ししたことに同感した。普段市民協働だと思ってお付き合いしている地域住民の方たちがそのような制度に手を上げられるか？難しいと思う。仙台市の市民協働って世の中の2周先を言っていると表現される。素人では手を出しにくい制度設計になっているのではないかと感じる。

紹介いただいた制度は、地域のお母さんがこんな制度あるから活用してみたいと思っても手を伸ばせないハードルが高い要件が求められている。若林区の街づくり活動助成金の評価委員もやっているが、上限が50万円の制度で、50万円使いきれぬ団体ってどれだけ存在する

のだろうか。これでもハードルが高くて、毎回同じ団体さんが応募してくる。まさに固定化につながっていくのかと感じる。普段関わっている地域住民が抱える課題が零れ落ちていいのかという決してそういう話ではない。市民協働で住民が抱えている課題とその地域に拠点を構えている行政が一緒になって手を取りながら解決で切る部分が沢山ある。

新井先生が言った小さくても多様性のある社会を作っていくためには、もう少し制度が柔らかくならないと難しい。行政寄りの立場で市民協働に携わっていると感じていること。

これからの新庁舎についても市民協働となった時に、今を想像すると慣れている団体しか来ないのではないかというネガティブな見方をしてしまう。本当の多様性とは何かと考えたときにいろんなレベルの市民協働があってもいいのではないか。入口から制度を活用したもので。いろんなレベルの市民協働が仙台で展開されるといいのではないか。今の職場で市民の皆さんとやり取りしている中で思っていること。

坂口：制度設計自体で多様性を生むこともあれば固定化することもある。同時に制度の使い熟し方みたいなものを市民も身につけるかということと、制度設計する側が考慮する必要もあるということも感じました。

遠藤：地域社会デザイン・ラボ 遠藤智栄です。普段は地域の人材育成や組織強化の仕事をしている。地域の団体や非営利組織などの支援をしている。協働をコーディネートする仕事が多い。プロジェクトをやるときの相談やアドバイザーとして、もっとこういう人と協働すると効果的ではないかというステークホルダーを巻き込む方が成果が上がるのではないか。そういうアドバイスをする役回りが多い。市役所も様々な部局があり、縦割りなので、部局同士が連携しにくいので民間の私がそれをつないだり、発注元が縦割りで制度を運用しているため、それを受ける地域も縦割りになっている。地域の縦割りをコーディネートして少しでも成果が出るように手伝ったり、つなぎなおすこともやっている。市役所の中にも協働コーディネーターが必要だし、民間にも役所や企業をつなぐコーディネーター両方必要だと思う。地域のステークホルダーを知っているかどうか。ボランティアの力を活かす取り組みができるかボランティアマネジメントですね。田沢さんの話にも合ったような多様な資金や人材をいかに使うか。限られた資金源しか知らないと活動もそれに縛られてしまう。活動にあった資金源にマッチングさせないと活動に合わないことが起きる。始まった団体だとどんな資金源が必要か、タイミングによっては今補助金を使わない方がいいとか、チームビルディングになるのではないか。お金は特効薬にもなるが毒にもなる。自分たちが目指す成果はどこで、そのためにはどんな道具や方法、人材と取り組むことがいいのか、一緒に話をする。私が決めるのではなく自治体や団体なので、その時に必要な情報などを補ったりすることが仕事。公共の側にも民間の側にも、議会の側にも協働コーディネーターが増える必要がある。

坂口：関係を構築するだけではなく、固定化やこじれたりするので修復する。プロセスに応じた支援の在り方があるのではないかということだと思います。

この話を丁寧に深堀してもかまわないし、意見を出すと同時に課題を共有する場でもある。課題を挙げていただきたい。このうまいかないは、仙台が持っているもともとのポテンシャルかもしれない。個別の垣根があって解けていない問題なのかもしれない。真壁さんように被災現場で持ってきた課題のようなものを、どうやってほかにつなげていくかとか。

自己紹介の拡大版と共有できそうな課題について意見を頂きたい。

田沢：今抱えている市民協働の課題。私は住民の方を頼る立場なので。

坂口：地域の資源を探すときに、どういった価値があるか、他者にとって有益であるかは地域の人たちの会話の中で価値が鮮明になったり、次の世代に対して継承すべきものであることがわかったりとか。そのような内容でも構いません。

田沢：見つけた地域資源が固有性を持っているか、未来につなぐためにどう形にしていくのかは、対話を通して構築していく。施設側の人間として胸襟を開いた状態で住民と接する。そのような姿勢を行政がどれだけ対応できるのか？メモリアル交流館は施設を利用する方から料金を徴収していない。ただし設立趣旨は、東日本大震災のことを伝える活動団体、地域資源を発信しようとする団体にのみ貸し出している。駅に直結している施設なのでその他の意味で活用したいという団体に、その活動内容ではご利用いただけないという対話のプロセスが必要となる。費用が発生したほうが、やり取りが楽。合理的な運営をしようとしたときにこのやり取りは省かれる部分であると感じている。良い、ダメをお互いの立場をはっきりさせたうえで対話していくという場面が減っている。メモリアル交流館では求められている部分なので、大切に扱っている。こういう企画をやりたい。ここではその内容を受け付けられない。そういうやり取りを互いに話し合える関係ってすごく大事なことだと思う。新庁舎で市民協働を進める。場を構築するとなった時に公務員が市民の話を聞くという態度が取れるのか気になる。中利その対応に時間を割かれるので、お忙しい市役所の人たちがそういった時間をとれるのか。○か×の2択で合理的に処理してしまったら、グレーゾーンがなくなってしまう。そうなった時に多様性がどれだけ担保されるのか。本当の対話、相手の話を聞き、自分の話もした上、どういう着地点を迎えることができるのか、わからない話をするときに対話する態度をどれだけとれるのかということが、これからの市民社会を構築するうえで、非常に重要な姿勢なのではないか。を私はメモリアル交流館で日々試されている気がする。

坂口：メモリアル交流館ができたときから、これまでの実績、信頼感を得て、先方からいろいろな提案が出てきているのかと思う。当初と現在で対話の仕方に変化はあるか。

田沢：交流館での規格の実績などが見えてきているので、これだったら受け入れていただけるのではということで提案を頂くことがある。我々もトライ&エラーでやってみて、事例の積み重ねの上で、いただいた提案に対してこういう事例があったのでできるかもしれないしできないかもしれない。という部分からスタートしている。そういう部分では当初と現在では態度が変わってきている部分もある。

新井：災害公営住宅の集会場をみんなの居場所にするためには、いろんな団体が取り組んでくれるといいと期待しているが、管理の都合で集会場を使えなくなってきた。管理人が捕まらないと使えない。土日解放大変だからやらない。面倒なので行政に一任したいなど。理念がないのが問題だが。そもそも何のために集会場があり、運営する、管理するが発生する。行政や地域社会もボランティアでやるとあまり意識しないので、市役所に交流スペース造ったところで、先程のメモリアル交流館のような問題が発生しかねない。仮設住宅で殺人未遂事件が発生した。成人の息子が年老いた母親を刺す事件。そもそもそんなことした家族がそこに住んでいたこと自体、住民は知らなかった。すごく孤立していた。

息子は逮捕され、母親は軽傷で済んだが、周辺住民に顔向けできないのでさらに母親の孤立

化が進んだ。集会場を活用した催しであんまり人気はなかった編み物教室にその母親は皆勤賞だった。月2回ぐらいだったと思う。住民や行政との付き合いもほとんどないその母親にとって、その編み物教室が一本の命綱のような役割を果たした。行政が助成金を交付するときの実績とか何人参加したとか求められるが、実績も大事だがその活動があることでどのようなことが起こるのかという可能性、想像力を評価する力も必要。

坂口：評価の指標と大多数からは見過ごされがちな小さな関わりも見つける力が求められる。被災する前は集会場を利用するという人は多くはなかったと思う。生活の中で場にかかわること。日常生活の中で集会場に行くということが向いている人、不向きな人がいると思う。これは好き嫌いではなく経験値の差であると思うがいかがか。

新井：震災前は3世代で済んでいたが、震災後は親世代はプレファブ仮設、息子世帯はみなし仮設と別々に住んだ。若い人がいなくなったので、老人だけで集会場で集まる。だけどそれはそれで結構楽しいという話もよく聞いた。世帯分離することで嫁も親も気を使って過ごしていたから別れるきっかけになって良かったという考えもあった。家族やコミュニティーの在り方が実態に合ってきた。現在の全国の世帯人員は平均すると2.5人と3人を割っている。私たちは住宅や家族というとサザエさんみたいな家族像を描いたりするが、意外と現実を見ない。現実を見ないでこうあるべきだ。コミュニティー理論なんてまさにそうです。現状を見ないといけないと感じる。自治会長さんと話をすると現状の話ではなく、会長さんの理想の話をする。失敗の話はしてくれない。そういう部分が気になっていて。市民から意見を求めてそういう立場の人からだけ話を求めてほしい話が出るのかな。と思いました。

武：地域には子育て支援や老人の見守りを一生懸命にやっていただける方がいます。社会福祉協議会や消防団の方、清掃や草刈りを頑張る方。河川整備に情熱を傾ける人、民生委員など地域にはたくさんの人材がいて、いろいろな役割を担ってくれているが、素人です。先程遠藤さんが言っていた地域をコーディネートするということは誰もやっていません。しかし、私も現役時代は行政のプロとして活動し、家に帰ればこの地域に住んでいる行政のプロでした。

地域の中にプロはたくさん住んでいると思うが力を発揮できない状況にあると思う。地域に住んでいる行政マンとか地域に住んでいる学校の先生だとか、たくさんいる。先程も役員人事で困った話をしたが、誰もいなければと県の職員が手を挙げてくれた。ありがたい。

リタイアした後も地域に貢献したいという思いがある方も多い。地域に住んでいる現役プロの方がつながっていく、コーディネートされることで、新しい地域像が見えてくる気がしている。地域を巻き込むのに一番声をかけやすいのが「子供のため」です。なので、子供会にかかわる人の中から地域をコーディネートする人やプロフェッショナルと地域の中で繋げられないか。そういう仕組みを広い範囲で市の仕事として市民協働のパターンとして見つけられればと感じている。

坂口：子供をきっかけとして、その経験を生かして他分野の地域コミュニティーにかかわったケースはあるか。

武：事例はたくさんある。老人クラブを設立し独居老人の見守りを展開しようとしている。社会福祉協議会も町内会も手一杯。「～しながら」でいいから見守ってほしいという要望から、グランドゴルフのサークルで「取り組めるかも」見たいな話しが出たりする。

坂口：皆さんが気付いた課題を共有する場や機会はどこですか。

武：私の地域では町内会である。より大きな地域範囲、子育て支援の人たちが集まるサークルの発案で定期的に「子育て支援の課題」を共有するなどの取り組みが始まっているという話もある。

坂口：それでは氏家さんどうですか。

氏家：WE プロジェクトなどをやっており、「稼ぐ市民協働」などといったりしているので、この市民協働では浮きがちになることが多いのですが（笑）、新井先生が言われたように多様性という言葉は大好きでして、いろんな形の市民協働 100 人いれば 100 人の市民協働があると思います。が、自分が関わって意味があるのは、やはりビジネスとしての稼いで社会に還元する、民間の力で公共を担う市民協働ということを軸でやるのが一番いいと思うし、自分としてもモチベーションが上がります。

これから人口が減る、税収が下がっていく中で広がってしまったインフラを公共が担いきれない、そこを市民とか民間のアイデアで行政と共に運営を考え、お金も生み出していく。

こういったことが公共を担うことにつながると思っています。

その中で思うのは、仙台市は他の都市に比べても非常に優秀で、しかもちゃんとお金もあるのですが、そのためもあって、

まだ市民と行政と関係のバランスがあまりよくないような気がしています。

いい例が福岡市だと思っていて、ここは行政と民間のバランスが非常よくて、民間のほうもきちんとお金を支払って行動する。そうゆう歴史・文化がある。

まだ仙台は何かすると市が何かをやってくれる、という感覚がある。

そこが修正されればいいバランスが生まれるのではと思う。

いろんなまちづくりのプロジェクト関わっている中で、仙台には優秀な 20 代 30 代の将来を担う方々がたくさんいる。その人たちはあまり行政に頼らないことを考えているが、まだ全体の機運としてそういう人たちが集まり、それが一般市民に認められるのはもう少し時間がかかると思う。あと 3~5 年後には非常に面白い仙台のまちづくり、市民協働が進むと思っています。

評論家が街づくりはできない、プレイヤーでないと街づくりはできない。

そのプレイヤーは今育ってきている面白い時代だと思う。でもそれが花咲くのが 3~5 年後なのかなと思っています。

坂口：ありがとうございます。

今の氏家さんの話で表現が適切かどうかわからないが、なんとなく対話のインフラというか、街がもっている対話のインフラみたいなものは結構大事なのかなと思う。

そのことが、結果的に公共施設が安いということにつながるかどうかはわからないが、大きく言えば市民と行政とが話ができるとか、今の話は一歩進んでいて役割分担とゆうか、街はその双方で造っていくような、この場合は行政がもち、この場合は民が持つとゆうような形が、例えれば見えない線引きというか、共通の理解などそういうことがあるということでしょうか？

氏家：そうですね、すべての公共サービスを民間が行うことは 100%ありえない話で、例えば定禅寺通りも最終的には民間の力で、行政は歩道の活用などで通りの活用を図っていくなどがある

りますが、ただ櫛の落ち葉の清掃費は民間で出せると思うが、大きくなりすぎたケヤキを植え替えなどは行政のほうでやってもらうなど、このような線引きはあらゆる局面であるのかなと思います。

坂口：ありがとうございます。それでは真壁さんお願いします。

真壁：先ほど話したのですが、今の私の仕事の目標としては、やっぱり一人一人の生活再建これが一番の大きな目標ですが、なかなか難しいことが実際のところは多くあります。

新井先生から災害公営住宅の話が出ていますが、そのことを切り口に話したいと思います。仙台市にも復興公営住宅が3200戸ぐらい整備されました。これでほぼ100%完成して入居率も95%ぐらいだと思いますが、そういう形で震災後の8年だいたい進んだかのように見えて、ただ一方で今年の11月にこんなことがありました。

石巻市の事例です。河北新報にも載りましたが、自死をした方二人の事例ですが、一人は2016年に災害公営受託に転居されて2年ほど暮らしていました。最終的に一人暮らしになったのですが、新しい住宅の環境の良いところで生活を立て直していると周りを見ていたのです。ところが2018年の夏に、自分が前住んでいたプレハブ仮設住宅の集会所で首を吊って亡くなっていたということがありました。

もう一人はプレハブ仮設を出て自宅を再建中で引っ越すばかりになっていて、周りも希望でいっぱいだろうと思っていたが、引っ越す前にプレハブ仮設で自死された。

このことを考えたときに、災害公営住宅は公的なものであるが、結局のところいい住まいを与えただけでは心のケアにはならなかった事例と思われる。日ごろから一人暮らしで寂しいと言っていたようです。支援員だけでは自死を防げなかった。

私たちにとってはショックな事例で、このことをどのように考えるかということ。

こういうことが起こりえることは阪神淡路大震災の時から言われていて、なかなか孤立死に対し手だてが打てない状況がある。

このことは今回の公共を担う仕組みからずれるかもしれませんが、ではこの一人の方を救うには何が必要だったのかを考えたときに、田澤さんのほうからも地域資源という言葉が出ましたが、この一人を救うための地域資源の全体像はどうなっているのかを、私たちは日頃からあまり見ないで過ごしている。

地域資源といっても多様で、公的な部分いわゆるフォーマルな資源、これは制度やサービス、もう一つはインフォーマルな資源これは制度とかサービスでなくて、住民同士の支え合いとか、今日いらっしゃる方々の民間のいろんな活動・取り組み、そしてもう一つは田澤さんが言われた住民同士が根差した伝統とか文化を大事にしたような、ナチュラルな資源というのがもう一方であるということ研修等でも言ってます。

フォーマル、インフォーマル、ナチュラルと地域資源も非常に多様であると思っています。この多様な地域資源が対話をして、場づくりして、一人一人の命をどのように守っていくかを、いろんな地域資源が以下に協力できるかが非常に大事なことです。

なんでこれができないのかな？地域資源はあるのに。

公営住宅できました、相談に乗ってもらえる支援員(LSA)もいるし、地域づくりのNPOの方々、集会場の活用などのナチュラルなものもあるのになぜ、先ほどの方の命は救えなかったのか。これを考えていかなければならないと思っています。



遠藤さんが先ほど言われたコーディネーターですね。いろんな資源はあるのですがそれ同士の対話を生じさせる仕組みがない。

個々が協力し合って助け合うようなファシリテーターやコーディネーターの存在が少ない。そういったコーディネーターを増やすことが課題と思っている。

〇〇コーディネーターといわれる方はたくさんいらっしゃるのですが、実際そのコーディネーターの方もその専門の事項だけで手一杯だったりします。

ですので、そのコーディネーター同士を繋げることができる方、例えば遠藤さんのような方が必要である。

縦割りのコーディネーターはたくさんいないので、フォーマル、インフォーマル、ナチュラルの担い手の方々をつなぎ合わせるかた、意識や活動を実践してくださる方を増やしていくしかないと思っています。

例えば先ほど武さんがおっしゃったような民生員の方々はナチュラルな資源であって、フォーマルやインフォーマルな資源であったりする、そういう方たちが横つなぎを意識して持っていたらいいと思うし、養成研修などで増やすことは別に、私たちそれぞれが垣根や枠組みを超えて協力し合うという意識を持つことを、進めていくことが大事だと思います。

坂口：ありがとうございます。

インフォーマルな資源やナチュラルな資源というのは、そもそもどういうものがあるかを、可視化するのはなかなか難しいと思うのですが、それにかかわろうとする人たちで、その地域にかかわる人と、外から関わろうとする人では意識が変わるような気がします、そのあたりはどうでしょうか。

真壁：例えばナチュラルな資源は向こう三軒両隣な関係でしたり、あとはお祭りのための集まりなどがあると思います。

インフォーマルな資源は多様でNPOでしたり、町内会の活動、いろんな企業の活動・取り組み・社会貢献活動のようなものも含まれるかもしれません。

可視化がポイントかどうかについては、全員が全体像を把握するのは難しいが、コーディネーター的役割を担う方が、その全体像をどのように見るかが重要と思っています。

つなぎ手の方やそのプロのような方が、公的な機関とのつながりも含めてその行動が大事だと思う。

坂口：コーディネーターに求められる役割が、かなり状況に応じて変わってきている。その局面に応じたコーディネーターがなかなか入らないとうまく機能しないという解釈でよいですか。

真壁：はいそうです。

坂口：それでは中居さんお願いします。

中居：協働の結果は、やはり公益、公の益がついてくるだろうと思う。それには相応の多様性があることも理解しながら、私のいる建築士事務所協会は建築の専門家集団ですから、その仕事は社会に建築物が出現することとなります。

それは私有地に私有建築物が立つ、ある意味勝手な行動ですが、それでも街並みを考えればそれは公共であるはず。ところが当協会の会員がいろいろボランティアをしています、昨年大阪でブロック塀が倒れて騒ぎになりました。宮城では倒壊するブロック塀はほとんど無いはずだと思っていたが、ある南の町では事務所協会にブロック塀の調査の依頼が来まし

た。一つの小学校の通学路では100~200のブロック塀がいまだに存在することが解りました。その中に危険なブロック塀もある。それは私有地の中でも他人に被害を与える可能性があるものであり、それはやはり公共のものでもあると考えなければならない。

また阪神淡路大以降、戸建て住宅やマンションの耐震診断をしようとなりましたが、なかなか進まない。なぜか。

原因としては、その個々が個人の問題ととらえているからである。

もし自宅が原因で他の施設に被害が及ぶことは十分あり得るわけで、自分たち専門家集団としては、個々の施設は公共性を含んでいるとどうやって一般の方に理解してもらえるかが大切と思っている。

先ほどあった情報提供の難しさは、仙台市の様々な制度はあるが、それが実際市民と一緒に機能しているか疑問である。

解決する答えは自分も今はわからないけれど、そのことは最大のテーマとするべきと思う。

今回の機会の市役所建て替えは、一つのきっかけに過ぎず、今後このような問題が起きたときに市民と一緒に議論や考えることのシステムをつくらなければならないと思う。

それをなくしていい街といえるでしょうか？3.11を経験した仙台市は世界一安全で美しい街でありたいと思っています。どちらか片方ではだめで、そのための協働作業とはどのようなものを、みんなで知恵を出しあって進むことが大事だと思っています。

坂口：ありがとうございました。

私も聞いた範囲ですが、ブロック塀については宮城県沖地震以降やめようとしてはいたが、現在それが形骸化しているように思う。その経験がなかなか継承されないということと、そもそも自分たちの作業は公共の延長にあるということという理解でよろしいですか。

中居：その通りです。付け加えるとあの時は大丈夫だったから、今後も大丈夫と思う意識の人が多くいて、そうではないことを意識としてみんなで共有することや専門家として行政と共にPR活動が必要であると思っています。

坂口：わかりました。それでは川島さんお願いします。

川島：私の仕事は公共性があまりない仕事と思っていますが、去年の夏に西公園のイベントを仙台市都市街づくりの方から声をかけていただいて、一緒に協働して開催にこぎつけました。がしかし、そこに至る手続きの困難さは今まで経験したことがないほどで、面倒くさいことと思いました。

まず仙台市から後援をいただかないと、できないことがここでわかりました。そのために何日も集まって大義名分的なことを話し合う。仙台市から後援はいただいたが資金はいただいていません。後援とはどういう意味なんだろうと思いました。

また公園課からの許可手続きも面倒でありながら、アドバイスのことはなく認可だけの機関だと感じました。

また保健所からも許可を取らなければならず、基準にとらわれすぎだと感じることもありました。認可するための規則や基準が古くから変わらないのだろうか？と、疑問に思いました。

また、秋田からあった仙台市内での企画も、基準を満たさずできなかったと新聞で見ました。もう少し民間目線を取り入れ改善していくべきと思うし、他からの苦情が出ないことに重点を置きすぎていると思う。もう少し市民をバックアップしてくれる機関であってくれたらあ

りがたいと思う。

坂口：イベントの実現までにご苦労されたようですが、それでもまたやってみようとは思っていますか。

川島：街全体が活性化してほしいとは思っていますので、そのためであればまた継続してやっていきたいとは思っています。

また先ほど言い忘れましたが、開催後などに市のほうから、今度はこのほうがいいですよ、などのアドバイスがあれば、ありがたいと思います。

坂口：ありがとうございます。

あと40分ほどあります。

二巡させていただいた中で、いろんなキーワードや視点も出たので、ここからは自由に発言してください。

多様性を担保するなどいくつかキーワードが出ていますので、そういったことに対してこういうやり方があるのではとか、欲を言えば市役所の建て替えを考えることにつながる意見や、次の第3回のラウンドテーブルにつながるご意見などでもいいです。

また市民の方々がこういった議論の場に参加するハードルの設定ことなどのご意見でもいいです。

遠藤：皆さんのコメントを聞いて感じるところを紹介させていただきたいと思います。

真壁さんが言われた一人一人の命をどうやって地域の中で尊重し合っていけるか、はぐくんでいけるか、看取っていけるかなどは、公共や自治に関わることだと思います。

公共とか協働という言葉が暮らしの中で出てこないの、これからは皆さんの活動の中で表出しないといけないと思っています。

概念の言葉なので、みんなの共通にならないとピンとこない言葉になってしまう

概念が共通化するには、いろんな方の工夫と発言と発信が必要かな～と思いました。

自分がやっていることを開くことで公共が始まるといいます。

例えば素敵な絵を持っていて、それを個人だけで楽しむのではなく、他の方々にも見てもらうことで公益になっていく。

ですから料理とか釣りとか自分が好きなことを、開放したり公表することで公共につながることです。ということが田沢さんや川島さんのお話につながると思う。

氏家さんのプロジェクトでプレイヤーがたくさん育っているなど、実はそこがムーブメントであり、中居さんが言われたようなことを紹介するときに、公共や協働という言葉をつけ加えようと言葉自体が広がるのかなあと思うし、プレイヤーの方々も自分たちも公共になっているんだと、気づくことができる。

他の方に言われることで、自分がやっていることの言語化がさらに進むことができる。

あとは武さんの子供会のお話ですが。

私は公共と協働にとって子どもは非常に大事で、子供が大人をつなぐということですよ。

子供が思っているのは大人たちが考えたことを子供に押し付けやらせようとする。

そうではなくて、子供たちで考えたことと大人の考えをぶつけ合いコラボする活動が大事。

まだ少ない。子供たちとの協働はまだまだ課題があるかな～と思っています。

川島さんのお話で、手続きの件ですが、  
いろんな面白いことを行っている自治体を見ると、制度を使いこなすことや、改編やアレンジ、読み替えするなど、お金を使わないで制度を浸透させることを工夫している自治体が多い。

協働推進のためには、プロである行政の方が知恵を絞って制度をいろんな活動のために使ってもらうことが必要。お金を使うことだけではない。そういうこともいろいろと広がっていけばいいな～と思っています。

坂口：遠藤さんの話を受けて、真壁さんから返答など何かありますか。

真壁：公共を担う仕組みですが、対話の場の作り方なんですけど、これをどのようにやっていけるのかな～と、自分がサポートセンターの仕事をするうえで、そこが悩ましいのです。

私の仕事も遠藤さんと同じで、協働をコーディネートする仕事といえるので。

行政のほうが、社会福祉協議会などに委託して、一人の被災者の生活再建を目指すなどのその時に、行政の例えば生活再建支援課さんが使う言葉と、社会福祉協議会さんが使う言葉や、今までやってきたことなどが違うし、考え方・経験も違うわけで。

その間の意見が食い違ったまま、平行線でなかなかまとまらないことが多くありました。コーディネーターの役割は、お互いの役割を見えるかして、具体的にどういたるところを協働していけるかの対策としてファシリテーションの必要があります。

対話の場や、会議や打ち合わせの場の持ち方がすごく重要だな～とずっと思ってきた。

ほとんどの方が、この対話場が大事という意識が薄い感じの方が多い気がしている。

例えば復興会議とかでいろんな人が集まるんですが、進行の仕方にもよるのですが、お互いに何をしているかにとどまってしまう。本当に会議で大事なものは目標を何にして、そのために何をすればいいのか、共通の目標のためにどんな取り組みをそれぞれが行えるのかを話すべきなのに、と思う。

対話の場をどう持つのかを、共通のテーマとしてどのように解決していくかを、皆さんの意見をお聞きしたい。

坂口：整理しますと、私なりの理解は、さっき田澤さんがおっしゃった、まずお互いを認め合うことの部分と、合意形成をしたり、物事を決めるための進め方や目標を決めるとの、両方あると思う。

難しいのは、これは合意形成の場、これはコンテキストの違いを認める場とかが、最初から分かれていなくて、なんとなく対話の場は流動的で、ある局面は合意形成だったり、ある部分はコンテキストの違ったりとかで分かれてくることが、すごく難しく、

なので、先ほどから議論になっているコーディネーターの役割はそこだと思う。

こういう人々を集めることも大事ですが、

ここは合意形成の局面であるとか、ここは意見の食い違いを認める場であるとか、そういうことがいろんな方のご意見をいただいて、すごく重要だと思う。

新井先生は復興の局面で、合意形成が必要な場所と、そうでない多様性を認めていい場所などあると思いますが。

一つはそう言ったコーディネーターの方が必要である場所など、みんなが対話の場が必要であると認識しないと、うまく進まない部分があると思うのですが。

答えは難しいと思いますが、新井先生一言ありますか。

新井：集会所の話をしてしまうと、多様な使われ方を望んではいるが、住民の方々が管理しているので、外からどんな方でも使用できるようにはいかず、管理上も面倒なことがある。

話だけでは解決できず、理念を共有するって難しい。立場によっても見え方も違うわけで。NPOも取り組んでいるが、実践したほうが早い。

なかなか話だけをして情報共有にもならない。

あと、たくさん集まればいいわけではなく、少人数でもいい意見が出る場合もある。そこから具体的なアクションが始まることもある。そういうのもコーディネーターの資質だと思う。だけど、話し合いも大事ですが、見せるほうがいい場合がある。

そのプロセスが大事だと思う、いいプロセスになるように常に意識している。

対話を重視していないわけではないのですが、それは前提ではないと思っている。

やって見せた方がいい場合があると思っています。

坂口：武さん何かありますか、今地域の活動に浸かっていますが、元市役所職員であることから、他からの見られ方などいろいろあると思うのですが、

例えば、子供たちと次どこにハイキング行こうかなどの具体的な話と、将来的にこの地域の子供たちにとってどうやったらいいかのどの話の両方であると思うのですが、どのように使い分けたり、同じ人たちだけでは話が固定化していくので、今いる人たちと新しく来た人たちで向かい入れたりするときに何かの考え方はありますか。

ここは頑張っているとか、こういうところは気を付けていることなどありますか

武：ちょっと質問が難しいのですが、少し質問からずれるかもしれませんが、先ほどの対話の場の作り方というところに戻させていただいて、私も逆の立場の時がありまして今こうしていますと反省の感もあるのですが、地域の人たちと市役所と一緒にやって何かをやる時に何かボヤっとした壁のようなものを感じる時がある。それは縦割り行政みたいな壁、それから時間の壁などです。

地域の人たちは市の人を、「箱の中の人たち」と言ったりしている。何かって言うと例えば児童館とか市民センターとかが企画する地域懇談会を開く案内が来るのですが、開催日時が仕事をしている時間帯であり、今はお母さんも仕事をしている方が多く、この時間帯に来られるのかなと疑問に思う。来られる方は退職した方とか、一部の人たちに限られてしまいます。そもそも懇談しようとするスタンスが違うのではないかと感じてしまう。

市のほうで地域にぐっと突っ込んで一緒にやっという気概が感じられない。市の方は一所懸命やってくださっているとは思いますが、地域の感覚が身についていないように思う。仕事は仕事と割り切りすぎているのではないかと、市の担当者も家に帰ればその地域の人たちなのだから（もっと地域を理解してほしい）と、私は考えている。

仕事と地域生活での行動では違うが、それを超えていける新しい市民協働というのが、どこかに出てきそうな気がするのですが、どうでしょうか。

坂口：すいません難しい質問でした。

例えば氏家さんは稼げる協働と言うはなしで、そういった観点からの対話の場のありかというか、何か重点を置いているところがあればお話してください。

氏家：私は、新井先生の意見に賛成で、ビジネスに近い人ほど対話だけで終わることを嫌う、WEブ

プロジェクトでも学ぶだけの人を育てる気はなく、アクションを起こす人を育てたいと  
いて、実際に動いてみて失敗したなら失敗として次につなげればよい。そして再起動する。  
建物はそうはいかないが、パブリックアクションはいくら失敗しても大損害になることもな  
いですし。

そんなことで私は対話よりも行動といつも考えています。

新井：越境して関わる。あえて自分の地域の事にはかかわらず、他の地域のことに関わるようにし  
ている。今の若い人にも多いようです。

それはいろんな運営にも言えると思っていて、外からの意見を適度に取り入れることも大事。  
コーディネートでもいえることで、例えば今度空き家を使ってシェアハウスをつくったので  
すが、入居者募集していて、仙台市民からは反応が薄いのですが、東京からの反応が多く、  
仙台に移住し働きたいなどの人もいます。しかもこのような街づくりの企画などにもかかわり  
たいといっている。

外から新鮮な人や意見などもある。それにはその街が魅力を発信しなければいけないと思う  
し、運営能力も高めないといけない。

自治という言い方が嫌で古いと思う、その中の地域の人たちだけでなく、外から入れること  
は大事なことだと思う。コーディネートだったり運営だったりもその辺が大事だと思っています。

坂口：田澤さんいかがですか。

田澤：氏家さん新井先生から対話だけでなく実践も重要だという話ですが、私もそう思いますが、  
なかなかその行動の仕方が解らない人が多いのではないかと思います。実践を前にいろんな  
準備をして、浸透させてから地域に放つと、オリジナリティだったり、効果が得られると思  
う。

そういうことをふまえたコーディネーターだったり形成や地域づくりに重要ではないかと思  
う。

交流館の事例ですが、場を俯瞰してみてくれるスタッフがいるとそれぞれ個別の対話を実現  
してくれる。

コーディネーターの役割も重要ですが、場のコンシェルジュ的なひと、例えばこの人とこの  
人をマッチングするといい効果が生まれるとかを、していかないといけないと思う。

例えば今現在の市役所の中では市民ギャラリーホールがありますが、機能していないと思っ  
ています。ただ貸し出しだけで誰もいないで、ものだけがあり無言の状態です。しかも月～  
金の9時から17時までとなっている。そこで何か対話をしたりができない。例えばそこに一  
人誰かいるだけで、違うんじゃないかな～と思います。

今回の計画も市民ホール的なものを用意しただけでは期待している機能は発揮できないと思  
う。

場を設けるだけでは不足、それにふさわしいコーディネーターが必要であると思っています。

坂口：ありがとうございました。

あと10分ですが、これだけは言いたい、とかありますか。

中居：協働という本などを読んでいますが、さっき遠藤さんが言われた、例えば井戸を掘ってそれ  
をみんなで使えば協働になる。逆に権力者がみんなにつくらせてその方だけが使ったらそれ

は協働でも公共物でもなくなる。

今回の市役所の計画でもそうだが、この企画の最初にこれを市役所と呼ばず、シティホールと呼ぼうとなったのですが、市役所という市の行政のための事務所、シティホールは市民と議会、行政と議会、行政と市民それぞれが交わる場であるべきなんです。そうであると行政の方も議会の方も市民ですから、その器はできれば24時間営業であってほしい。

それから市民の税金で造るのだからそれを使う行政はある意味、家賃を払ってでも使うべきであるともいえる。その観点からもシティホールの管理は民間に任せて有効に常に使用できるようにしないと、先ほど田澤さんが言われたような問題点が残ることになる。

せっかく作る、これからのシティホールは、みんなの意見が反映できるようなものを目指して造ってほしいと思っています。

氏家：今の意見に賛成で、市民に開いた施設という部分に大賛成で、他都市の施設の良い例としてよく挙げられる、富山のグランドプラザはその点において非常に優れていて、屋根付きの全天候型の広場や年間250本のイベントを実施しているというほどすごく使われている。

それは公設民営で富山市がお金を出して作って、運営は民間のまちづくり会社が行っているというのもそのひとつの理由かな？と思う。年間250本もイベントを行うことはかなり大変で、たくさんのアクションを起こしたい人の参画が必要になります。もちろん先ほど田澤さんがおっしゃったキュレーターは絶対必要で、みんなが自主的に勝手にイベントを行える仕組みづくりが大事。

人と人がみんなで行動を起こすときには背中を押したりアドバイスする人が必要なのかな？と思う。

坂口：そのほかはいかがですか。

武：子供会をしている立場で、最近いじめとか、自殺、それから親が子供を虐待するなど、子どもの受難時代であるとニュースや新聞で言われていて、そう感じています。

基本的に学校だけの問題ではなく、市役所だけで解決できる問題でもない。

例えばいじめの問題ですが、学校の中だけの人間構成だけしか作られず、逃げ出せない。

昔自分の子ども時代は学校でいじめられても、うちに帰れば近所の仲間と楽しく遊べたし、逃げる場所もたくさんあった。いわゆるいろんな人間関係が地域の中であっていただけですね。

それが今は学校というクラスの中での人間関係しか築けないので、閉じこもってしまう、あるいは、家庭の中だけの親子関係になってしまう。そのことを行政の力だけで解決することはまず無理で、やっぱり地域の力が必要だろうと思うが、ただ地域の人たちが今何をしたらいいかは見えないでいる。地域の中でもそのことは何とかしなくてはと思っています、いろんな事件がありますが、それは学校の中ではなく地域の中で解決していかなければならないと思っている。これらを救うのは地域だけでもできないので、市民協働というなかで解決の道筋を見つけていければいいなとつくづく思います。

新井：庁舎の計画の話ですが、今回の計画は今の建物の床面積が2倍の面積になるそうですが、人口も減っているし、働く人の人数も減っていくわけだから、もっと小さくすればいいのではと思っています。オフィスもこれから空いてくるのでそのまま借りていくのもあっていいとおもうので疑問に思っていました。今もあまり使われていない市民スペースも新たにしたらうまく使われるかも疑問である。

市民感覚からすると、かなり計画がずれているなど感じました。

市民と協働するという上から目線ではなく、また民間にやらせようとかでもなく、行政が市民・民間に協働してもらう意識が大事だと思う。

坂口：現在ほかの施設にいる約半分の市役所職員が集まったの新庁舎の大きさであることは、新井先生も把握していながらも、もう少し小さくできるのではとの意見と思います。

一つ加えると実践した記録みたいなものを残していかないと、こういうことをやったことを次の人に関わっていけないので、そういった部分が加わっていくと、今日話に出たコーディネーターの役割と、対話の場の作り方と、そこにおける実践のやり方の記録と、それらが共有していければ仙台の対話のインフラみたいなものが少し変わっていくのかなと言えるのでは。

今日はどうもありがとうございました。

以上



第2回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を摸索する」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル⑧ 「これからの仙台を担う仕組み」を公共・市民協働の側面から考える。

B2 「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える。速報メモ

---

### ■登壇者・担当者

企画担当 : 石原修治・大宮利一郎 宮事協  
ファシリテーター : 遠藤智栄 地域社会デザイン・ラボ代表  
坂口大洋 仙台高等専門学校建築デザイン学科  
菅原大助 仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室  
ファシリ補佐 : 石原修治 川口裕子 宮事協 撮影 : 今野純子  
報告書まとめ担当 : 石原修治・大宮利一郎 宮事協

登壇者 テーブル B2 :

河村 和徳 東北大学大学院情報科学研究科准教授  
横山 英子 あとりえ横山代表/仙台青年会議所 OB  
鈴木 平 ユースソーシャルワーカー副代表幹事  
谷津 尚美 認定特定非営利活動法人アフタースクールぱるけ代表  
緑上 浩子 みやぎ生活共同組合理事  
今野 均 片平地区連合町内会長/花壇大手町町内会会長

---

遠藤：前回シティーホールとは何か、欧米では民主主義の象徴として、議会と市民の関係こそがシティーホールであると言う。今回は「仙台らしいシティーホールとは」を議会・行政・市民の視点から皆さんと考えてみたいと思う。

私は今年度、県南の自治体の議会が主催した、議員と高校生のワークショップをサポートした。この経験を経て、議会と行政と市民についての見方が変わってきた。新庁舎は行政ゾーン、議会ゾーン、市民が使うゾーンが含まれており率直に、ざっくばらんにこのテーマを掘り下げてみたい。

(自己紹介)

今野：片平地区でまちづくりをやってきた。5年たち課題がずいぶん変わったため見直し作業をしており、行政の力を借りて取り組んでいる。

谷津：平成14年から障害のある子どもたちの支援から活動を開始して、放課後のデイサービス、障がい児のヘルプサービス、相談支援事業など180人の子どもから大人までの障がい者支援に係わっている。公的なサービスから抜け落ちる課題を市民の力で解決するNPOの原点に立ち返り活動している。今後は障がい者の兄弟支援や、卒業後の仲間づくり、家族支援や、障がい理解への啓発活動などを横断的連携してやっていきたいと考えている。

緑上：生活協同組合員から選ばれた理事で「1人は万人の為に、万人は一人の為に、平和とよりよき生活の為に皆で作る豊かな地域」をモットーに地域貢献を摸索しながら活動しています。

鈴木：石巻で生活困難世帯の子どもたちの学習支援やフリースクールを実施したり総合支援として0歳から39歳までの相談支援を行うNPOで活動しています。また、仙台では大学生と町内会の人たちとまちづくり活動、学生のマイプロジェクト支援、市民活動・次世代の子ども支援、若者人材育成の事業を他のNPOと一緒にこなっています。今日は、市民活動、若者支援の立場から議論に参加したい。

横山：仙台市中心部に生まれ育ち親子2代で青年会議所という組織でまちづくりに関わってきた。七夕花火大会を地域と商店会を巻き込んで、まちづくりにつながっている。公的なことをやるには行政、議会の先生の力を借りなければいけなく、組織にいる時は当たり前でそれができていたのですが、組織を離れた後は自分でまちづくり会社を作って亶理町や村田町で活動中。震災前から関係していたNGO「セーブザチルドレンジャパン」の活動の中で被災地支援にも関わっている。

河村：政治学と選挙の研究を東北大学で行っています。議会改革のお手伝いを各自治体から頼まれて行っています。議会を取り巻く課題、議員のなり手不足、政務活動費の問題など行政、市民、議会の信頼関係をどう構築するかが問われている。信頼がキーワードになると考えている。

菅原：有識者の検討委員会を組織して本庁舎のあり方をどうしたらよいかをより広く、より深く検討していただきたい。自由に意見をいただいて行政がどうあったら、議会がどうあったら、市民との関係がどうあるべきかご意見をいただき、皆さんの様々な意見を取り込んでよりよい市庁舎にしていきたい。

坂口：公共の文化施設や市役所の音楽堂の建て替えなどの計画に携わっている。また復興支援では名取閑上や福島県川俣町の集落支援などに携わっています。議会だけでなく公共を担う仕組み、市民協働、公民連携のいろいろな幅広い意見を期待しています。

遠藤：まちづくり、地域づくり、人材育成の支援をしています。NPO、自治組織の強化のサポート、住民参加や、政策への住民参加のファシリテーターなどをしている。震災後は住民と行政の連携を多く手がけていましたが議会への係わりはそれほどでもなく、今日はそれを皆様と一緒に議論したい。

(テーブルラウンドの前提を確認する)

- ① 誰に対しても開かれた場であること
- ② 様々な意見を受け入れ取り入れること
- ③ 地域の専門家が集まって責任のある議論をする(批判より提言を)

遠藤：議論に入る前に、河村先生から「市民と議会と行政の関係」についてのおさらいや基礎の確認をお願いしたい。

河村：パワーポイントデータで説明する。議員、または議会、市長は民意の付託を受けている選挙の洗礼を受けている。市民、行政とは大きな違いがある。首長(市長、町長)と議員とを比較すると首長の方が力を持っている。それは行政というシンクタンクを持っていることと、市民と距離感が近く信頼関係が構築されており、情報も議員より多く持って伝えて伝えることができるから。市民からのアンケートでも市長、市職員、議員の順で信頼度が高い議員の専門性も低いと考えられている信頼性の構築には接触経験と情報、距離感が欠かせない。議員への要求が時代と共に、都市と地方でも変わってきている。御用聞き議員からの脱却が必要

だ。議員に何を求めるのか、議会はどうかあるべきかを考えていきたい。

遠藤：それでは皆さんに伺います。普段、議会や行政とどう関わっていますか。

今野：住みよい街にしたいとまちづくりにかかわってきた。ですが議会にも行政にも関わってこなかった。市が主催する青葉山公園の建設にあたり市民の声を聞く機会に参加して意見を申し上げたが、聞いていただけなかったと実感している。町内会にはいろいろな考えの人がおり、支持する政党も異なるので議員とどう付き合うかはむずかしい。広瀬川の治水のことは行政の縦割りの関係でなかなか進まないことや、計画は自分たちで作ったが、実際にやるとなると行政や市、議会とのやりとりがある。最近は給食費が払えない子供が増えてきたなどの地域の新たな課題もでてきて福祉の問題にも行政とどう連携し対応していくかも悩みの一つだ。

谷津：仙台市で障がいのある子どもの放課後の支援の場所を作る補助制度ができて、行政と課題を共有して活動してきた。でも新たな課題が出てきて障がいの枠だけで放課後の支援を語れなくなった。児童館や学校子ども教室など管轄の違う行政ともうまくやってきたところが、障がい児の放課後対応が国の制度に代わり混乱して仙台市では対応できなくなり、議員さんとのつながりを作って一緒に考えていこうと思い市議会とのつながりを作った。しかし議員さんとのつきあいかたに悩んだ。超党派か与党か何を頼めばよいのか、いざという時にわかってもらうために普段の関係性を作っておく必要があると感じた。

緑上：私達みやぎ生協では年に1回県内の首長さん、県会議員、市会議員に地域ごとに声をかけて生協の組合員と懇談会を開催している。テーマは「誰もが安心して暮らせる地域づくり」で暮らしやすい街づくりを皆で考えましょうと各地でやっている。ですが話の内容は通学路のガードレールや危険な交差点に信号機の設置などの御用聞き的な部分が多いと感じている。このような生活の身近な問題は行政に行くといろいろな窓口がありわからないことが多い。でも首長や議員への陳情はわかりやすいので、その関係を続けています。

与野党入り混じっての参加であるので、各党派の方の活動が見える、議会がどんな活動をしているのか見える仕組みがあるとよいが、年1回なので限界がある。行政と生協は「包括連携協定」を結んで、高齢者見守りや、子育て、防災について協働で一緒に活動するいい関係を築けている。審議会や委員会に生協としても参加している。

鈴木：議員さんとはあまり接触がない。子どもや貧困、若者の問題であまり勉強していないのではと専門性での疑問を感じている。議員の方が背負っている方が高齢者なのか、若者なのかという点もあるのかなという思いがある。行政に関しては委託事業の出先と考えていたが、活動で勉強していく中で、公共の意識が少ない人も見受けられたが、一緒に視座を上げていかなければと考えている。NPOは現場の声を代弁しなければいけないので行政とも議会とも一緒に視座を上げて活動していかなければならないと思っている。

横山：私が地域の御用聞きをやってきたので、議員さんを必要としない活動をしてきた。青年会議所の名前で活動して、スポーツや環境などの勉強をして政策提言を行ってきた。その中では行政の専門家の方と一緒に考え協力していただき、教えていただいた。行政の方は2~3年で部署が変わり、いなくなってしまう全てを見届けるところにはいかなかったと感じる。議員さんが人としてやっていることが見えなくなっている。また政治にかかわるとそれぞれの会派のレッテルがついて回ってやりにくくなることもある。政治、選挙、利権に結びつかない

議員さんとの関係が結べれば良いと思う。

坂口：被災地の復興で議員さんとの関係が増えた。議員さんの仕事が過疎の集落から中心市街地の問題まで幅広くなり専門性を求めることが困難になってきています。行政のスケジュールが議会で決まっているのが最高決定機関でありながら不合理なことがある。

遠藤：では、市民と行政、議会との関係がこうだったらいいなという視点でのお話をお願いします。ありたい関係性が建築にも関係してくると思うので。

横山：議員を職業にするというよりも、福祉や建設や教育を実際に経験した専門性がある方が議会に必要ではないか。提案できる議員。仙台としての議員像、まちを市民とともに創る議員。いろいろなクレームや要望を直接届けるのではなく、間に入って調整をするのも議員に課せられた役割ではないだろうか。

鈴木：社会の全体像を俯瞰して見られる人が行政や議会にいるべきである。子ども、若者、教育福祉の全体像を理解する勉強する機会がない。若い世代が市民社会や地域社会を考えていく必要があり、議会や行政の役割を認識していかなければならない。その中で「若者議会」が必要だと思う。市役所を考えるラウンドテーブルにも若者の参加が不可欠で、市民の成熟度を上げて若者が中心となって地域社会を作っていくことが大事だ。

緑上：議会も多様化を考えることが必要。仙台市は女性議員も多いけど地方へ行くと男性とおじさんが多い。旧態依然の議会であり、障がいを持った方、年齢性別様々な方が居る環境の整備が必要です。市議から国会議員になったら市民の声が聞こえてこなくなったという声もあり、様々な意見を議員の皆様へ届ける仕組み、議員の方も街の声を拾う仕組みが大切だと思う。行政も市民に開かれた窓口、何でもやる課、ワンストップサービスのような対応が必要ではないかと思う。

遠藤：議員さんにもいろいろな方いる。議員の専門性、若者の意見を聞く機会、議員多様性などの重要性が指摘されました。

谷津：私たちは議会との付き合いを学ぶ、変えていくことが大切であると感じている。物を頼む頼まれるの関係から一緒に問題を考える、協働のあり方を市民の力として成熟していくべきだと思う。行政と議会の関係はとても気になる。NPO 法人は政治活動に制約があり、個人として応援はできるが、政党との係わることはなかなか難しいことでもある。それを超えられれば議会と良い関係を創ることができると思う。

遠藤：市と良好に協働している一方で、行政は議員さんとうつながつているのか、役割などを確認したい。

河村：現場で行政は議会で条例や予算案を通してもらわなくてはいけないので資料を作って説明してがんばっている。政党によっては上のほうから情報を流して説得をする。行政も政治的中立が必要で与野党関係なく議員さんと付き合うことになる。

菅原：行政が特定の議員につながることはない。管理職以外の行政の職員は議員とほとんど接触をしない。市民と議員さんも同じだ。情報機器が発達したのに実際は人と人がうまくつながつていないと感じる。

今野：町内会活動では、行政のひも付きにはなりたくない。自主運営を念頭にやって行きたい。議員さんといえば地域の方としか付き合えなくて、もっと公で付き合いたい。まちづくりの持続可能な体制を作るために若者の参加が必要で、市民センターの機能で町内会の事務局を支

援する仕組みができないかを考えていきたい。議員さんとまちづくりの集まりを繋いで一緒にやっていきたい。

坂口：議会のあり方を考える時、構成メンバーをどう考えるのか。物事を意思決定する局面で選ばれた人たちだけで決定するのか、別な方法で意思決定ができれば議員の役割が変わってくるのではないかと。

遠藤：暮らしの中から課題を見つけて何とかしようと活動している NPO と、政務活動費が使える議員さんが一緒になって効果的に共同研究や調査をするようなことができないかと考えている。また、事業が決まる前の段階で市民や議員さんも交えて協議する場が少ないと感じている。

河村：石川県加賀市は議員の仕事は市全体のことを考える、地域の課題は地域の人が解決する。古い議員像から脱皮して政策中心で勝負している。住民の手でできることは市民センターレベルで議員に頼らないで住民で解決する。そのために事業仕分けをする。選挙制度を変えなければ女性議員は増えないなどの公平な市民の声を反映できない。仙台の情報公開は地方自治体の中でも飛びぬけて先頭を走っていたが、今はそうでもない。超党派というか会派をこえて議会報告会をやっている自治体もある。市民提案制度を設けてその窓口を議会に置く。それを受ける議会事務局の質を上げなければいけないが、法科大学院を出て弁護士になれない法律の専門家をおく事で議会改革につながるのではないかと思う。

菅原：議会に調査特別委員会を設置して新庁舎について協議している、その答申に「市民に身近で開かれた議会とする」「市民への広報や議論の活性化を意識した ICT 環境のとのった施設とする」などがある。市会議員に声をかけたが本日の参加者はゼロでした。

遠藤：では、新庁舎を考えるにあたり、特色のある市役所の事例紹介をお願いしたい。

菅原：

- ① ストックホルム市庁舎：1階のホールがノーベル賞の晩餐会の会場であったり、結婚式や披露宴が行われることがある。男女ほぼ同数の議員であり、月に2回市議会と市民参加の討論会が開かれる。市民をひきつける工夫がされている。
- ② パリ市庁舎：市民広場があり人を呼ぶ空間がつけられている。広場にメリーゴーランドやスケートリンクがあり、賑わいがある。
- ③ 千葉市：市民がアプローチしやすい議場が作られている。
- ④ 川崎市：最上階の展望ロビーから議場の傍聴席へとアプローチする。
- ⑤ 横浜市：1, 2階に物販や食堂が入っている。議長、副議長、と市長、副市長が同じ階にいて、いつでも話ができる。
- ⑥ 京都市：文化財の古い建物を保存して議場に使っている。行政棟はその奥に新設上空通路でつながっている、1階にお店が入っている。

遠藤：では、これからは議会と行政と市民の関係を考えた時、建築としての市庁舎がこうあったらいいな、と思われることをお話しください。

今野：今の議会棟は入りにくい。フラッといけるようにしてはどうか。市民広場は活用されているのでつくるべきである。仙台市が防災都市宣言をしているので屋上にヘリポートを置くなど、それに見合った設えが必要ではないか。

谷津：区役所は身近で本庁舎は遠い存在なので市民が行きたくくなるような施設になるとよい。「共生

する社会」が体感できる建築で、庁舎に入ったらそれを感じられる雰囲気がほしい。障がいを持つ方たちへの特段の配慮も必要だし、議員さんや、行政の人たちと日常的にすれちがうことができる、話しやすい建物であればよいと思う。

緑上：同じ空間に議員さんや行政の方一般市民が居られる場所があるとよい。くつろぎながら、ベビーカーでも押して見たり体験できるなど。議場が身近になる空間作りがほしい。

鈴木：市庁舎を作るプロセスに意味がある。議員、若者、障害を持った方、マイノリティーの方様々な方たちが議論をして皆で考えることが大切。このような場がいいと思った。

横山：市民が共にまちをつくっていく、仕事を終えた後にサラリーマンや学生が大切なことを議論して作っていく役割としての議員像に（北欧のように）変わって行っているのではないかと思う。議場が議会中とそうでない時の空気を変えて市民と行政と議論できる場所になればよい。あと組織をもたない個人の声を聞いてもらえる場所（前回シティーギャラリーと呼んだ）皆が話し合える場所があるとよいと思う。

河村：開かれた議会の一例として、長岡市はイベント会場になる議場でカーテンを開けるとガラス張りで議場で何しているか見ることができる。インターネットで公開するより市民の誰にでも開かれた議会と言える。また、議会の議事録はインターネットで見ることができるが、もう一步情報公開を進めると検索機能をつけて必要なキーワードを入れると誰がいつどういう発言をしたかが検索できる。そこまでサービスしてもよいのではと思う。

坂口：メディアテークが公開コンペでそのプロセスが公開されて出来上がった。市庁舎もそのプロセスが見えることが大切である。市民広場をどう使うかを検討する中で、傍聴席も議場の区別がなく広場そのものが議場になるような形もあるのかなと思った。

遠藤：庁舎の議会ゾーンに入ると議会改革をしたくなるような未来を先取りする空間、議場にしてほしい。また議会が超党派というかチームとして機能する、話し合える場になればよい。議場が休会中も活用できるとよいと思う。

河村：新庁舎にはネットを無線でつなげられるようにして欲しい。技術変化も見据えて導入が必要だ。

以上

第2回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル© 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する。

C1 既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順やスカイラインの構成を考える。 速報メモ

---

■登壇者・担当者

企画担当 : 高橋直子 宮城県建築士会  
ファシリテーター : 内山隆弘 東北大学キャンパスデザイン室  
ファシリ補佐 : 星ひとみ 小林淑子 宮城県建築士会 撮影 : 岡本宇京  
報告書まとめ担当 : 高橋直子 宮城県建築士会  
説明 : 菅原大助 仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

登壇者 テーブル C1 :

針生 承一 JIA 宮城地域会  
佐藤 建 東北大学災害科学国際研究所 教授  
崎山 俊雄 東北学院大学工学部環境建設工学科 準教授  
渡邊 浩文 東北工業大学工学部建築学科 教授  
大沼 正寛 東北工業大学ライフデザイン学部 教授  
伊藤 彰 久米設計  
西大立目祥子 青空編集室  
久保田 敦 竹中工務店  
渡辺 宏 JIA 宮城地域会  
安田 直民 JIA 宮城地域会

---

○ファシリテーターから主旨説明

内山：前回の振りかえりとして、共通理念の中で「過去の伝統を未来へつなぐ」のテーマから議論をした。議論の内容は、歴史的空間としてどういう場だったか。表小路という象徴的な場、養賢堂の正門につながる道幅が広がった土地。杜の都は名古屋の100m道路とはちがう、杜の都・土のにおいのする緑の豊かな場所。一番町と市役所の関係。

現庁舎についても様々な意見があった。なぜ前庁舎が壊されたかの問題提起。

モダニズム建築の価値というのは風合い、ストーリー性、が重要でそれを決めるのは市民。

災害の経験。江戸期には8回の地震があった。その後も大きな地震を経験して、それをどういう形で伝えていくか。

豊かなオープンスペースを確保したい。緑を前面に表した建築。歴史的痕跡、例えば四谷用水の痕跡をふんだんに埋め込みたい。

迎賓館的な機能を入れて、多くの人を呼び込む。

防災性の関係で複数棟がいいのではないか。複数棟になれば限界性が生まれる。

災害時も快適に過ごせる工夫。例えばゼロエネルギーなどの提案。

庁舎自体が子供たちの教育の場となればいいのではないか。

今日は前半に都市空間の景観・価値をどうやって後世に残していくか。後半は価値をどうやって計画に落とし込むか、を議論していきたい。基本計画の資料をレビューしながら議論していきたい。

前半の議論として、一人5分をめどにお願いしたい。まず菅原室長から現在の庁舎が建てられ、前代の市庁舎が壊されようとしていた時期の社会の状況について、資料をご紹介いただく。

菅原：旧庁舎について、市役所に保存されていたアルバムから、参考にご紹介する。

(パワポで説明～現庁舎が完成し、旧庁舎がこれから取り壊されようとしていた時期の新聞記事など)

当時も建設委員会を作って模型などを使って検討を行っていた。新庁舎の青写真として昭和38年の新聞記事に紹介されている。昭和38年時点で「百万都市にのぞむ大設計」とあるが、その時点ですでに100万人を目指していた。建替えが決まった後に市民の活用意見が出、保存の投稿もあったようだ。美術館への転用や、市議会の中からも建替に反対意見が出た。しかし、解体に決まった。旧庁舎の大理石の階段の一部が、八木山動物公園に残されているらしい。議会棟にあった豪華な仕上げ材は、角田市の方が買い取った。玄関の花こう岩・大理石の一部は現庁舎に再利用されている。旧庁舎解体の棟札が見つかった、という話も新聞にある。

噴水公園整備は河北新報の寄付。かなり頑張った作った庁舎だったので、注目を浴びていたが、盗難も多かったようだ。新庁舎が完成した後、市民が食堂に集まるなどあった。

2代目の庁舎は保存の要望が多かった。

仙台市以外で2つ紹介。川崎市は復原をしている。京都市役所は古い庁舎を残し、北側敷地に新しい庁舎を建設している。

佐藤：市役所建替検討委員の一員として役割を感じている。防災が専門です。前回のラウンドテーブルでの歴史的空間の話は興味深かった。

大沼：第1回にも参加した。今日のテーマを考える時に、「市民が決める」というが「市民」とは誰を指すのか。前回のRTでは「仙台はとらえどころのない町」「ステイシティ」「土着市民」「流動性が高い市民」という話が出された。流動的な市民が持つであった風景が非常に意味を持つ、ということもある。多くの小説家が出ている起因か。これが100万都市か、100年200年たった後、市庁舎がどういう顔になるかは大切。質を落とすような面積の増床はやってはいけない。機能が分散し、区役所もあり、ほかの施設もあり、ということ踏まえ、市庁舎にどのくらいの床面積が必要かの吟味は大切である。

渡邊(浩)：仙台RTは初めてなので、前回の議論は踏まえていないことをご了承いただきたい。環境設備系分野の教育に携わっている。建築そのものは外部空間の設計をやっている、その視点から話をする。

現本庁舎の価値、設備の分野からすると経年劣化していく仕組みであるため何とも言えないが、通りを挟んでの空間ボリュームをみると、結構気持ちのいい空間ではないか、と思っているが、外構計画も今の段階から丁寧に議論する必要がある。それに関連して、平置き駐車場をかなりの台数検討しているのをみて、このようないい場所にそんな台数が必要か、と



感じる。

西大立目：唯一建築のメンバーではないので、1回目のラウンドテーブルには参加できなかった。

建物は1棟で完成するものではないことを基本に置くべき。仙台は城下町としての発展であったはず。市域がスプロール化する時に、この都市の中心・市の顔はどこにあるのか、を考えた場合、勾当台の台の上と下にある所は貴重。そこを再構成していく意識をセンシティブに持たないとダメ。

建物は訪問者にとって大切なのはもちろんだが、市で働いている人の意識にも影響する。高層ビルの上に行ってしまう、身体性から離れた巨大なものに入れられると、生き物としての感覚を失うのでは。市役所は、職員が働く場として考え、なおかつ官僚組織からの脱却していく、というものになってほしい。

針生：前回と重複するが、今回の建替はたぶん老朽化が前提ではないか。その前に、新しい建物をつくるとして、中身がどう変わってくるかの説明はない。市民に開かれた、使いやすい、ということが検討されたかどうか、ソフト面が伝わってこない。建替え前提ではないか。

RCの建物は、弘前の市庁舎（前川國男さんが設計）は、仙台市庁舎より古いが改修している。弘前は大変な金を払いつつ、近代遺産を整備しながら活用して街づくりをしている。すばらしい。仙台市庁舎はBCS賞をとっている。世界的な格付けの賞。施主・設計者・施工者3社の表彰であり、運営も含め、総合的な質の高い賞である。学会賞よりすばらしい。誇りである。私は既存の市庁舎は、どんなに金がかかっても残すべき。RC造の保存は難しいが、これからの社会の問題になると言える。積極的に取り組むべきである。

スクラップアンドビルドは文明なのだろうが、文化は新旧のものを共存させ、対比して残すものであり、時間経過としても「詫び錆び」の日本文化になる。

広場も見越して市道も含めて、全域的な案をつくるべき。まだまだ案がある。

コスト分析は行ったのか。長期的なコスト分析である。現庁舎の27000㎡を改修、残りの27000㎡を新築、というイニシャル・ランニングコストも含めた検討が必要。

一本で何かをたてて済まず、というのはどこでもやっている。見習うべきは京都。今回の建て替え計画は大手事務所向けのプランのにおいがしますが、国際的なコンペを条件付けで行うべき。プロポーザルは反対。

防災の面からはできれば分散型が望ましい。水平方向が長く取れるので防災上は優位。

計画の以前のソフト計画を立ててからの議論にするべき。

内山：ソフト計画については、今の基本計画検討委員会がまさにそれらの条件作成を行う場なのではないか。

菅原：今回の建替えの目的は老朽化と庁舎の分散化を集約するため。BCS賞を軽く見ない、というのはその通りである。内部がどのように変わっていくか、市役所の組織の変わり方を打ち出していく予定。基本計画と同時並行で検討している。

針生：ソフト計画をやらずにハードだけ先行するのはおかしい。このままでは昭和38年の新聞に「100万都市を目指した」と同じになってしまう。政令都市になってからのやり取り、区役所の役割を考えると、市民が来ない部署は別の場所にあってもいいのではないか。そういうソフトを考えずに進めるわけがない。

内山 これまでの検討委員会で検討が進んでいる中で、抜けている視点を上げて頂きたい。その視

点の論理を、検討委員会、さらには社会に対してぶつけていくのがこのラウンドテーブルのミッションだと思う。

久保田：学生時代は仙台におり、10年前に戻ってきて、とても綺麗になっていて驚いている。

日常の歩行者の視点からみた風景をおさらいとして示す。(パワポ資料) 既存建物の構成は、低層部のボリューム、ファサード、広場などからみても、建物の価値としても高いと思える。東二番町のカーブにアイストップとして市役所がある。北庁舎にも陽があたるように配慮しているが、一方で、北側は裏、西側も閉鎖的に感じる。区役所からの眺望は、杜の都の景観とはいいがたく、かたちや高さボリュームによる議論をしても仕方がない。建築はまちのなかの印として、みんなが知っていることで、記憶に残り、ランドマークとなると思う。明治から一番町と片平の起終点として保っているのは素晴らしく、歴史時間軸は重要である。歩行者の視点からフットプリントにおける道の役割を大切に考えるべき。

安田：既存建物の価値を、というものが副題であった。仙台らしさ、モダニズムの価値、BCS賞という話をする。私も一度仙台を離れ、戻ってきた時に「仙台らしさ」を考えるとひとつは「道」であった。当時、仙台市も古い道の名前を戻そうとしていたことを面白いと感じていた。日本の中では仙台は「杜の都」で知られている。現状では定禅寺通り、青葉通りのイメージが強い。道の性格が出ている。一番町は重要な道であり、道、というものを仙台らしさであり、簡単には代えられないものの一つであろう。

もう一つは広場、空地が仙台らしさを作っている。市民広場と噴水広場がいい空間をつくっているのだから、市民広場～市役所は一体的に計画をするべき。計画をする係がちがう、という事は言わず、連携してほしい。庁舎をみる視点で考えてほしい。

大きいスカイラインの議論は意味がないと思っている。一番町を歩いているときの間隔など、自分の手の届く間隔が「らしさ」をつくる。

防災、災害の観点からは空地が重要な役割がある。庁舎を免震にする、構造上ランクをアップするのみではなく、周りを含めて有事の際の役割を議論する必要がある。

仙台の顔でもある緑の量が、資料の中で「現状の市役所の緑化面積は18～19%なので、新規計画では20%にする」というのは思想として意味がない。計画の根幹にもなり得る。

伊藤：仙台市庁舎の基本計画支援業務に12月から携わっている。

既存庁舎の価値を話せる立場にはないが、川崎市庁舎、世田谷区庁舎でも既存建物についてテーマにしていた。市民側の意見が基本計画時から議論になった。世田谷区庁舎は法的なクリア、技術的クリア、そしてかなりの愛情・使い続けるという意味がないとクリアできない事をプロポで感じた。現実的に残すのは難しかった。その際、どうして残したいのか、どう使いたいのか、の議論がないまま進んでしまい、あれでよかったのか、と考えさせられた。既存庁舎を残すことを考える場合、建物が重要なのか、外部環境が重要か、周辺との関連を絞り込んで議論をしていった方がいいか、と感じた。

渡辺(宏)：仙台ラウンドテーブルの役割として、基本計画→設計者→施工者という流れになるが、具体的な方法ではなく、「なぜその方法を選ぶのか」「なぜその解決が必要なのか」という考え方・文化性のような話が、このラウンドテーブルの中で共有されてこれからの基本計画・設計につながっていくのいい、と考えている。現在の市役所の基本構想の中に、ビジョン、理想がなく、老朽化・集約化に対しての問題解決型手法のみが見られる。このラウンドテー

ブルで整理をしていけるのではないかと。共働の場所が出来たとラウンドテーブルを評価している。

既存庁舎の評価、どうみるか。BCS賞という評価。50年間仙台の顔としてあった時間の重さを振り返るだけでも価値がある。残念ながら、新しく建物をつくるという方針になった。それは（現在の庁舎を）うまく活かす方法・共有の視点が欠けているためではないか。なので、基本構想の中でも壊す方向になったのではないかと。そこは見直す必要はあって、検討すべき。プロセスが次につながるためにも。60年後、これからの都市の在り方を時間軸の中で、何をすべきかを検討することが次につながる。建物を使い活かす文化を育てていくこともできるのではないかと。

また、別途検討中の音楽ホールとエリアが近い。それも含めて検討ベースとしては都市経営、地域経営、戦略の視点から、計画をしていくべき。

崎山：近現代建築の歴史を専門としている。歴史的視点からの立場で参加、と思っている。

情報提供として、近現代建築の価値評価は難しい。特にRC建築に対しての確立された評価は、現在議論を行っている状況。建築学会が行ってきた近現代建築のリストがあり、第1弾として「総覧日本の建築」という1986年にでたリストがあり、東北・北海道版が出ている。その中で社寺建築を含め、宮城県内に50件くらいのリストアップがあり、その中で近現代建築はいくつかある。その2015年に補完調査を行い、総覧にのった建物以外で、学会賞・BCS賞・東北建築賞などの建物をくわえ、リストを増やした。その中で、戦後の建築でこれに掲載されているのは8件。ここ10年の間に、1件が壊され7件になった。仙台市役所（昭和40年）、東北大付属図書館、PL教団、宮城学院、宮城県美術館、大崎市民会館（昭和41年）、バッハホール。その中で市役所が一番古い。このうち2件が建築後50年たち、文化財登録になりうる。今後、仙台市が近現代建築で文化財にしていこうとすれば、仙台市役所が一番に挙げられる。保存を主張しているわけではないが、学術的な価値基準を示した。

似た事例として、倉吉市庁舎（昭和32年）がある。旭川市役所（昭和35年）は学会賞受賞、docomomoJAPANにもなっているが、解体が決定した。学会長名で保存を要望したが。寒河江市役所（昭和42年）は免振層を入れて残す方向。関内の横浜市役所は新規に庁舎を建て、旧庁舎は大学の研究所となった。川崎市役所、京都市役所は先ほどの通り。川崎市庁舎は既存の建物をどうしたいかを市民にアンケートを取ったが、残したい人は2割しかいなかったが、川崎市は復元を決めた。興味深い事例。ビジョンが必要で、どうすべきかの判断が必要であろう。

足元からみた景観は重要である。市民広場に立つと、市庁舎と県庁の低層棟がそろって見える。配慮が感じられるが、とてもきれいに見える。今ここにある模型は中途半端な範囲であり、もっと広く必要。景観は人間の目からもっと広くみる。どこまで人間が見えるかをしっかり理解したうえで配慮することが重要。

内山：これで一巡しご意見を伺ったが、委員会になげかける検討項目として重要なものが出されたと思う。例えば、道、外部空間、周辺建物との関連などについてである。また既存庁舎については、学会が考える価値、市民が持つ意識、これらの間の乖離を埋めるための橋渡しをする必要があると感じる。とりわけ既存庁舎についての「愛情」が重要なキーワードだと思うが、この観点からのコメントはないでしょうか。

大沼：自分は既存庁舎に対しての愛情は微妙にない。街の中の大事な建物を守る立場で活動してきたため、市役所に対しては戦ってきた思い出がある。ペDESTリアンなどで、なんとなく平均のところのレイアをかぶせている、という安易さは良くない。断面方向が大切。既存庁舎をどうとらえるべきか、見学会を開催するなど、きちんと見る機会が必要ではないかと思う。知らないうちに壊す前に。

久保田：北海道庁舎について調べてほしい。移築する先がないため使いながら改修している。

針生：これまで市役所改修は行ったか？見違えるようにきれいにする、という意味で。

菅原：震災以降、内部の補修程度しか行ってない。

針生：築50年であれば改修を行うべき。今の庁舎は暗い。改修を行えば見違えるはず。汚いままを残すということではない。費用対価も含めて考えるべき。高層棟で一本にする市庁舎はやはり。流行りには乗らない。

西大立目：仙台市民は愛情が薄い。愛着がわからないまま、ぐずぐずと壊している。宮城県庁がいい例。区制になり、本庁舎は市民が30年使わなかった。だから壊すのか。ちょっと悪かったかな、という気がする程度はあるが、きちんとやった方がいい。

安田：愛情＝価値。仙台市民にとっての価値であり、それは人それぞれ違う。あの市役所が何してくれる、というのが価値。30年行かない、という時間があり、市民には愛情が欠如したと思う。

崎山：市民の時間が短く、秋田で仕事をしていた。白井誠一が設計した湯沢市庁舎を解体し、集約して一か所に建てた。旧庁舎は解体して駐車場になった。秋田市役所も久米設計が設計した庁舎を解体した。各地でそういうことが行われている。時代を作ったデザインが消える、というものは空虚感が残る。他地域での事例で建替えた結果、どうなったかの他事例のレビューをしてはどうか。

内山：既存庁舎についての議論はかなりできたと思う。この議論が、既存庁舎について社会が考える第一歩になると思う。後半では、前半で議論した様々な価値をどう実現させるのか具体的な方法を検討委員会の資料をレビューすることで行いたい。

・・・後半・・・

内山：後半は菅原室長から検討委員会の資料の説明を行ってもらい、それを受けて議論を深めていきたい。

菅原：検討委員会の第1回・第2回の資料を配布している。重要なポイントの説明。

第1回資料は、共通理念の説明が主としてある。また、解体困難部分を移転するには、仙台市の民間オフィスの空室率3%と低く、仮移転が難しい状況を示す。前半の議論でもあったが、コンクリートの中性化試験結果、老朽化が著しいという結果があり、建替えという方向になっている。新庁舎の配置計画は4案あり、1棟から2棟のボリューム案を検討した。

第2回資料は、現在の市役所は11か所に分散している。民間から借りている庁舎スペースに年間2億5千万円ほどの支払いがある。また、市役所の職員数は現在3200人。将来は本庁舎内で働く人数は2600～3000人と想定している。

資料3は市民広場でイベントをやっている際、市役所側の駐車スペースは裏方的。一体的ではない。市民が日常利用、イベント、防災広場として活用をめざしていきたい。イメージと

しては紫波町オガール、東京国際フォーラム、北海道庁前などの例をあげている。

駐車場については、現状の使用状況が将来も続くのではと考えており、市民用の駐車場 365 台。自転車 840 台以上を検討している。地下駐車場の有料化を考えている。地上の駐車場は災害対応場所、また次の建替え用地。

敷地内の緑化率の目標は 20%以上、ではだめという話は内部でも出ており、コンセプト、何を指すのが重要。

資料 2 の裏面。庁舎規模は、原状をちょっと増やす程度を考え、床面積の目安は 66000～78000 m<sup>2</sup>。国交省の目安では 75000 m<sup>2</sup>区くらい。町づくりに供する市庁舎を目指し、国交省の目安から増やしている。

職員の働き方、区役所との関係、これからの AI などでもどんどん面積は減っていくと想定している。近後精査していく。

ケーススタディとしては 5 案。ボリュームベースの検討で、基本形を示したのみの提案。

(提案説明は省略)

内山：5 つの配置パターンについて、道空間、景観、視線、などについて議論を進めたい。

渡辺 (宏)：県庁の南にある合同庁舎が 4～5 年前に建ち、その際の景観スタディがあったはず。それを参考にしてはどうか。工事期間中の景観形成の視点もいれて考えていきたい。高層、中層案だが、10 年、20 年、30 年後、高層ビルがもっと増えた時、高層のスカイラインのあり方は変わる。その時の市庁舎のあり方と姿も想像しておく必要がある。必要な車を必要な導線で配置する、ということはあるが、必要台数にこだわらず、都市機能、災害時の発想から、(地下の大規模な駐車場などを) リーダーシップと戦略を持って発想してほしい。

(庁舎と市民広場を二分する) 表小路をどうするか。周辺との繋ぎ方、一番町との関係性のデザインがポイント。

一市民としての希望を言うと、「楽しい時に人が集まる。苦しい時、困った時にも人が集まれる場所」であってほしい。

安田：ひとつは空地・道ということを基本に計画を行ってほしい。仙台市でも空地を検討しているが、それは建物の配置からみたものである。一番町との関係、バス停の配置、などがどういう風に整備されるか。また、平置き駐車場を将来の建替地とするのはナンセンス。耐用年数が少ない鉄骨造を配置すればいい、という考え方もある。

80 年を見越した建物、人口減少、高齢化などの問題にどう対応していくか、の検討を行うのはわかるが、そういう問題は 30 年後には全く変わっている可能性もある。80 年間、建替え用地としてキープしていくことを考えるよりは、長く持たせる建物、簡易的に 20～30 年の建物の組合せも十分可能ではないか。例えば住宅展示場のように。そういう柔軟な考え方もできるのではないか。

最後に、ソフトを十分に考えないで計画するのはおかしい。役所内部では本気で考えているとは思う。それはまだ公にできない、と言いうこともあろう。では議会はどうか。我々市民が議会は今後どうあるべきか、ボリュームの大きな部分を建物の中にどう位置づけるか。議会の場所も同じ建物の中になくてもいいのでは？地下？1 階？という話を全体計画の中で早めに行うべき。

針生：コンクリートの劣化は止められる。そのような検討は行ったのか？私が考えた案を示します。

(スケッチあり。既存市庁舎を残し、噴水広場と市民広場を市道の上部でつなぐ案。15階建てくらい。前面をグリーンで覆う。市民広場側の一部は屋根がかかる。震災時の事を考え、全館冷暖房として有効活用する。)

既存建物を残す案を全く考えていないのでは。

内山：針生さんの提案も含めて、検討いただければと思うが、いかがか。

久保田：一番町の縦の線上に市役所があり、敷地内の通り抜けるを考慮する重要性は検討委員会資料でも確認されているし、技術提案書にもまとめられている。これを道として単純に書けば交差点になり、ビルの下を通り抜けるには立体交差すれば可能である(参考にできる事例をパワポで提示しながら)。現在の検討では、低層棟と広場の配置によるフットプリントに高層棟のそれが縛られたように計画がされているが、違うと思う。高層棟の配置をフットプリントから自由しても(技術的にも)問題ないと考えられる。

大沼：これまでの議論の中で、皆さんも市役所周辺を思い起こしながら考えていたと思う。例えばよくある話で、木が一本あって、それを残すという議論になるが、そういう過程でどんな痕跡を残すか、という議論・計画の中のプロセスとして必要だと思う。我々は震災を経験し、様々な人たちが様々な心理状況にあって、そういうことを体験したという面で、少しだけ進化したと思っている。建築のように形のある部分ではなく、ない部分で大事なものを包んでいく、という動かないものを見つけて残していくべきではないか。平面的な話だけでなく、段丘の町の中で断面的に検討し、ランドスケープの手掛かりになる。庁舎だけでなく区役所を含めた、星座のような構成を考えていくようなイメージで。

渡辺(浩)：コンセプトイメージにあった災害対応・危機管理、持続可能・事故管理については建築の配慮である程度対応ができる。機械設備については、資料5に網羅的に書いてあるが、リストアップだけした、という感じである。平常時と非常時についていかに計画するのだが、その根拠となるものがBCPであり、庁舎を建替える時に市民に開かれたとなる。そうすると非常時に市民が殺到する。非常時にその中枢となる機能を市庁舎が持つ。その場合の容量の部分まで話をおこしていかないといけない。駐車場の話でも同様。しかし、そのような与条件の部分については、資料からは全くみえてこない。上物の条件の $+\alpha$ だけでしかない。新しい市庁舎は、震災を2回は経験するであろう。また、気象条件の上でも、暑熱化についてもそう。足元の何を考えてこなくてはならないかをもう少し丁寧な議論が必要。

佐藤：BCPの側面から、新庁舎を分棟にすることで災害時のリスク分散にはプラスとなる。1棟にする場合でも、近隣に立地する既存の他の庁舎を含めた「市庁舎の群」としてのリスクマネジメントを考える必要がある。また、新庁舎の駐車場の面積については、災害時の機能が期待されており、一定の面積は理解できるが、宮城県で整備を進めている広域防災拠点との連携をはかり、同じ機能の重複を避ける代わりに、別の用途や機能で有効に敷地を活用した方がよい。

内山：登壇者以外の方からも意見を伺いたいと思いますがいかがでしょうか？無いようであれば、登壇者の方から。

崎山：80年を見通しについて、これまで80年みこして建てた建物で、80年その通りに使われた建物は存在していないはず。80年の根拠はなく、また誰も担保できないはずで空論になるのではないか。もう少し議論をし、かみ砕いてみて、フィードバック検討しなおす必要があるか。

コンセプト「持続可能性」という話はあるが、仙台の歴史文化に配慮する、という文言がひとつもない。これを入れていただき、設計者選定の際にその文言に対して、設計者が様々な提案を行う可能性、例えば「建物を残すことに可能性を見出す」という考え方があったり、「軸線を残すこと」ということだったり、そうしたことに開かれた条件設定をして頂きたい。会場から意見（青葉区住人・男性 59 歳） 仙台市民として暮らしている。現在の市役所は暗い。それと比較すると県庁舎はホールがあり開放的である。仙台市庁舎は杜の都、木の雰囲気を感じるような空間がほしい。緑で覆われたイメージがとてもいい。いい事例として、泉ヶ岳少年自然の家は宮城の木を使っている。CLT なども。仙台市民が憩える場所。災害時にも市民が集まれるような場所があればいいと思っている。

針生：80 年の話から、ストックホルムの市庁舎は 30 年かけて設計している。ぜひ、条件をそろえ、国際コンペをして、1 年くらいのコンペ期間、3 年くらいの設計期間をもてば、きっといい市庁舎になると思う。今は早すぎる。

内山：後半のまとめとして、簡単におさらいすると、以下のようなことだったかと思う。

- ・合同庁舎も含めて、この周辺を郡として計画を考えるべき。
- ・周辺の建物の高さも含め、都市景観は時間の中で変わっていく。建物の中身も変わる。それに対応できる構造体のあり方。
- ・高層棟の下にも広場や通り抜けを設けることは可能であり、フットプリントと上部の構造の関係性は絶対的なものではない、という意見があった一方、空地にも意味があり、そこに歴史の痕跡を残しておく検討も必要との意見があった。
- ・市民広場も敷地として一体的に検討することで、既存庁舎を残しながら必要な床面積を増やすことを含め、様々な可能性が生まれるという提案があった。
- ・ストックホルム市庁舎の設計に 30 年がかかったように、長く愛されるような設計案を得るためには、十分な時間をかける必要があること。例えば、国際コンペなども検討すべき。
- ・木の空間が仙台らしい。

以上列記して、まとめに代えさせていただきます。

以上

第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所（シティホール）を模索する」  
ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー  
テーブル© 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する。

C2 低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える。 速報メモ

---

### ■登壇者・担当者

企画担当 : 小林淑子 宮城県建築士会  
ファシリテーター : 佐藤芳治 NPO 法人 都市デザインワークス  
内山隆弘 東北大学キャンパスデザイン室  
ファシリ補佐 : 星ひとみ 高橋直子 宮城県建築士会 撮影 : 宮城県建築士会  
説明 : 高橋香奈 仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室  
報告書まとめ担当 : 小林淑子 宮城県建築士会

登壇者 テーブル C2 :

杉山 丞 東北大学キャンパスデザイン室特任教授  
山田 文雄 (株)都市デザイン 顧問 (仙台担当)  
柳井 雅也 東北学院大地域経済  
村山 光彦 公益財団法人 仙台観光国際協会 理事長  
伊藤 彰 久米設計  
高野 大地 高野大地建築企画  
洞口 苗子 L・P・D architect office 代表  
錦織 真也 宮城県建築士会

---

今回ラウンドテーブル2回目ということで、1回目もこれに近い低層部についての議論が出ていて  
どういったキーワードが出ていたかということを少しまず最初に振りかえってみたいと思います。

(キーワード)

佐藤：官民連携で何かやってみましょう、開いていった方がいいのではないか、ただ開くといっ  
ても具体的に時間でどこまで開けるか、セキュリティ上問題があるのでは、といったことな  
どがでていました。このあいだ1/17に第二回の検討委員会がおこなわれ、そこでの資料がお  
手元にいつているものです。

資料3をご覧くださいませでしょうか。

資料3・4についてざっと仙台市の高橋さんから説明を頂きたいと思ひます

高橋：仙台市本庁舎建替準備室の高橋と申します。

現状の基本計画の委員会内でどういふ議論をしているか、というところをご存知の方もいる  
かと思ひますが、はじめての方もいると思ひますので説明させていただきます。



まず、基本計画、設計の与条件を決める段階の委員会が1/17に開催されました。そこで市役所の土地をどういう風に使って行こうかと、今回の低層部の使い方について抜粋して説明させて頂ければと思います。

敷地内の土地利用ですが、現状、市役所の噴水広場と市民広場について抱えている課題として去年のジャズフェス開催時の写真では、テントとか、ステージでひとがにぎわっているが、市役所の噴水広場の方には、賑わいが連続していないところが現状の課題と考えています。今後の検討として市民広場との連続性を配慮した土地利用計画を立てていこうと、考えています。あわせて、この間にある市道表小路線、前半でも歴史的な場所だとお話がありましたが、交通量の関係で廃道とかは難しそうと、検討はされていて土日だけでも歩行者天国にするなど連続性が確保していけないか、と考えています。

続いて(3)今後どういう風にその広場を使うのか、といったイメージの話になります。

まず、市民が日常利用できる広場を設ける事、かつそこでイベントが開催できる広場とする事、かつ防災広場としての機能を持たせること、前半でも空地の使い方について話がありましたが、どういう機能を持たせるかというところで現在、この3点をポイントとして考えています。

その中でイメージとして芝生の広場を設けている、岩手県の紫波町。新潟県の長岡市で半屋外のナカドマという空間を設けてイベント広場として利用している空間。庁舎ではないが、建物と建物の間をオープンスペースとして広場的な使い方をしている東京国際フォーラム。道路を廃道にして広場化した札幌市のアカプラという場所がありますが、こういう使い方がそれぞれ現状の例として考えています。

つづいて、広場ではないそのほかの部分ですが、何度も先ほどから駐車場の話が出ていますが、まず、現状の台数はいくら必要か、と今回の資料では踏まえています。現状、集約する庁舎等、含めて合計365台、市役所としては必要と考えています。ただ、シェアカーをするだとか、そういった議論も出ていて基本的にはこの台数を整備したいと考えていますが、皆さんからご意見いただけたらと思います。ただ、これは、現状の台数であって新しいものを作る時にこの勾当台のエリアとして必要な台数の議論はできていない状態です。駐輪場に関しても同様です。

続いて、資料3の裏面にいきます。

前半でも緑化の話がありましたが、思想の面ではなく、現状で18.7%の緑化があるので今後20%程度、敷地内を緑化していくという方向を土地の利用の話としては、現状考えています。

これについてもご意見いただければと思います。

後、皆さんにご意見いただきたいところで重要かなと考えるのは、外部の導線計画について、配置パターンに大きくかわる部分、前半でフットプリントをどういう風に考えていくか、というところもかわってくる場所ですが、地下鉄との地下階の連結の必要性とか、一番町から歩いてくる歩行者空間の連続性をどう確保していくか、これが北側に抜けていく導線として必要なかどうか、屋外広場をどういう形でどういう使い方で設けていくのか、現在、まさに検討中なのでご意見いただけたらという風に考えています。

続いて資料4ですけれども、具体的に市役所の1階部分、2階部分といわれる低層部にどういった使い方を持たせるか、という話に移ります。現状ですけれども、低層部分に市民利用、

情報発信の機能をその部分がまちの賑わいに資する部分にしましょう、と仙台市では考えています。

併せてそこが、災害時の災害転用の用途になるようにも考えています。その中で前半でも話をしていただいていたのですが、行政機能としてどうしても求められる機能として、窓口機能だとかロビー機能だとかがあり、そういったもののほかにまちの賑わいに資する、庁舎の視点から求められる市民利用、情報発信機能として何が必要なのか、というところを今日お話しできたらと、個人的には考えていました。例えば、先ほどお伝えしたイベントスペース、市民情報の発信スペース、そういったものが何なのか、あと前半でも 80 年を想定するところで、今の時代、現状から考慮する課題とは、かわっていくのではないかと、というお話もありましたけれども、たとえば、人口減少への対応性だとか、それによる、職員の減少だとか、男女共同参画支援とか、そういったところの考え方もお話できればなという、現状です。以上です。

何か、補足とか、現状どういう風に考えているかわからないところがあれば質問していただければと思います。説明としては、以上になります

佐藤：このあいだ傍聴してきましたが、メモリアル関係の議論、また委員会が立ち上がり、べつの議論が始まると思いますが、その辺についてのご指摘とか、保育所・託児所に加えてレスパイトサービスという話も出ていましたが、障害を持たれた方々へのサービスも必要ではないかという話や、東日本大震災後の庁舎ということから、耐震装置が付くことになると思われますが、積極的に展示して防災意識を喚起していけばいいのではないかと、というご指摘もありました。私も聞いていてこの表なども見ながら、市としては、今までのパブリックコメントや市民の方から出てきたアイデアなどが、この表に全部詰め込まれている、という印象があります。どういった観点で大事なものをここからピックアップしていくか、視点についても議論していただければ、いいのかなと思っていました。今、こういったことで議論が進んでいる低層部の機能ですが、今日お集りのみなさまから、感じておられることをまず、自己紹介もかねてお願いします。

高野：宜しくお願いします。今、個人で事務所を主宰しているが、もともと設計畑にいて、空港や、スポーツクラブといった大きな規模のものをやらせてもらった後に、CM といわれる、建築の専門の方はご存知と思いますが、プロジェクトの裏方に回って、どうやってプロジェクトを回していくか、ということを経験家の専門家としてやっている中で、4 年前から女川町のまちづくりの裏方をしています。その中で去年の 10 月にできた複合庁舎の基本計画書も設計者とは違う立場で発注者側を支援する立場で関わりました。今回も市役所ということで少しでもお役に立てればというところなんです。地方創生といったこともして大きくまちづくり全般のことをやらせてもらっています。今回の計画についてですが、低層部について気になっているのは、資料 6 のパターンの比較をされていますが、範囲が狭いのではないかと、と思っています。市役所機能を考えたときに定禅寺通り全体、西公園くらいまで見てもらって、メディアテーク、建替えを控えた県民会館をどうするか、音楽ホールの計画もあるし、今後、市役所周辺建物の建替えもあるなかで、まち全体をどうやってローリングさせていくか、ということ視野に入れていかないといけない、その先駆けになるはずなので、そのくらいの規模感でやっていただきたい。

低層部については、どちらかというと室内の市民広場、屋内としての大空間が東北という地域性で、雨天時、雪とかがあり、また他地域の庁舎の先例となるような、解となるような、外で使う市民広場に対して、中で使う低層機能を、ぜひ作ってほしいと思っています。あとは、総合計画も作られていると思いますが、比較表を見るとソフトでの比較が足りないと思います。ハードによって印象があるので、もう少しソフト面を考えて、総合計画にあったものを提示することでほかの公共施設の建て替えに普及できるのではないかと思います。

佐藤：総合計画を比較パターンに活かしていくのは、難しいような気がしますが、どのような感じになりますか。

高野：総合計画の中でもソフトでどうやっていくのか、たとえば、女川だと子育てとか、健康、スポーツ（女川は、スポーツ観光とか、合宿誘致とかしていたので）そういったところが、テーマとしてあがってきます。そうすると町の色が見えてくるので関連性を持っていける場所があります。値らは複合庁舎でもあるので。今回、議会を19階にもっていくことには、必要性を感じてなくて、一番いい場所に議会なの？というところがあります。

佐藤：重点政策に対応するような場所が前に出てくるといえるのか、いい場所に出てくればということですね。

村山：昨年3月まで市役所にいました。

主に都市計画、交通計画に30年ほど携わっていました。最後は、区役所から市民局にいました、今は仙台観光国際協会インバウンドとか、外国人市民の話とか、コンベンションといった仕事をしています。

私は低層部の機能について具体的に少しアイデアをご提案したいと思います。

一つは、昨年3月まで市民協働の旗振りをしていましたので、協働の関係で何かないかなという話です。実は、協働関係の施設は、中心部に分散配置されています。男女協働は、二か所ありますし、NPO活動ではサポセンがありますし、消費生活センターもあります。震災復興記念館もあります。そうした現状を、私は基本的には評価していて分散配置で色々市民の方が使われているという現状は、いいんじゃないかと思っています。そういう意味でそういった施設をあえて市民協働ということで新庁舎に集約する必要はないと思っています、それを前提として市民が新庁舎にどのように集まってくるかという、より自由に使えるようなミーティングとか、打合せとか、待ち合わせとか、そのような空間だろうと思っています。個室もいいですし、半オープンみたいな空間でもいいと思っています。ただ、問題は、そういう場だけあってもだめで、資料4にあります、市政情報センター、市政情報の機能があります。現状でもありますが、今は書籍をおいて勝手に書籍を見るだけになっています。これは、あまり使われておりませんので、先ほど申し上げた男女共働、NPO、様々な市民活動に関わるものの情報を双方向でやり取りできるような、ワンストップで市民が情報を入手できるような、そうした機能に拡充してオープンスペースにくっつけていくことは非常に大切だと思っています。実は、皆さんあまりご存知ないかもしれませんが、本庁舎の1階には、広聴相談コーナーというのがあります。市民の相談を受け付ける部屋もあります。それも今後やはり、外国人市民も含めて少し市政情報の機能を拡充してもう少し広範囲に広げてオープンスペースにくっつけていくやり方をぜひ考えて頂きたいと思っています

もう一つ、関係する話として観光コンベンションやっていますが、やはり、市役所周辺の

らしさ、特性というのは、祭り、イベントだと思っています。

いろんな国内の方、あるいはインバウンドの方も含めて、あの近辺での祭りやイベントへの関心が高くなっています。そういう意味では、まつり、イベントは、あの地域を特徴づけるものと思っています。私も青葉まつりの主催者ではありますが、イベントをやる立場から言うと非常に不十分。市民広場は、面積、設備もそうですし、雨天時の問題もあります。新庁舎の計画で屋外広場を計画されていますけれども、屋外広場の問題と、庁舎の屋内の滲みだしは、一緒に一体となって考えて頂きたい。規模感はありますけれども。

あと、いずれご検討なされるでしょうけれども市民広場、イベント広場そのものの再構成、これを一体として是非検討いただきたいなと思っています。大規模イベント時は、市役所庁舎の1階部分は、待ち合わせにも使いますし、いろんな会議室を着替えに使ったりいろんな使い方をしています。そういった使い方ができるようにオープンな空間もあり、個室空間もあり、イベント祭りを支援できるように是非していただきたいなと思っています。以上です。

佐藤：今の庁舎でも、祭りなどでは支援する機能に一時的になっているって事ですか。

村山：一時的に使っています。

洞口：岩沼で設計事務所をしています。大学で非常勤で教えたりもしています。

私が庁舎周辺エリアで関わっている件について前半としてはグリーンループ仙台というイベントで市役所に実際申請を通す際の配置計画を作成したり、あとは、当日いらっしゃった方に配布するフライヤーマップの作成をしたり、また当日出店者として出店したりという部分で結構、外にいながら身近に関わらせていただいたというところからお話しさせて頂きたいというのと、後半ちょっとだけなんですけど、定禅寺通りの不動産オーナーの動きとして紹介させて頂きたいと思います。

まず、前半なんですけど、これが当日配布した裏のマップを作成しました。この時は、コンセプトとしてグリーンループということで仙台じゅうにある公園をつないで回遊できるようなイベントをするというところで、グリーンループのロゴがついているイベントが色々あるんですけども、そういうワインだったり、パンだったり、コーヒーだったり、雑貨だったりというイベントが、定禅寺通りであったり、それ以外にもアースディだったり、植木市だったり、当日別のイベントだったりを同時に掲載して、最近回数を重ねてきて周辺の店舗、イベント以外の店舗にも波及してお金が落ちるような意味の波及効果も含めたイベントを目指してグリーンループというものが2017年に始まりました。こんな感じで、定禅寺通りってケヤキ並木の美しい写真ばかりが出てきますけど、基本は誰も歩いていないというところで、実際何もなければ歩いていない、日常に全く馴染んでいない、ちょっと使われていない公共施設と同じような状況になっているようなところで、ここを民間の手で活用するということで、本当に真の人が求めているようなコンテンツが集まったイベントになっています。こんな感じで普段、人がいないところが、こんなに賑わっていて、なにより、かっこいい、というところが一番大事なんですけれども、それをやっているのが、民間主導行政参加という形なのがこのイベントの特徴なんですけれども民間でPPPエージェントの本郷紘一さん、最近だと勾当台のライブラリーパークだったりとか、あと仙台晩翠通りのコーヒースタンドとか、小さくですけども地道にどんどん大きくなってるといって、本当に仙台にいてよかったと思える人材と思っています。このイベントのすごいところは、今までは、普通のイベン

トは、補助金出して回しているんですけども、このイベントは補助金は一切は行っていません。むしろ民間が、公園使用料を払ってやっているところがすごいところで、さらには、ローカルコンテンツ、ナショナルチェーンではなく、地元のコンテンツというものをコツコツと発掘して行ってそれを集積させて行ってマーケットを作っている、稼いで公園使用料を払う。普通のやり方ではなくて、本当に不動産オーナーに賃貸で払っているような感じで場所を借りて、普通に事業をやっている、という民間の不動産と同じような回し方をしています。

そんな感じで豊かな風景ができてきているというところで、私も本当に悔しい事なんですけど、今まで建築とかまちづくりとか勉強してきてそれで実際に本当にうまく使われるかどうかというのが、本当に賑わいを生むマーケットが必要だなと、身をもって体感して、例えばどんなにいい建物を作ったとしてもそれを使う人がいなかったりとか、それを本当に活かす人がいない、ということが、今までのいろんな施設の失敗ではある、と思うので、それは建築家とかコンサルの役割はもちろんあると思いますが、そこだけでやってしまうと、実際ずれた提案になってしまったり、森ビルとかは全部、一社でやっているわけでプロジェクトマネジメントをする人が設計に対して面積が広すぎるから減らさないと予算に合わない、事業的にも無理だよ、収支が合わないよというチェックが入ったりということがおこるんですけども、そういうことがないと、過剰な施設ができてしまったりとか、ということがおこるといのでこういうイベントは、結構小さいながらも参考になるかなと思っています。あとは、定禅寺通りの沿道経営体という考え方なんですけど、定禅寺通り自体を一つの不動産ごとの土地で見るとはなくて、通り全体で管理しようという動きがありまして、定禅寺通りの不動産オーナーさんが共同でイメージを作ろう、みたいな感じで私も共同で作ったんですけども、こういう感じの長い定禅寺通りのイメージなんですけど、主に例えば、自転車レーンなんかを通して公共交通にしている歩道は安全に歩ける、自転車は通らないようなものにしたりだとか、ストリートファニチャーとかを入れて、歩道に豊かさがにじむようなはなしとか、というものが、不動産オーナーもやはり危機感を感じていて、駅にいろいろ大きいものができたりとかして、こっちの方まで価値が下がってしまうというのが、一番被害を被るのが、不動産オーナーなので、そういう不動産オーナーさんの自らの危機感というものから、こういうやはり通り全体で何とかやっけていかないとだめだよ、という組織もちょっと始まろうとしているというところの参考でした。やはり通り全体を、人が歩くわけなので、そこは沿道のオーナーさんが共同で作ってこうという動きがあるということです。そこは、庁舎建て替えについてもその動きとともに一緒にエリア活用を高めていくような事はできるかなと思います。

今回の庁舎建て替えにむけて低層部の役割ってどうなのかということで、本当に事務職員のためのスペースを1階に入れてしまうという事ではなくて、それは誰もわかっていると思いますが、庁舎のたたずまいとかあり方というものが、庁舎だけではなくてその周辺エリアにも影響するということがすごく大切なことだと思います。さらには低層部は仙台だからそのコンテンツにあふれることが大事なのかなと、私は思っていて例えば今、駅前だったり、アーケードも家賃が高くて若い人がはいてこれないみたいな状況の時に、アーケードの突き当りの位置にある市庁舎というものがもう少し、本当の仙台の産業だったりというものを

見せて、観光客が喜ぶし、仙台市民の日常に触れられるような、そういうエリアになっていたらすごくいいんじゃないかと思っています。そういう場所をつくっていくためには、マーケット、市場を作れるという人材、これを PPP エージェントと呼んでいたりするんですけども、そういう人が主導して進めるということがとても重要になってきます。そういう人がローカルカフェだったり、ローカルレストランとかをカッコよくやってほしい、というのが私の希望ではあります。例えば、オガール紫波町のように PPP エージェント、今は建築の設計の人もたくさんいるし、コンサルの方もたくさんいるしっていう、そういう部分では十分な体制だと思うんですけどもそこに PPP エージェントのような役割を担える方がどう入ってくるか、そこでどういう賃料を払ってどのくらいの面積を借りたい、とかいった具体的な話だったりとかいうところで事業を組んでいけるような事が大切だなと思います。

これは、うちの近くの岩沼に建った新しい施設なんですけど、出店者募集のチラシですが、低層部に出店できる店舗を募集していて月 6000 円で貸しているんですけども、まず施設がダサイということと、入っている方も年配の趣味的なものばかりおいていたりとか、若い人が入りたいと思える施設となるのが大切だなということはもちろんあります。ダサイ、稼げない、行きたくない、ということで、周辺のエリア価値まで落ちてしまう、というところと、そういう時に最近のライブラリーパークはじめ、カッコいい、稼げる、行きたい、エリア価値が上がる、というような本当に公平性とかそういうもの抜きに市民が行きたいと思える場所っていうものがすごく大事だと思います。

私が危惧するのは、稼げない、コンサルタント建設費を上げたい、設計事務所、自分も含めてですけども、のみで作られた庁舎というのは本当は、危険で持続不可能なものになってしまうので PPP エージェント、マーケット主導による、事業性を確保されたプロジェクトマネジメントできたものをベースにして計画を進めるべきだなということが一番思います。そういう上にやっと本当に行きたい場所が出来てくるのではないかと思っています。すみません長くなりました。

佐藤：カッコいい庁舎を作らなきゃいけないということですよ、そうすると。しかも、やはり低層部は稼げる、ということで、マーケットあるいはコンテンツを計画段階からしっかりやる人と一緒にやっていかなきゃいけないということですね。とても重要なことだと思います。

錦織：建築士会の錦織と申します。よろしく申し上げます。私は普段は夫と二人で小さな設計事務所を営んでおまして、大学の非常勤講師などもやっているのですが、今回ここに関わらせて頂いたきっかけとしては、公募枠で市民委員をさせて頂いております。先ほど第 2 回の委員会の状況も高橋さん、佐藤さんからご説明頂いたんですけども、やはり、委員会でもいくつか提案していただいている建物の配置ですね、高野さんからもありましたけれども、資料 6 にある、配置計画で、どの配置にしたらいいかという決め手が見つかっていない状況でして、さらに検討を進めるということで第 2 回は終わりました。やはりそこで考える上では、広場の存在というのは、かなり重要なものかなという風に認識し始めています。今回このラウンドテーブルに参加させて頂いたのですが、この試みというのは、非常に良い試みだと思ひまして、他の自治体でもなかなかないと思うんですね。市役所を建替えるにあたって非常にいい流れができています。新しく高い志で市庁舎が作られた後のことを考えますと、いろいろ貴重な意見を出してもらってそれを反映させていい庁舎ができたとし

て、それがずっと使われ続けて自分の子供が大きくなった時にも仙台市の中心的存在として使われるためにはどうあるべきかということを考えたりしています。建てる前から、こういう風に市役所について語り合う場が折角あるので建ててからも市庁舎をどう使うかということとを皆さんと話し合いながら、使い方を更新していけるような場があればいいなと思っています。それは、やはり低層部にあった方がいいなと思っています。先ほど色々お話しいただいた中にもあったんですけど、私もやはり市役所の機能というのは敷地内で完結しない方がいいなと思っています。いろいろな市役所の機能が、まちにどんどん出て行った方がいいんじゃないかなという風に思っています。広場と市役所の敷地内だけで完結しないような市役所の作り方というのを考えていければなと思います。その時には、敷地4面あるんですけども、東西南北、その中で建物の配置によって表裏ができるっていうことはない方がいいんじゃないかなと思います。むしろ建物が、前半の話でもありましたが、まちをつないでいくような存在であってほしいなと思います。本当に困っている人たちというのは、なかなか市役所とか、区役所の窓口に出ていくことができないと思うんですね。まちの方にサービスを分散化させていってほしいし、そういったサービスをつくり出す部分というのも作ってあげればと思います。サービスを市民と話し合っ作っていけるような、生まれていくような場所を低層部に作ればなと思います。であれば、議会は高層部にあるのではなくて、むしろ低層部にあった方がいいんじゃないかなと思っています。以上です。

佐藤：できた後も低層部の使い方をみんなで考えてUPデートしていくという、まさに市民協同で低層部を作っていくということを通じていくということなのかなと思います。

山田：都市デザインの山田と申します。もともと市の職員でいまして定年退職してもう5年が経ちました。かつて市の職員でいたころは、どちらかというと、都市計画、まちづくりをずっとやっておられて最後は復興関係で、定年ということになったんですけども、そういう意味で言うと、市の庁舎の中にいた人間ということで市庁舎はどういうこと、どうゆう状況になってるかみたいな、何かそういうことが少しお話しできればと思っています。もともと最初のテーマ、論点が前回の議論を少し踏まえて、みたいなところがあるんですけども、実は、そもそもシティホールといわれている、市役所というのが仙台の場合、本当に成り立っているかということもあわせて、結果的に政令指定都市になって市役所本庁舎とそれから区役所という業務に分かれたわけですね。で、二つ一緒になって一般市のように、まちのあるいは市としての中心的機能を担うような、市民の方が日常的に訪れるような庁舎、そういうのは、実際にはもうありえないだろうと思っています。ですから本庁舎の建替えといいいながらも、そこで議論で期待されているような、本当に庁舎は、開かれて市民とともにというような事が実現できるかということ、実は言葉は悪いですが、今の庁舎は訪れる必要のない庁舎だろうと、そういう機能しか実はないんですよね。訪れる人はどういう人かということ、業界であったり、いろんな団体であったり、というような方々が日常的に顔を出す、あるいは、役所の事務の事務用品の調達だとかですね、それから付帯的にはいつている銀行だとか、水道局の窓口一般の方が来る、というような話でそもそも庁舎としてどういう力を持っているか、まちに対して持っているか、ということはないんじゃないか、そこを少しあまり幻想を抱かない、というのが一番かなという、非常にアンチテーゼみたいな話で申し訳ないですけれども

学生の頃、もう40年も前の話なんですが、私の友人が、一番町の土地の所有権、土地利用といった方がいいかもしれません。どのように変遷したか、研究した人間がいまして、明治18年が、一番最初の庁舎なんですね、市役所の庁舎が実は建てられました。明治20年が仙台駅、鉄道駅ができた年なんです。結構一番町というのはもともと侍屋敷で今みたいな商業利用に変わったというのは、有名な話ですけども、市の新しい庁舎ができたときの土地利用も動いたかという、実は全く動きませんでした。明治20年の仙台駅、鉄道駅ができたときに、バタバタと実は侍屋敷から商店のまちに変わっていった。必ずしもそういった要因だけで土地利用が、変わったとは思っていませんけれども少なくとも、役所という機能が本当に周辺の土地を動かすくらいのパワーがあったかという、と実はない、と思っています。そういう意味で前回の議論の中でよく出てくるのが、広場と定禅寺通り、市民広場と市役所の庁舎の関係、市庁舎そのもので定禅寺通りと、というような議論ではなくて、やはり、定禅寺通りと市民広場がつながる、その連携に市庁舎も関係をする、と全体として新しい人の流れなり、というイメージが言われていると思うんですね。そうすると市役所の庁舎でなくてもいいんですけども、折角、この新しい庁舎が建て替わるという空間が新しいものが提供できるといったときに、ふたつぐらいのアイデアみたいな話があるのですけれども、低層階の機能として、一つは市民広場の延長になれ、ということですね。先ほど高橋さんとか村山さんも少しそういうような機能を言われたんですけども、前回のラウンドテーブルでもお話ししたんですが、今の市民広場が非常に本来の広場機能としては不十分なところもありますので、何が一番難しいかと言いますと実は、イベントをやる運営主体の話ではなくて、場としての広場としての運営主体をできるだけ明確にしたいというのが、実はありまして、そういうことを踏まえたときに青空の市民広場と連担する屋内型、屋根付きの広場、そこは庁舎の低層階、グランドレベルにあって誰でも気軽に公園的に使える空間がある。というのが一つは、折角の市民広場機能をできるだけパワーアップする、というようなことで言うと、市庁舎とは直接関係ない人たちも勝手にそこで憩いの場としての空間を活用できる、というのが一つかなと。もう一つは、折角開かれた市役所機能ということになるんで、色々今市庁舎の機能を考えたんですけども、政策をこれから形成していく、立案するという、そういう本庁機能というのが多分、これからはメインになってきますし、そのことの政策を形成するために市民とどうやってかわりを持つかという、これも非常に重要になってくると思うんですね。多分、建替準備室内でも調べてるかもしれませんが、市役所の中の機能でどういう人たちが来庁しているのですか、どこの階にどういふ人が来ているのですか、とか。もう一つは、市役所の、附属機関といわれる組織なんですね。法律条例等で決まっている第三者の検討機関ですね。それから協議会等といわれているんですが、庁舎の建て替え計画検討委員会のような外部の人間に意見を聞きます法律上設置は義務付けられてませんが、そういういろんな政策を立てるための審議会なり、検討委員会があります。ところでいくつぐらいあると思います？という話なんですが、実は、法律上とか条令で定められている、審議会等が30いくつあるんですね。そのほかに庁舎建て替え委員会のような何とか委員会とかも結構な数があります。そういう会議の実際に行う会議室、傍聴者用の席、それから今後を考えたときに、それを中継できるような、一般市民が見れるような事ができるのか、というようにも含めて、今後の仙台市の政策、様々な面があるのですが、そういったところで



どう議論されてそれを市民がどう、目にすることができるかと、そういう場を1階に作るというのも、ありかなと実は思っていました。

ということで、本当は村山さんが言ったようなああいう機能というのも実は、今の市庁舎と全然関係ない機能で仙台市役所として、今後こういう政策を世の中に聞きたい、あるいはそのセンター機能をどこかに、本当は庁舎でなくてもいいんですけど、どこかに作りたいといったようなことが本当にあれば、それをせつかくなので、庁舎を建替える時に入れるぐらいの、役所として本当に仙台市の中でどういう政策を重点的に市民に向けて展開していくかという、そういう思想があれば、それを中心に展開すれば事足りるのかな、という気もしていました。何か、これだぞ、というのはないのですが、少し方向だけ意見を言わせて頂きました。

佐藤：かなり実務的にご提案頂いたかなと、思うのですが、まさに純粹に市役所に期待しすぎない、経済効果というような意味での期待をあまりしすぎない方がいいのではないかという視点がまず一つ、市役所の機能として。ただそうはいつでも、場所としての価値というか、ポテンシャルは相当あるのではないかと、そういったときに定禅寺と市民広場と、それを介した庁舎の中の広場といいますか、その関係をつないでいくのが一つあるんじゃないか、という話と今の2階の委員会室のようなものをもっとたくさんバリエーションがあって、そこで色々な審議会、市の政策に関わるような計画を市民と一緒に議論していく場所があったらいいのかな、というご提案だったかなと思います。

杉山：東北大学の杉山と申します。基本的には大学のキャンパス計画に携わっています。仙台市との関りは色々ありますが、主なものは、杜の都の環境をつくる審議会の副会長を10年くらいさせて頂いた間に、緑の基本計画を作る部会長を仰せつかったことでしょうか。その時の経験としては、(言葉は悪いですが)、本当に魅力的な計画がなかなか作れませんでした。というのも議会対策がメインとなるためか、10年後を目指す将来計画でありながら、10年後に達成できる可能性の高いもの、つまり、現時点で十分に熟度のある計画しか盛り込まれないのです。そうでないと、10年後にできなかったことの原因を問われるということで、庁内の調整の終わったものだけをまとめ直したものが仙台市の将来計画として世に出て行き、10年後に「達成しましたね」という評価を得て、また次の10年の計画が作られていく、というのが実態で、あまり魅力的な将来計画ではないのです。そして、それで済んでいる大きな原因というのが、市の将来計画などがほとんど市民の目にふれることなく、市民の関心事になっていないというところにあるのではないのでしょうか。一方で仙台市は、これまでも脱スパイクタイヤ運動や、広瀬川や梅田川の浄化活動を様々に展開してきた輝かしい歴史があります。杜の都の環境を作る条例も、多くの市民と行政が大変な努力をして先進的な条例を作り、日本の最先端を走ってきたわけですが、そうした市民協働の歴史を後世に伝える場も無く、仙台市役所に行っても、どこにもそうした市政や市民協働の歴史を学べる場所はありません。そこでお渡ししたペーパーをご覧ください。まずは、「市民中心の市役所」という言葉が、今回の建替事業のメインテーマとして掲げてあります。それは何かというと、「市民中心の市政が行われる場」ではないかと思います。「市民の無関心、あきらめが民主主義を崩壊させる」と言われますが、先程お話しした市役所の現状というのは、まさにそれに近い状態ではないかと、つまり、市役所というのは市民が行くところではなく、ブラックボックスでいい

んだと考えられ、玄関廻りに市民ロビーと情報提供スペースがあればそれで良い、という発想で作られています。多分、(区役所ではなく)本庁舎で行われる重要な業務にはあまり市民は近付かないほうがよい、かかわらないほうがよい、と思っているのではないのでしょうか。その発想が端的に表れているのが、検討委員会での配布資料4で、「市民協働スペース」が「行政機能として求められる機能」ではなく、「まちの賑わいに資する庁舎の視点から…」の中の「文化交流拠点機能」に入っているところです。市民協働がいかに行政機能として重要であるのかを理解し、位置づけ、見せる、それにより、市民協働で日本の最先端を走ろうとする姿を見せることもできます。つまり、新しい仙台市役所には、この、「市民と市政をつなぐ場」が最も前面にあることが重要だろうと思います。それは、低層にするか西向きにするかといった配置や建物構成に関わらず、最も重要な「核」になると考えます。ペーパーに戻って、中央に3つの四角があります。一つ目は、「市政と市民活動の歴史から現在」です。脱スパイクタイヤ運動とか、広瀬川の清流を守る運動、梅田川の浄化、杜の都の環境を作る条例、最近では歴史的建造物保存活動ですとか、NPO、市民協働の成果がございます。そして二つ目の「都市ビジョン・将来計画の提示」は、総合計画、都市計画、緑の基本計画、震災後の海岸周辺の復興計画ですとか、公共交通へのシフトをどう考えているかとか、省エネ、ごみ減量、環境首都、あるいは、市役所の改築とか音楽堂をどう考えているか、といった市の計画やビジョンをきちんと示していくことです。そして最も重要なのが三つ目の「対話の場・協同/共創の場」です。(NPOによるサポートも検討頂きたいですが)、例えば月ごとにテーマを変えて、そのテーマに沿った展示やディスカッションを行い、課題を共有していく場を作る。そして月に1回くらいは市長が出てきて市民と直接対話するのも良いと思います(横浜でもかつてそのような場があったようです)。さらには、地域課題や社会課題に対する解決を探り出して議会とか議員に届ける場にもなるような。こうしたものを総括し、「せんだいシティフォーラム」といった場が仙台市役所のメインの核になるのではと。こういった「市民中心の市役所」の象徴とも言える場が市役所のフロントにバーンとあるということが必要なのではないかと、場合によっては「せんだいシティフォーラム」の一角にガラス貼りの議会があり、常時は会議室で使われても良いように思います。今の固定したひな壇形式ではなく、フラットな床にするとか工夫してもらい、多用途に使えるとともに、市民が傍聴にも入りたくなるようなオープンな構成が望ましいですね。シンガポールに「シティギャラリー」という有名な施設があります。ここはシンガポールの都市開発の歴史をビジュアルに学べる場所で2,400㎡ほどで無料です。年間来場者が約20万人、私も行きましたが、大変面白く、1970年代には汚れた川を浄化しつつ再開発が行われたことや、1980年代に保存や保全をはかりながら生活環境を整えてきた、といった展示物だけでなく、都市計画を実際に体験できるゲームなどがあり、ある意味でシンガポールの一つの観光資源になっています。こうした魅力的な観光資源に育つ可能性を持つ「せんだいシティフォーラム」が、仙台市の中心部、(駅前でJRがかなり強力な開発を進めている中で)一番町の北端に加わることができれば、ちょっと情報を見に行こう、あるいは議会を傍聴してみよう、などという気になり、一番町の人出も増えるかもしれません。ただし、本気で取り組むのであれば、運営は市ではなく、NPOなどに委託しながら「市民と市政をつなぐ場」を魅力的に運営して欲しいと思っています。私からは以上です。

佐藤：今までお話頂いた何人かの方のアイデアを知っていたかのようにまとめて頂いているというところで大変ありがとうございます。

伊藤：東京からやってまいりました、久米設計の伊藤です。よろしくお願いします。

この度、基本計画の策定支援業務という形で選任されまして、そしてここのテーブルにも呼ばれるという状況となっております。本日の第1回目も参加させて頂いてまして、2回目の参加という形になります。

低層部という切り口で何を言おうかと思ったのですが、経験上で申し上げると、他都市も含めて同じような議論が行われています。その一つ目のポイントは、先ほどの山田さんの方からおっしゃっていただいたんですけども、今回は本庁舎機能ということで、普通の区役所と市役所の概念をどうもごっちゃにされて、そのスケール感を抜きにして、形の話ばかりになってしまってるのを、一旦ちょっと整理した方がいいかなと思っていました。山田さん曰く、「市民がほぼ来る必要のない庁舎」なるものの低層部の議論が、なぜ起きてるか、というところを掘り下げるべきで、県庁とかのように、「あういう建ち方されるのはかなわないぞ」、というのが、本当の皆さんの声なのではないのかなと思っています。そう意味で具体的な建ち方などのハードな話はさておき、あくまでも建つのは市役所で、低層部は行政が行うなんかしらの施設だと考えるべきだと思います。まず低層部の3点セットというのがあるんです。一つ目は行政サービス機能です。今回の場合はいわゆる行政サービス機能は区役所に移管しているので、今回は関係ありません。

もう一つは、市民協働交流機能です。そして、最近必ずあるのはシティプロモーション機能です。これらの機能が低層部を構成するというのが一般的かと思います。今回の場合には、行政サービス機能がないですから、あくまでも先ほどのPPPとかを含めた商業的な目線もありえるかと思いますが、どうしても「稼がなきゃいけない」というものがないとすれば、基本的には行政に軸足を置いた市民協働交流機能もしくは、シティプロモーションという何かしらの機能をつくっていくことになるんだと思います。先ほど山田さんがおっしゃった市役所内部の委員会活動のための会議室の話とリンクするんですけど、他市の事例でも同じようなことがあって、市役所のいわゆる窓口機能を全部、2階以上に持って行ってしまって、すべて1階部分は市民活動交流機能だけにしてしまうという案を提案したんです。結果的には猛反発を食らって一部でも窓口を下ろさざるを得ないという状況になって設計変更をしたという事例があります。そうなってしまったその事例は別として、その時に話していたのは、市の各課がいろんな委員会や市民団体が、外の場所を借りて、協働活動の報告や市のキャンペーンであったりその他の説明会、講習会などを結構やられているんですね。それを年間でかき集めるとものすごい数になる。それで、それを外の場所では無く市役所の1階でただやるだけで実は、ほとんど埋まってしまうという状況になると思うんです。市役所の活動を市役所の外でやるってことの意味合いもあるのかもしれないですけども、こういうイベントも含めて、すべて市役所の低層部で行っていくと考えるだけでも、結構なボリュームになる。それをガラス張りでやるだけで、ある種、皆さんが求められているような、市民活動や協働みたいなものの、見える化が出来る。まさに市民と行政が交流している場がそこに現れてくるという意味では、なかなか、新しい市役所の低層部の在り方という風に見えないかなというのが、いろんな市でもよくやろうとする一つの流れかと思うんですね。今回の場合そ

こまでの議論が至ってないですけども、ポイントとしては、杉山先生がおっしゃってる、「市民と市政をつなぐ場」ということになっていって、あくまでも行政ということにある程度、軸足に置いたような低層部がきつと展開される。かつ、それが県庁のような、ああいった閉ざされたものではなくて、常に賑わいというか、活気が見えてくるような作り方といったものが、皆さんがおそらく求めているところではないかなと感じております。

佐藤：ちなみに大反対を食らったという理由というか、なぜ1階に市民協働スペースを集めてしまうのはだめだっという意見が出たんでしょうか？

伊藤：「なんで窓口の手続きに、わざわざ2階に上がらなきゃいけないんだ？」っていう人たちです。市役所に一番必要なのは窓口サービスだということで、市民活動は別の場所でやればいいということでした。

佐藤：一回りしたところで、この議論についてももう少し、他の方のご意見を聞いて付け足したいなということですか、思いついたことがありましたら、どなたでも結構です。

高野：今の伊藤さんの話にも絡むんですけど、逆に言うと行政機能が区役所にいくというのであれば、割り切れると思うんですよね。今おっしゃった大反発食らったというのは行政機能の部分の話だと思うので、そうであれば青葉区役所というのが向かいにもある状況なので、行政機能は全部、そっちにあげて、もうここは、シティプロモーションなり、そういう、先ほど洞口さんの方からから PPP エージェントの話も出ましたけど、なかなか市役所で商業的なものをやるっていう概念が今の全国的にまだないなかでどうしていくかっていう問題もあると思うんです。稼げなきゃいけないっていうような、稼いでお金を生み出さなきゃっていうところもある一方で、市民に開かれている、よく公共施設ではあるんですけど、結局、利用料をどこまでとれるのかっていうような、市民のためのものでしょ、利用料下げなさいよってあるけど、下げると結局、お金稼げないよね、というところもあると思うので、その辺は専門家、要は、稼ぎ手というか、使い手という、そういう人たちの意見ももっと検討委員会、何なりに入ってもらえるといいと思うんですけど。それくらい割り切ってくれてもいいのかなと思っています。議会の話も低層にあるべきだと思ってるし、むしろ、僕の勝手なイメージですけど、議会とかだと寝てしまう方とか、あまり議論をなかなか見えないから、ということと正直いると思うんです。なのでそれを逆手に取って見えるところで、昔県知事さんとか、市長さんがオープンな部屋を作ってる方とかもいらっしゃいましたけど、その議会バージョンがあってもいいと思っていて、一方で市役所の職員の人はやはりブラックボックスって、さっき出ましたけど、実際自分たちが働く環境を考えて頂いたときに、開かれてるところで集中できるか、っていう話があるじゃないですか。やはり、やるべきことはやってもらいたいから、お金を払っている以上、仕事には集中して頂きたいのでそこは、市民の方の理解も得られるんじゃないかなと思うんですよね。集中するものと集中しないもの、あと防災機能的な話もすれば、何か災害が起こった時に全部執務室が開かれていたら、何も機能しないわけですよ。なのでその辺は、市民の理解は得やすい項目ではあると思うのでそのメリハリみたいなのところをもう少し比較表でもそういったところを出していただけると機能が明確になるのかなと思いました。

村山：市役所の本庁舎と区役所の話とか色々出ましたので、少しだけ補足をさせていただきます。先ほど申し上げた通り、市民協働の旗振りをしていましたが、地域にかかわる様々な協働、地域

づくりも含めて、単なる行政機能だけじゃなくて、そうした地域づくりに関わる地域の区民の皆様との協働というのは、基本的に区役所に頑張ってもらおうと旗振りをしていました。区役所のまちづくり機能とか、地域づくり機能は、基本的に強化すべき方向に今あると思います。そういう前提で本庁舎は何かといわれると、本庁舎も含めてですけど、特定の地域、区に関わらず、政策横断的な、あるいは政策分野的なものに実はシフトしています。市民協働の分野で言いますと、男女協同参画、これは地域関係ないですよ。NPO 活動、消費者活動、そういうものは地域協働とは別に、全庁的に応援すべきものとして中心部に施設があったり、全庁的な応援をしていくという話です。そういう意味で、市役所の新庁舎の行政部分、市民協働とかかわる部分というのは、実は前提としては多分あるのですが、資料にはそこまで書き込んでないので、一般の市役所の庁舎と同じように市民が一般的に来て賑わうとか、そうしたいろんなものがごっちゃになっちゃうんじゃないかなと思います。ほとんどの地域住民は、区役所に行くので日常的に今は、市役所に行っていないはずなんです。じゃ、新庁舎できた時に誰が行くんだという話になるんですね。今行ってる人だけでいいのかというと、そうじゃなくて先ほど杉山先生がおっしゃったような、政策とつなぐ部分があってもいいですし、政策分野的な協働部分で市役所庁舎でやってもらった方がいいでしょう。ただ、スペースがあればいいというものではないので、役所的に一番苦手なのは、部局ごとの市民協働の分野、市政情報だったり、男女協同だったり、これを一つの塊として情報発信できるようなものがほんとは、そこにくっついてくると一番いいのですが、そこが一番難しいところなんです。多分、庁舎建替準備室だけでやるのは難しいと思っており、そこをどういう塊でコンテンツ機能としてそこに持ってこれるのか、そこが一番重要なとこだと思っています。

杉山：今のお話大変唆に富んでいまして、病院が昔、外科病棟、内科病棟だったものが統合されたことで、総合化によるメリットもあるけど複雑になるという問題も生まれます。市役所でも、河川課の階に広瀬川関係の NPO などの協働スペースがあり、都市計画課の階には街づくり系の NPO などの協働スペースがある、といった形で別べつに設けるといった形もあると思います。ただ、なかなかそうもいかないということで、やはり 1 階の行きやすい場所に集約し、多種多様な NPO や市民活動の交流/活動/協働スペースがある、という形になるのだろうと思います。とは言え、河川に関わっている方々は、直接その階に行って打合せをすることも多いと思いますので、そうした受け皿として小さなミーティングスペースなどは、行政エリアの中に、ブラックボックスとせず、ちゃんと市民協働のスペースは用意しておく必要があるのだと思います。

佐藤：そういう意味では、市政へのアクセスのしやすさ、わかりやすさみたいなものがもう少し、前面に出て、場所としてどこかというのは、色々あるので目的に従ったところに行くというところでいいのかなと思いますけど。

杉山：その、どこに行けばいいかわかりやすい作り、という意味では、1 階部分にインデックスゾーンがまずあり、そこで得られる情報よりさらに深い情報や相談が必要な場合は各階に行ってもらおう、といった構成が必要なのだろうと思います

伊藤：今回は、行政サービスの話は置いておくと、市役所って、やはり、どうしてもサービス向上が一般的に言われますね。しかし、今後、その行政サービスというのは、ほとんどネットとかで、ほとんど意味がなくなってくるわけです。銀行なんかもおそらく 5 年以内になくなる

だろうといわれていて、大手銀行の改修なんかでは、いわゆる一般的な昔の手続きのカウンターなどは、ほとんど改修し始めています。大きい個人ブースみたいなのが6ブースくらいしかないような、もう今までのサービスカウンターがない銀行になっている。なので、サービスという概念がそもそも様変わりしたときに、市役所って何なんだといったときに、やはり今言っていた、協働や相談などといった業務が多分、メインになってくるんだと思います。だからこれからは、市役所の一丁目一番地は、行政サービスではなく、市民協働なんだと、サービスから協働へという風イメージを変えなきゃいけないんだと、主張したんですが、前の事例では、そこまでいかなかった。今回の場合には、まさに本庁の仕事自体が、市民との協働であったり立案であったり、協議を実はしているわけですから、それが今までなかなか見えてこなかった。杉山先生がおっしゃってた、ブラックボックス化したものをいかに見える化するかという、ショールーム化することによってそれらの活動状況自体が、ある種シティプロモーションに繋がっていくんだと思うんです。そういう風に市役所のつくり自体が、ガラッと変わっていけばいいのではないかと考えています。ただ、市役所自体が、各課の理論を優先し、「うちの占有スペース」という概念を持ち続けられると、それはなかなか難しい。市役所は、あくまでもワークスペースと協働スペースで構成して、市民と交流する時は、1階、2階でやるんだということが、運用も含め、何かしらプログラムが組めれば、ちょっと他にはない、ショールーム化した、行政の仕事が見える、市民協働が見える、これらかの市役所の形が見えるかなと、今ちょっと思ったりもしています。

山田：ちょっと的外れの話をするかもしれないんですけど、実は先ほどお話した、各種審議会をできるだけ一か所で市民の方がそれに接触できるというか、参加できるというような話を話したんですけども、実は重要なことは、中継みたいな形がどんどんオープンになっていくかどうか、というところにかかっている、例えばここにいらっしゃる方で議会の傍聴に行った事がありますか？みたいなことを聞くと、実はほとんどないだろうと思うんですよ。ところが、こういう議論をすると、開かれた議会になってもらわなきゃ困るとか、こういうわけなんですけれども、仕組みから言っても、かつては議会の中継というのは、役所の庁舎の中でも局長室にある専用のTVで中継を見れるというのが、最初のスタートでいまは、パソコンでHPでネット配信されてますので、ライブ中継が、職員によっては自分の机の上のパソコンで見れるということになるわけです。そうすると担当者も含めて、うちの課長かっこいいこと言ってたけれども、議会の答弁は、あんなものかということも実は起こりうるわけです。同じようにいろんな審議会の議論が、限られた人しか傍聴できないような仕組みでいるのが、日常的に議論が中継をされて市役所に行けば中継が見れる、本当は各家庭で見ればいいんですけども、そこまではないんです。

見られるということが実は、議論を深めるというか、その委員の方もこんな発言をしたぞというようなことが知り合いの一般市民の方から言われましたとかいうようにお互い刺激を持つことで、いろんな政策の議論がより深まるかなと。そう思います。そういう意味でフロアのどこにとか、ガラス張りとは別に情報をどうやって、日常的な場面でオープンに出来ていくかという、こういう仕組みの方も結構大事なかなと思います。それからもう一つ、全然議論になって来ないんですけども、市役所のまちへの影響という意味でいいますと、実は、職員の数というのが非常に大きな意味を持ちます。かつて今の市役所を他の場所に移転する

かもしれないと、いったときに一番町から早速反対の声が上がりました。ま、それは、あれだけの人数が昼食を食べてもらった人がいなくなるとかですね、夜の飲み会がパタッとなくなって違う場所に行ってしまう、これは非常に大きな話で、消費者としての非常に大きな塊を市役所は抱えているわけで、外に職員が出歩くようにならなくて、庁舎の中で自己完結型になってしまうと、これもまたひどい話で、確かに福利厚生で食堂をちゃんと作っていきましょうというのもあるんでしょうけれども、別の見方で地域とのつながりというのは、実は職員の相当な人数による、大きな消費ボリュームといいましょうか、それはまちとの影響があるのかなと、思います。庁舎の中にサービス機能で入れるものも、そういう観点で考えた方がいいのかなと、地域の人も商売になるような、ということかなと思います。

杉山：議会の話が出ましたので…。今の議会が面白くない大きな原因は、委員会で議論を行い、その結果報告を議会でして採決して終わり、というのがほとんどだからです。議会の開催方法は各自治体で決められますので、議会を議論する場にするとか、イギリスの市議会などのように、傍聴に来ている市民に意見を求めるとか、それによって市民が参加しよう、傍聴しようという気を起こさせる、様々な改革を行う必要があると思います。

今回の新しい市役所の議会をどうするのか、という議論についても、議会の特別委員会の中でのみ行われていて、(このラウンドテーブルがつながっている) 検討委員会では、議会のあり方の検討ができないんですね。新しい議会の姿について議会の特別委員会が何を考えているか、広く公開して市民の意見もフィードバックさせながら進めていってほしいと思います。

伊藤：ここに議会をよんだらいんじゃないですか？ 皆さんが選んだ議員ですから。

佐藤：事務局としては、お声掛けはしたんですよ。

錦織：議会の話が出ていたのでそこからなんですけど、やはり私も低層部にあった方がいいと思ってるんですが、その議会のそもそもの起源は、広場に集まってみんなで話し合っ決めてるところからきている訳で、今回の計画では広場も結構重要な市役所に近いところにあるのでそういう意味では低層部にあるのがいいのかなと思っています。私も今回初めて検討委員会の委員になって庁舎を訪れたという経緯がありまして、やはり来たことがない人がすごく多いと思います。それはどういう風に本庁舎を使えばいいか、わからないということが一つあると思います。来たことのない人に対しても、どういう風に使いこなしていけばいいのかのマニュアルづくりを、さっきのギャラリーというので空間として展示として見せるというのがありますし、WEB のコンテンツとして、また動画として書籍として広める必要があるのかなと感じています。皆さんの話を聞いて、窓口がなくなっていくんだという話も出ていたんですが、新しい仕組みとか市庁舎の在り方を決めるいいタイミングだと感じていて、それを現実化するためにはどういうチームなり、検討委員会もあるんですけど、組織を作ったらいいいのかをうかがってみたいなと思いました。

佐藤：それは、市の方に聞いてみるということですか。

錦織：あとは、OBの方もいらっしゃるのでもし何か、アイデアがあれば聞いてみたいなど。

佐藤：こういったものを具現化するには、どういったやり方でやったらいいのか、と何かアドバイスがあれば。

村山：先ほども言いましたけど、それぞれ縦の部局の役割にぶら下がる仕事は一生懸命やるんです

が、それを一つにまとめようとしたときにこれが一番難しいんですよね。従来にないものを新しく作るという、議会との関係とか、各部局がミーティングするときのありようとか、こういう従来にないものを一つにまとめていくのは非常に難しいので、これはだから、庁舎建て替え準備室ではないような気がします。総合計画は確かに上位の計画ですけど、概念だったり、コンセプトだったりするので今のような議論というのは、やはりプロジェクトとして取り組むものだと思いますけれどもね。庁舎建て替えということではありますけれども仕組みとか、機能とか、こういったことも含めてより強い提案があれば、役所としてはプロジェクトとして引き受けて、それなりの取り組みをしっかりとすることになるんだと思います。

佐藤：ソフトとしての提案をしていかないと、ということですよ。

高野：総合計画といったのは、総合計画のものではなくて、総合計画を作るやつで、たしか今、区役所単位でいろんな市民が集まって総合計画審に物申すではないですが、意見を吸い上げるような場を展開しているはずでしたよね。そういうものの市役所バージョンがあってもいいのかなと思ったんですよ。総合計画みたいに、この間検討委員会を傍聴したんですけど、大体役所の絡みの人と設計関係の人くらいなんですよ。それが10名、20名いるかないかくらいのかたちなんです。

今日は結構皆さんたくさんいらっしゃってるんで、こういう場があるか、わかるかわかんないか。というか、そういうところが、先ほど区役所単位で共同の場を設けているのであれば、区役所に全面協力してもらって、区役所単位での意見吸い上げを求めるのも一つの手かなと。結構母数も多ければ議会も動くのかなとかね。区単位での管轄の議員さんもいらっしゃるといいますのでさっき、洞口さんが設計事務所とかまちづくりコンサルがお金自由にやってるという話をされていたと思うんですが、僕からしてみると議会がらみがこういうものって重要で議会をどう説得するか、議会がウンと言わなければ何も進まないんですよ。それで断念しないといけない大人の事情とかあるはずなんで、どもそれが開かれて、市民が直接意見を言えれば、多少は変わるんじゃないかなと思うんでそのあたりじゃないですかね。

佐藤：議会をどううまく味方にしていくか、というところが、キーになりそうだなというところを伺いました。

次の資料の説明を、かなりすごく大事なコンセプトの話はずっとしていただいたんですが、配置の話にちょっと入らせて頂いて、またその中で機能的な話もしていただければと思うのですが、では、説明を。

仙台市高橋：資料6をご覧ください。(配置の説明)

佐藤：またちょっと一覧に戻っていただきたいんですけども、検討委員会の方では、この案がどうこうといった話は一切出なかったですね。全くでなかったんです。委員の方からは、何が議論されていたかという、一番左の評価する評価軸と○×△で本当にいいのっていう、おっしゃるとおりのご指摘とかもあったんですが、評価する視点が、これだけではないんじゃないかというご意見があったというところで、配置の検討については次回かな、というよ



うな結論でした。

なんとなく、もう少し突っ込んだ議論をしてもいいんじゃないかと思ったんですけども、評価軸に関わらず、今までお話しいただいた、コンセプトをしっかりと守っていく、特にサービスから協同へという話のなかでそれにふさわしい配置ですとか、どういう配置であってもそういったことはもちろん可能になってくるとは思いますし、それから市民との接点としての屋内広場、外の広場と屋内広場、あともう一つ、もちろん市役所の機能の延長としての機能としては一義的にあるんですけども、一方で勾当台の場所性、この場所を最大限生かせるような配置というのはないのか、あるいは広場の取り方というのはないのかというあたり、洞口さんに最初にいつていただいたような、まちの賑わいと市役所直接の機能じゃないけれども、つないでいくために必要な取り方というのも、一方の視点としては、あるのではないかと思っているのですが、他のことでも結構ですが、いかがでしょうか。補足を、

高橋：今日この場で、日常利用についてもご意見伺いたいなと思ってまして、この市民広場はほぼ、毎週利用されるような、イベントとはいえもはや日常化したイベントが行われるような場もあります。一方で定禅寺通りの方で洞口さんにおっしゃっていただいたような、たまに起こる公共の場所を使ったようなイベント。そういったものが一連として繋がっていくような場になっていってほしいと、今までの議論を踏まえて、皆さんが思っているじゃないかなというのは、仙台市側としても感じております。その日常利用というものが、いったい何なのか、先ほど前半でお話して頂いた、行政と市民の協同の場、がそういったものになりうるのか、はたまた、洞口さんにおっしゃって頂いたように、市政にまるで興味が無い方たちも訪れるようなきっかけ、になる場としても設けていくべきなのか、だとか、そういうところもお聞きしたいなという風に考えておりました。

佐藤：いかがでしょうか、あるいはこの配置と議会の関係でもよろしいかと思いますが。

杉山：配置を考えるうえで私が違和感を感じるのは、一番町からの軸線を建物で受けるという発想です。現在も一番町からデジタル時計が見えているので、何かしらのアイストップを設けるのは良いと思いますが、一番町からまっすぐひたすら一直線にやってくる人の導線を建物で大きく受けようとし過ぎると、配置計画を見誤るような気がします。多くの方は、地下鉄の出口のある、東二番町通り沿いの豊かな緑地を通してアクセスすると思いますし、勾当台公園からも、北からも来ます。では、何を大事にして配置を考えたら良いのかと言えば、(航空写真は無いですかね？ないですか)、より大きなスケール、つまり、勾当台公園および県庁前の緑地、そして市民広場、これらまとまった広場、緑地に対してどう受けるかというランドスケープの発想が求められると考えます。今回の配置案の中で言えば西配置案が、大きな緑地、広場の拡がりを、合同庁舎と県庁とともに、西向きの市役所によって囲む形となり、緑地、広場が活きる都市景観になります。これぐらい大きなスケールで杜の都らしいフロントを持つ市役所が誕生すると魅力的ですね。一番町からの軸線に対しては、もっと小さな20~30mくらいのスケールのガラスアトリウムで受けるとかで、あまり大きな建物を一番町のような細い道に対して正対させるのは違うんじゃないかと思います。また、低層部の作り方については、あの場所に作るからには市民広場の活性化に資するにぎわい機能も当然必要ですが、市役所の1階だから必要となる、「せんだいシティフォーラム」をどこに置くかといった議論も大切だと思っています。以上です。

高野：そもそも今、配置計画なのかな、というのも正直あるんですけど、まだこれ、たしか秋ぐら  
いまでに作る計画書だと理解してるんですけど、先ほどから色んなソフトとかの話とか、低  
層部の話とか、そういうところが解決しない状況でこれをやっちゃっていいのかな、って  
いうのが正直思っていて、いったんそれは建替え室の人にも考えて欲しいんですけど、い  
ったんストップしてもいいのかなって思ってるんですよね。中身の方がまとまってからや  
ってもよろしいのかな、というのが、ひとつ大前提としてあるんですけど、あとは先  
ほど杉山先生もおっしゃったように、僕も

最初にも言いましたけど、範囲がちょっと狭すぎる。これは大きいと思います。先ほどグ  
リーンループのマップがあったと思うんですけど、あれくらいの規模でもいいのかなって  
正直、思います。西公園なり、錦町なり、あの辺の一角が（模型を見て）それですね。そ  
のぐらいを見て考えられてもよろしいのかなと。やっぱり市民広場をどうするかって  
いうところもあるし、あとは先ほどの話もあるんですけど、申し訳ないんですけど  
これを作った人が仙台市をあまり知らないのかな、って感じてしまう。その、先  
ほど言ったように、じゃ、どうやってアクセスするのかってなった時に、や  
っぱり歩いて行くでしょ、一番町の方から歩いて行く、っていうよりは、や  
はり地下鉄なり、バスなり。バス停との絡みももうちょっと、大きくフ  
ィーチャーしてもいいのかなと。仙台駅から市役所前を通るバスって相当の  
数があるはずなんです。それに対して今、バス停の待合のスペースみたいな  
ところが、正直ひどい。バス停の位置もちょっと南北に広くありますし、  
待合みたいなところ、屋内で待てるスペースもないような状況で、市役所  
も閉じてるので、先ほどの低層部の話にも入るんですけど、もうちょ  
っとバス停との絡みも考えて頂ければいいかなと。長距離バスのいくつ  
か発着にもなってるはずなので、そういうところも含めると、ちょっとあ  
の、僕も待ったことがありますけど、日陰もあまりないし、寒いし、な  
ので市役所にちょっと避難しようかなと思って、市役所の廊下みたいな  
ところにしかないの、待つスペースもないしというところ、あるかなと。  
あとは先ほどの日常利用のところを考えると、定禅寺通りとの絡み、  
市民広場との絡みが必要で、かつ屋外広場を作る場合にはちょっと  
検討して頂きたいのは、芝生広場を検討してもらえないかなと、個人  
的には思ってます。というのは、勾当台公園にしろ、市民広場にし  
ろ、いま、座ってみんなが時間を過ごすような場所ってない、って  
思うんですよ。ベンチがちょこちょこってあるんですけど、そこだけ  
で、それも日陰じゃないから難しいし、足を延ばして子供がいて、  
みたいなところがない気がするんですよね。まさにオガール広場の  
ようなものがもうちょっとあっても、市民広場利用率すごい高い  
と思うんですけど、日常利用っていう感じではなくて、土日だと思  
うんですよね。あの最近まで、もう壊されちゃったライブラリー  
パークもあの一角だけで、日常的には多分とどまるところが無くて  
中に入らなきゃいけない状況だったので、そういうところも考  
えて頂きたいなと。配置計画それからかなって思ってます。

村山：配置の話ですけど、先ほども先生がおっしゃったように、ここに正面性という記載  
がありますが、あえてなぜこの概要のところに正面性っていうキーワードで、それぞ  
れの配置を特徴づけるのかなと。勾当台通りに対して正面性がある、ない、という  
のが、どういう意味を持つのが、多分よくわからないんですよ。どの案が  
いいとは申しあげませんが、もう少し広い目で見れば、確かに緑の塊  
っていう点で西側配置という考え方もあるでしょう

し、それからもう一つ、広場の空間、広場の使われ方としてみたときに、ある程度建物で囲まれた、囲われ感というのがあるんですよ。バーンと広がった広場で活動するのと、一定の面積で建物で囲まれた広場空間、という意味もあるんです。どちらも要素としてあるので、その時の正面性というのでしたら何となくわかる気がするんですけども、そういう話がちょっとないので。だから、ここに正面でファサードがあるというよりは、新しくできる屋外広場、あとそれにつながる屋内広場に対して何か一定の囲われ感、空間として作っていくという意味での建物配置っていうんだったら、なんか考えようもあるかと思うんですけど、そういう記述にはなっていないので、少し、深堀が必要かなと思います。

洞口：私も、ちょっと今の時点で配置はどれってはっきりいえないんですけども、まあ、定禅寺通りでイベントがあった時に庁舎とのその1階までの盛り上がりの距離感、作れる距離感みたいなものもあると思うので、そこであまり遠すぎない方がいいのかとか、そういうのも出てくるかなとは思っています。それは、どういうコンテンツが入るかによってだいぶ変わってくる話だとは思っています。あとは、さっきいった日常的に利用されるっていうこととかイベントとかいうものが、ほんとに海外のマーケットみたいな感じに日常的に産直のものが売ってるとか、そういう状態っていうものを作れるような広場っていうものを目指るといいのかなと思ってるんですけど、その場合とかには、例えば、コンセントとか、定禅寺通りにもコンセントとか設置してあると思うんですけど、そういうインフラというか、イベントがすぐに開催できるような、そういうものもあった方がいいかなという風には思います。あとは、例えばキッチンカーとかが、日常的に入ってこれるような仕組みとか、私もちょっと提案で、まちなかにコインパーキングがかなり増えちゃってるというところで、まちの魅力が下がってきてしまってるので、今そういうコインパーキングをキッチンカーとかに貸して、道沿いを賑わせるような提案とかも作ってたんですけど、ま、そういうような事を市役所の広場で先駆的に出来たら面白いかな、という風に思っています。例えば、東京国際フォーラムとかだとその中央のところに結構、日常的にキッチンカー乗り入れて、皆さんランチを買いに来たりとか、っていう光景があったりすると思うんですけども、やはり仙台の今、まだ起業を始めたようなちっちゃい若者みたいな人たちって、やはり店舗を待つまでいけない人とか、っていうのが結構これからキッチンカーとかって、一番初期投資が抑えられて、自分の活動ができるというところに入りやすいところがあったりするんで、そういうところでキッチンカーとかの活躍する場を作っていくって、仙台オリジナルの起業みたいなものが生まれる拠点になればいいのかなという風に考えています。あとは、さっきの話に戻っちゃうかもしれませんが、1階部分は確かに市役所としての役割というところプラス、市民利用ということ、そんなに、あまり区画せずというか、ガラス張りですら区画しなくてもいいのであれば、私はその方が、使いやすいと思うんですけど、もう少し、オープンカフェのような雰囲気、例えば、ちょっとコワーキングスペースみたいな感じで、市民の人がフラッと来て、コンセント差してパソコン作業ができたりとか、その流れで同じテーブル上に、どこかの課の人と市民の人が打合せしてるみたいな感じの雰囲気になってる、というのもすごく面白いかなという風に思っていました。例えば南池袋公園とかの使われてるイメージってすごくいいと思うんですけど、あれも聞いた話だと、スタバも公募で出していた、っていうところでスタバの方が高い賃料を払ってくれたんですけども、結局そこは地元のカフェを入れた、って

いうところも将来的なところの地元に落ちるお金っていうものを意識してそのコンテンツを選んでるっていうところは、見習った方がいいのかなっていう風に思っていました。ちょっと話がそれちゃいましたが。

佐藤：そういう意味で言うと、平置き駐車場というところも何か、作りようによっては、あるいはコンテンツによっては、かなりにぎわうマーケットの場になる可能性もあるというような事ですかね。

洞口：駐車場＝裏、みたいな感じの考えにならなくてもいいかなと。やはりどの方面から見ても何かいいような佇まいになってるっていうことも大事だと思うので、その中で今みたいな駐車場自体がちょっと違う役割にも転用できるようなしつらえ方というか、そういうものも可能かっていう風にと考えてました。

錦織：私も検討委員会で委員として参加していて、建替推進室の方にもちょっとお聞きしたりもしたんですけど、やはり今の段階で配置を決めるって結構、難しいと思います。スケジュールとかプロセスをもう一度見直す必要があるのではないのかなとも思うんですが、まあでも、お話を聞くといったんはちょっと **FIX** しないと次に進めない、中の部分まで決められないというところもあるという風にも伺ったので、その辺のどういう風に進めていくのかということをもう一度ご提示いただくと一番いいのかなという風には思っています。それから先ほど杉山先生が、一番町のアーケードからクランクしてアクセスするという事をおっしゃってたんですけど、私はその形状自体も不自然な気がしていて、今ある市民広場自体もデザインし直した方がいいんじゃないかなという風には思ってるんですね。なので市役所を建てる時には、市民広場と一体で、意見たくさん出てるんですけど、やはり計画すべきじゃないかという風に思ってます。そうするためには、いろんな部局の方との横断的な協力体制というのが必要になってくると思うので、そういうチームづくりも含めたデザインというのが重要なんじゃないかなという風に思ってます。あとは、さっき、若い人が気軽にお店を出せるようになっていう話が、駐車場の使い方とか出てたんですけど、1階の食堂を外に出してはどうかという話もあったんですけど、期間限定のチャレンジショップみたいなものを1階に作ってみてはどうかという風に思います。新しい仙台市の産業だとか、人だとか、市役所で働いている人を含めて、住民も含めて、市庁舎が育てていけるような状況が作れるといいなと思ってまして、そういう意味でのコワーキングスペースだとか、あとはそれを実現化するのにちょっと手助けできるようなチャレンジショップだとか、そういったものがあるといいなと思いました。

山田：皆さんと同じなんですけれども、低層階の機能が決まらない限り、配置の評価もなかなか難しいかなとも思ってます。色んなケースが考えられるんですけども、一番シンプルというか、配置でものを言えるとすれば、市民広場の延長に低層階が純粋に屋内型の広場になるというね、できる事なら屋内型の公園になるといいんですけども、そういう前提であると、必ず既存の市民広場とセットでこの低層階というのが、一体のものとして評価をするというような見方もあるのかなとも思います。そうすると、変に屋外広場のあるなしとか、配置も市民広場との連続性を考慮したときに、低層階の配置がうまく繋がるのかとかですね、そんなような評価になっていくのかな、と思います。どれがいいかというのはわからないですね。

伊藤：我々もプロポーザルを出すときに、先ほどあった正面性、一番町商店街通りからの軸線みた

いな話は、地元の方に聞いて、むしろかなり気に入ったんです。委員会の中でもそうですし、先ほどの前回もそうですし、でも軸の話がされる方って必ずいて、そんなに小さい話だという風には聞こえてないんですけど、どうなんですかね。むしろ、歴史的には、やはりこういう流れというのがあり、むしろ広場の方が変形したわけであって、本来であれば、ある種の歴史的正面性というか、そういうものっていうのがあるんじゃないかと考えました。ま、なのでそういう感覚からすると、西側配置の方が、むしろ、そっぽ向いているなという感じがしちゃって、裏を作っちゃってる感じがあります。たまたま中央配置っていうので、私どもはプロポーザルで出したんですけど、これが必ずしもすごい正解だとも思ってないですけども、折角なんで杉山先生どうなんでしょう。

杉山：私の個人的な感覚かもしれませんが、一番町から時計が見えたり、あるいは昔のタワーがあったり、という思い出から、何かしらの視覚的なアイストップが欲しいという方は多いのではないのでしょうか。しかし、一番町から真っ直ぐに市役所に向かって大量の人間が、黒ビルの西側の寂しい道を通って進むことを受けて正面性を作るというのは違うと思います。将来的に10年、20年、50年後まで黒ビルがあるとは限りませんし、もちろん市民広場も変わっていくでしょうから、決して一番町からの流れを否定するわけではないんですが、それにしても、人の動線と、高層建物の正面性をどこに向けるのか、という話は別なのだろうと思います。建物としての正面性は、先程も言いましたが、もっと大きなスケールで見て、周辺の緑地や県庁、議会棟、合同庁舎まで含めて考える必要があると思います。

佐藤：軸線についてご意見ありますか。

錦織：折角なのでいろんな意見が出た方がいいかと思って、私の個人的な意見を話させていただこうと思うのですが、軸線はあってもいいかなという風には思っていて、というのは、その割と東側の歩道というのは、歩きやすい分、スピードも早いというか、通り過ぎていくような感じのイメージがあるんですね。色々ぶらぶらしたりだとか、あちこち見て歩いたり、ということを見ると、アーケードから延長線上あるような通り道が市役所までであるといいんじゃないかという風には思っていました。それから、引きを取るか、どうか、ということですが、逆にもしかしたら建物がある方が寄り付きやすいのではないかなという風にも思ったりもしています。今の県庁自体はなかなか、近寄りがたい雰囲気があるので、もう少し市民が出入りしやすいようなことを、広場だけではなくて建物で考えていってもいいんじゃないかなとちょっと思ったりもしていました。一意見としてとらえて頂ければと思います。

洞口：私も一意見なんですけども、さっきも低層部の使い次第で配置も変わってくるんじゃないかという話はあった中で、逆に言うと高層部というのはランドスケープ上で結構、そこで決めてしまってもいいのかなというのがあるって、一番は、アーケードって囲われて屋根もあってという中で正面に見えてくる、時計塔のイメージとかは結構、象徴的でいいかなとはおもっていて、そういう意味で例えば、黒ビル側に例えば高いものを全部寄せてしまって市民広場とか県庁よりの道っていうのは高層のものではなくてもう少し、低層で市民に開かれたようなイメージもあるのかなと。例えば西側配置案の低層部分をL字型に曲げたようなものとかで、もう少し県庁側の道、東二番町通りに低層部分がはみ出してきたような形でその部分が市民に開かれているっていうのもあるかなって思っていて、そうすると結構道を歩いてい

る人にとっても建物が近く感じて、かといって圧迫感がないっていうのがあるので高いボリュームは、全部今の黒ビルにある方に寄せてしまって、そっちの広場の方には低層のもので市民に親しみやすい機能を入れてしまう。外観的には圧迫感のないものをついていうのも、L字型案みたいなものも可能性があるのかなと思ってなんとなく思いました。西側の高層部分をこっちに寄せて、なんか、道にはみ出すようなイメージもありかな、とはなんとなく思っていました。一つの意見です。

高野：配置は後でっていうって、言いにくいんですけど、もしやるのであれば、僕は、駐車場も含めてもっと低層ってありかなって、思ってます。検討委員会でも姥浦先生だったかな、が言ったと思うんですけど、縦移動って結構、難儀なんですよ。横移動の方がしやすいということもあると思うので、上の上層の機能を考えても、極論を言ってしまうえば、屋内の広場を作るのであれば、もうフットプリント全部でもいいくらいのフルでやって、で、フルだと、一番低いのってどこなのって、周りよりも低いぐらいの、で逆に屋上を開放するっていうのもありだと思うんですよ。そういう極論の案があってもいいんじゃないのっていうのは正直思います。なんか、概念ぶっ壊してもいいのかなって。それで意見を聞くのであれば、そういうのがあっても、役所＝高層みたいなのってどうかなとも思うし、仙台市の規模なのでなかなか難しいとは思いますが、例えば1階・2階の手前側、定禅寺通り側をアトリウムみたいな感じにしてしまうっていうのも一つの手だし、あるいはピロティっていう考えもあると思うし、車寄せも中に入れちゃって駐車場は場合によっては地下に埋めちゃって、みたいなことをしてしまうと、あるいは、駐車場が屋上でもいいくらいだと、思ってるんで、なんかもう、全部の配置計画が、駐車場結構ボリュームが多いな、というのちょっと気になってはいたので、その辺ですかね。そういうところを、今配置計画やっている中でいろんな要素が出てきていると思うんで、それをいったん、ソフト側の検討にもう一回戻して頂いて配置計画を一旦ストップしてまた戻る、みたいなのをやるべきだと思うんですよ。両方やらないといけないのはわかりますし、何かしら形を決めないと次の検討が厳しいという話はわかるんですけど、これってできるのが10年後とかの話なんで今やらなくて、いつやるの、っていうところだと思うのでやってほしいなと思います。

伊藤：プロポーザルで考えてる時に、先ほどあった西に寄せた時に、西側にもものすごく巨大な壁と裏を作りだすんですけどそれって気になりませんか？

高野：個人的な意見ですけど、そこまで気にするような人たちがそこにいるとはあまり思えない。その人たちが、市役所に対してなんか、って聞いたことがあまりないというか、今がそういう状況だからかもしれないし、実際に大きな壁ができてみないとわからないというところはあるかと思うんですけども。

伊藤：多分これの半分ぐらいの高さの一般的に31mとか、40m弱ぐらいの建物が道路に面して寄るっていうのは何となくあり得る、と思うんですけど、80m級のものになった時に一般的にはそっちに寄るっていうのはなかなか考えにくい。

佐藤：その辺りの皆さん、定禅寺通りにみんな流れるイメージじゃないですか？そっちの市役所に対してとか。

伊藤：以外に裏の話が出ないんで不思議だなといつも思っているんですけど。

杉山：中層2棟案がありましたけれども、あの2棟案をL型に配置し、東南のまとまった広場を囲

むくらのほうが、いろんな意味でバランスが良いと思います。

高野：1階、2階が開けていけばいいんじゃないですか、壁じゃなくて、例えばガラス張りじゃないけどアトリウム的な感じになってれば、壁はそんな目線、上にあげるかということ、そうでもない気がして1階、2階レベルの話だと思うんで。あと日陰落ちるか落ちないかとか、根本的な話だと思うんで、場合によっては市役所にアンケートでも取ってもらって。その方々を集めてもらって話し聞くっていうのもあれかと思いますが、大変だと思いますけど。

佐藤：周辺住民の方との対応も多分色々あるんでしょうから市役所としては厳しいのかもしれませんが。

そのほかご意見ありましたら。

高野：佐藤さんに聞きたいんですけど。ご存じじゃない方もいらっしゃると思うんで、市民広場、都市デザインワークスさんが、色々なこれに関するイベントで市民広場との関係性とか、そういうの何度もやられてると思うんでそういう立場からのご意見もここで言って頂けるといいんじゃないかなと思うんですけど。

佐藤：去年の基本構想段階の時から、多分、広場の関係性が一番、市民側からすれば関心が高いだろうな、ということでそう思ってやってきてます。この2棟案の話も我々のワークショップの時にも出てました。ただやはり、色々この辺で活動していると、実はこのあたりの意見っていうのも聞こえてはきてます。あまり寄ってほしくないというのは直接は、私も聞いたこともあるので、結構きびしいのかなというのは、正直なところありますね。

確かにさっきのプロポーザルで拝見した、あの低層部の考え方というのは、我々のワークショップの中でも出てこなかったんで、すごくこういう風を取れると確かに何か可能性があるなという風には、実は思ったんですね。ただその案が今、検討には入ってないんですね。

低層部を切り離して考えるといったときに、今日のご意見にもあったんですけども、屋内広場をしっかりとる、ということですよ。あるいは、中庭のようなものを取るというような案もあったので、今色々な配置でかなり広くとってるんですけど、もう少し広場のスケールは、こっち側の広場のスケールなブレイクダウンしてもいいのかなと思っています。当然ここの引きはあるので寄ってくるとちょっとつらいのですが、そんなにここのスペースが大きくなってもいいんだらうかと、私も個人的意見ですけど思います。その分を中にアトリウムか何かで広場をとってあげるというのがすごくいいのかなと思っています。あとはこの道路ですね。土日くらいだったら歩行者天国くらいできるんじゃないか、という話があって、非常に期待してるんですけど、ただ、とは言っても普通の日には、車を通さないといけないうすからそのしつらえですね、街路樹も含めて、この辺もやるのであれば、レベルも含めてたぶん、やりなおすというか、多分ここのしつらえがうまくいけば、引きをあまりとらなくても充実したものにできるんじゃないかと思っています。

村山：配置から離れていいですか？

・コンテンツ

歴史、仙台のまちづくりの歴史をまとめて見れるところがない

・デジタルアーカイブでもよいが、まちへの愛着、まちづくりへの関心

・観光

屋内広場 観光に関する、コンテンツがあれば

## 低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える C2

錦織：最後にこれは言っておこうと思っていることがあります。もちろん、機能としては入っているのですが、やっぱり託児所がほしいなと思います。私も6ヶ月の子どもがいるのですが、今日、ここへ出てくるのも結構大変でした。今日のラウンドテーブルの場に洞口がお子さんと一緒にいるのも結構いいなと思います。来られない人も来れるようにしてほしいです。

高野：ビジットセンター

杉山：アエル、ガス局、メディアテーク、市役所 → ホットパーク、情報

以上